東三河津波歴史調査
研究業務報告書

平成２４年２月

東三河地域防災研究協議会

目　次

頁

はじめに

第１章　東三河地域における津波被害を起こした地震の歴史

１－１　調査の方法 …… 1

１－２　東三河地域における津波被害を起こした地震の歴史 …… 2

１－３　各市におけるこれまでの最大の津波 …… 9

第２章　各市における津波被害の歴史

２－１　豊橋市 …… 29

２－１－１　三河湾沿岸 …… 29

２－１－２　太平洋岸 …… 34

２－２　豊川市 …… 45

２－２－１　地震による津波被害 …… 45

２－２－２　地震以外の津波（高潮・洪水）被害 …… 47

２－３　蒲郡市 …… 49

２－３－１　地震による津波被害 …… 49

２－３－２　地震以外の津波（高潮・洪水）被害 …… 52

２－４　田原市 …… 54

２－４－１　三河湾沿岸 …… 54

２－４－２　太平洋岸 …… 58

第３章　津波の影響を受けた寺院・神社、史跡、言い伝え

３－１　地震による津波被害を受けた寺院・神社 …… 71

３－２　地震による津波被害を伝える史跡 …… 78

３－３　地震による津波被害の言い伝えと「津波てんでんこ」にみる教訓 …… 81

参考資料１　津波による各地域の被害状況と影響

参考資料２　各市における津波被害年表

参考資料３　関係者へのヒアリング調査結果

参考資料４　参考文献一覧

はじめに

2011 年 3 月 11 日 14 時 46 分、三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の地震が発生し、宮城県栗原市で震度 7、宮城県、福島県、茨城県、栃木県の 4 県 37 市町村で震度 6 強を観測した。この地震により、東北地方太平洋岸をはじめとして全国の沿岸で津波が観測された。各地の津波観測施設では、福島県相馬で 9.3m 以上、宮城県石巻市鮎川で 8.6m以上など、東日本の太平洋岸を中心に高い津波を観測したほか、北海道から鹿児島県にかけての太平洋岸や小笠原諸島で 1m 以上の津波を観測した。また、津波観測施設およびその周辺において、現地調査を実施し、津波の痕跡の位置等をもとに津波の高さの推定を行った結果、地点によっては 10mを越える津波の痕跡を確認した。

この津波により東日本の太平洋岸各地で甚大な被害が発生した。この地震（津波及び余震を含む）により、死者 15,401 人、行方不明 8,146 人、全壊家屋 112,490 棟などの甚大な被害を生じた（平成 23 年 6 月 9 日現在、緊急災害対策本部による）。気象庁はこの地震を「平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震」と命名した。この地震は、国内観測史上最大規模の地震であった。（以上、平成 23 年 8 月 17 日気象庁「災害時地震・津波速報 平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震」を元に作成）

東海地震は、駿河湾から静岡県の内陸部を震源域とするマグニチュード 8 クラスの巨大地震で、その発生の切迫性が指摘されている。その根拠として、過去にこの地域で発生した大地震の歴史が挙げられる。駿河湾内にある駿河トラフから四国沖にある南海トラフにかけてのプレート境界では、過去 100 年から 150 年おきに岩盤がずれてマグニチュード 8 クラスの巨大地震が繰り返し起きていたことがわかっている。しかし、前回の地震（東南海地震（1944 年、マグニチュード 7.9）、南海地震（1946 年、マグニチュード 8.0））の際には南海トラフ沿いの岩盤だけがずれて、駿河トラフ沿いの岩盤だけがずれずに残ってしまったため、駿河トラフ周辺の部分の岩盤は 150 年以上もずれていないことになり、「東海地震はいつ起こってもおかしくない」と言われている。

東海地震が発生すると、太平洋岸の広い地域に津波の来襲が予想される。特に、伊豆半島南部、駿河湾から遠州灘、熊野灘沿岸及び伊豆諸島の一部では 5m から 10m、ところによってはそれ以上の大津波となるおそれがある。相模湾と房総半島では、ところにより 3m 以上と予想される。以上のような地震の揺れや津波等により、建物全壊約 26 万棟、死者数約 9,200 人、経済的被害約 37 兆円という甚大な被害が予想される（内閣府による）。（以上、国土交通省気象庁ホームページを元に作成）

東北地方太平洋沖地震では、地震のみならず津波に対し日頃から意識していたか、迅速に行動ができたかが生死を分ける要因となったと言われている。東三河地域では東海・東南海地震の発生が危惧されているが、東北地方太平洋沖地震でも明らかになったようにハード整備による防災には限界がある。住民自らが地震や津波に対し意識し、災害時に迅速に対応できるようにすることにより被害を軽減することができると思われる。

こうしたことを踏まえ、本調査では東三河地域住民の津波に対する関心や、日頃から具

体的な対応を考える意識を高めるため、東三河地域沿岸域（豊橋市、豊川市、蒲郡市、田原市）を対象として、地域住民に身近な津波の歴史とその被害を受けた地区等における対応について整理し、津波に対する意識啓発を図るための資料作成を目的とした。

なお本調査を進めるにあたって、愛知大学 藤田佳久 名誉教授からの指導をいただき、各自治体の有識者（博物館学芸員等）からの協力を得ながら古文書等を活用して、津波の規模や、津波災害による被害状況、さらには被災地がどのように津波に対応してきたかを整理した。併せて、関係者のヒアリング調査を実施し、津波に関して地域に受け継がれている寺院・神社や史跡、言い伝え等を整理しとりまとめた。

本調査にご協力いただいた関係者の方々に、深く謝意を表します。

平成 24 年 2 月

東三河地域防災研究協議会

第１章　東三河地域における津波被害を起こした地震の歴史

１－１　調査の方法

（１）調査の方法

東三河地域沿岸部（豊橋市、豊川市、蒲郡市、田原市）を対象地域とし、これまで発生した津波の発生時期、その被害内容、それによる地域づくりへの影響等について、次の方法により調査を実施し、取りまとめを行った。

（１）－１　史料調査

地方自治体史の古文書が残っている 16 世紀から現在までの郷土・歴史書類・文献などの史料について、調査し地震津波の被害を取りまとめた。資料の中の古文書については、有識者と連携し調査を実施した。特に参照とした史料は以下のものである。

①飯田汲事　1985　東海地方地震･津波災害誌(飯田汲事教授論文選集)
- 昭和 20 年 1 月 13 日三河地震の震害と震度分布
- 明応地震・天正地震・慶長地震・宝永地震・安政地震の震害と震度分布
- 明治 24 年（1891 年）10 月 28 日濃尾地震の震害と震度分布
- 昭和 19 年 12 月 7 日東南海地震の震害と震度分布
- 愛知県及び隣接県被害津波史
- 東海地方の津波災害及び防災上の問題点

②愛知県　愛知県災害誌（昭和 45 年 3 月発行、平成 5 年 3 月発行）

③豊橋市　豊橋市史（第一巻、第二巻）、とよはしの歴史

④豊川市　御津町史（本文編、史料編　上編、史料編　下編）、小坂井町誌

⑤蒲郡市　蒲郡市史（本文編 2　近世編、本文編 4　現代編）、蒲郡市誌、わすれじの記、形原災害記録

⑥田原市　田原町史（中巻）、赤羽根町史、赤羽根の古文書（近代史料編、近世史料編）、渥美町史（歴史編　上巻、資料編　下巻、資料目録編）、田原市博物館研究紀要（第 3 号、第 4 号）、渥美町郷土資料館研究紀要（第 2 号、第 7 号）、田原の文化（第 33 号）

（１）－２　ヒアリング調査

東三河沿岸部の自治体、大学研究者や郷土の歴史研究者等の有識者、寺院の住職等へのヒアリング調査を実施した。

（１）－３　その他の調査

多方面からの情報を収集するため、各市の広報紙等を利用し広く情報提供（平成 23 年 11 月末～平成 24 年 1 月上旬）を呼びかけた。

（２）調査における留意点

本調査を取りまとめるにあたって、以下の点に留意した。

① 宝永 4(1707).10.4 の地震・・・同日の 12～13 時と 13～15 時に 2 度大地震が発生している。東海地方地震･津波災害誌では、この 2 度の地震を「宝永地震」として記録を取りまとめていることから、本調査でもそれに従った。

②嘉永 7(1854).11.4-5 の地震・・・4 日と 5 日に大地震・津波が発生している。東海地方地震･津波災害誌では、愛知県の場合は「主として嘉永 7(1854).11.4 の地震の震害」としている。しかし、他の史料では 5 日の津波被害を記録しているものや、どちらとも記録していないものもあり判断ができないため、本調査ではこの 2 つの地震を「嘉永 7 年の地震」として取り扱った。

③渥美（表浜、裏浜）・・・東海地方地震･津波災害誌では、被害場所の地名において「渥美」と記録されているところがあるが、具体的な場所を示していない。本調査では「渥美」を渥美郡の範囲（豊橋市の大半（豊川・朝倉川の南側）と田原市の全域）を示していると考え、渥美を豊橋市と田原市の 2 市を指すものと考えた。また渥美表浜は両市の太平洋岸、渥美裏浜は両市の三河湾沿岸とした。

④吉田・・・東海地方地震･津波災害誌では、被害場所の地名において「吉田」もしくは「吉田(豊橋)」と記録されているところがあるが､具体的な場所を示していないため、本調査では三河湾沿岸の豊橋地区全域を示すものとした。

⑤赤羽根・・・東海地方地震･津波災害誌では、「赤羽根」という地名が、江戸時代の赤羽根東村、同中村、同西村を示している場合と、池尻、若見地区を含めた地域を示している場合があると思われ、本調査では、「池尻」「若見」の地名と併記されている場合は前者、「池尻」「若見」の併記されていない場合は後者として、その都度使い分けて取り扱った。

１－２　東三河地域における津波被害地震の歴史

東三河に津波被害を及ぼしたと推定される既往の地震を選定し、その津波被害の概要を表１－２－１に示した。

なお、表にある県内震度は、気象庁震度階で県内における最大（推定）震度を示し、津波規模は、地震による津波全体から判断したもので、県内の津波だけから判断したものではない。県内震度の階級を表１－２－２、津波規模の階級を表１－２－３に示した。

表１－２－１　東三河地域における既往の津波被害地震年表（１）

番号	西暦 年月日 和暦 年月日	東経(度) 北緯(度) 震央地名	地震規模 M 深さ	県内最大震度	津波規模	東三河地域での地震による津波被害	わが国全体の地震の被害状況
1	1096.12.17 嘉保 3(永長 1). 11.24 8 時頃 (②)	137.5 34.0 遠州灘 (②)	8.4 (②)	Ⅵ-Ⅶ (①)	2 (①)	・被害があったと推定。(②) ・三河湾沿岸:渥美半島裏浜　波高 3mで所により 4m。堤防破壊、家屋流失、死者、浸水も著しく田畑等に被害。(②を元に作成) ・太平洋岸:渥美表浜 波高 3-7m。船の破損、魚網、魚具類の流失などの被害あり。(②を元に作成)	・京都で大極殿破損、東大寺の巨鐘落ち、薬師寺廻廊転倒、東寺塔の九輪落ち、法成寺・法勝寺にも小被害あり、近江の勢多橋落ちた。余震多し。(①) ・津波駿河、伊勢津を襲う。寺社・民家の流出 400 余波高津市 4-5m。(②)
2	1498.7.23 明応 7. 6.25 8 時頃(①)	137.3 34.8 三河 (①)	5-6 (①)	Ⅳ (①)	—	・震動強く豊川の河流が変化した。(①) ・三河湾沿岸:草間(豊橋)では、大津波によって海辺の多くの人々が住まいを破壊された。(校区のあゆみ　磯辺)(草間区地誌略)	・三河地方の地震で豊川付近地変あり。(①)
3	1498.9.20 明応 7. 8.25 4 時頃(②)	138.1 34.0 遠州灘 (②)	8.3 (②)	Ⅴ-Ⅵ (①)	3 (①)	・渥美は地割れし、同時に大津波がきて人家倒壊、死者がでた。(①) ・三河湾沿岸:渥美裏浜 津波 3-4m。豊橋での被害が大きかった。(②) ・太平洋岸:渥美表浜 津波 5-8m。(②)大地震津波襲来。(校区のあゆみ　高豊)	・浜名湖周辺で地盤の破壊沈下し、浜名湖海に通じた。焼津の瀬戸川下流域、津も地盤沈下した。天竜川、太田川、菊川各流域で山崩れが多く、富士川上流でも山崩れあり。菊川下流域で噴泥水あり。熊野本宮、那智の坊舎倒壊、湯峯温泉湧出止る。(②) ・紀伊より房総まで津波、伊勢大湊で流失家屋千戸、溺死者 5 千人、伊勢志摩で溺死者 1 万人。焼津地方流失家屋 2 千戸、溺死者 2 万 6 千人。 浜名湖周辺で流失家屋 4 千 5 百戸、溺死 1 万人。伊豆仁科郷で海岸から 2km 内陸へ浸入、八丈島で死者 1 人。全体で家屋流失倒壊約 8,500 戸、死者約 5 万 1 千人であった。(②) ・余震 10 月頃まで続く。(①)
4	1586.1.18 天正 13. 11.29 23 時頃 (②)	136.8 35.0 伊勢湾 (②)	8.2 (②)	Ⅵ-Ⅶ (①)	2 (①)	・津波が起こり、家屋の流失、人畜の死傷もおびただしく。(田原町史　中巻)	・畿内、東海、東山、北陸諸道大地震、震害は伊勢湾北部から琵琶湖岸に達する地域に大きく、長島・亀山・桑名・大垣・長浜諸城が倒壊した。岡崎城大破、浜松城破損。飛騨白川谷の庄川流域、越中射水川上流の小矢部川流域、長良川上流域における山崩れによる被害大きく、帰雲城、木船城が埋没した。木曽川下流域では沈没した島々が多い。(②) ・伊勢湾北部沿岸地域、伊勢大湊等は津波による被害を受け、溺死者多く、流失家屋もあった。琵琶湖でも波高く、沿岸に溢れ、付近人家を洗い去った。伊勢度会郡穂原に津波あり。この地震による被害全体で家屋・寺社等の倒壊は約 14,000、死者は約 9 千人であった。(②)

表１－２－１　東三河地域における既往の津波被害地震年表（２）

番号	西暦 年月日 和暦 年月日	東経（度） 北緯（度） 震央地名	地震規模 M 深さ	県内最大震度	津波規模	東三河地域での地震による津波被害	わが国全体の地震の被害状況
5	1605.2.3 慶長 9. 12.16 19～21 時頃 （②）	137.8 34.0 東海道沖 （②）	8.0 （②）	Ⅳ （①）	3 （①）	・津波の襲来はあった。（①） ・三河湾沿岸：吉田　津波の高さ 3m。田原　波高 2-3m。（②） ・太平洋岸：渥美半島堀切片浜（表浜）　波高 5-6m。片浜の船皆打ち破れ、漁網も流失した。（②）（常光寺年代記）	・東海道地震及び南海道地震震害は淡路島安坂千光寺諸堂倒れ、仏像が堂前に飛散した。掛川城も震害あった模様。（②） ・犬吠岬から九州に至る津波、八丈島谷ヶ里残らず流失死 57 人、田畑損亡、大賀郷・三根の民家流失、土佐三崎溺死 153 人、上総勝浦人馬溺死、浜名湖橋本で 100 戸中 80 戸流失、死者多数、紀州西岸広村 1,700 戸中 700 戸流失、阿波の鞆浦で波高約 30m、死 100 人余、宍喰で津波高約 6m、死 1,500 人余、土佐甲浦で死 350 人余、崎浜で高さ 8-10m、死 50 余人、室戸岬付近死 400 人余、九州大隅より薩摩に大波死者あり。大湊被害大、津、浦村などで地震後潮引き後大波襲来。八丈島波高 10m。（②）
6	1677.11.4 延宝 5. 10.9 20 時頃 （②）	141.5 34.7 房総半島 南東沖 （②）	7.4 （②）	—	—	・尾張、渥美　波高 2m。（②）	・津波関係：紀伊半島より陸前地方に及ぶ。小名浜、神白、永崎にて溺死者 80、水戸領内で壊家 189、溺死者 36、舟流失 353。房総で壊家 223、溺死 261、奥州岩沼で流家 490 余、死者 123、八丈島と尾張に津波。合計流失家屋 1,000 余、溺死者 500 余人。（②）
7	1703.12.31 元禄 16. 11.23 2 時頃 （②）	139.8 34.7 房総沖 （②）	8.2 （②）	—	—	・渥美　波高 2m。（②） ・津波により、渥美半島では死者が多く、船、網、漁具等が流失した。（③）	・武蔵、相模、安房、上総の諸国震度大、小田原大火災、壊家 8,007、内焼失 563、死者 2,291、江戸も火災、本所も壊家多数。三浦、房総半島沿岸が最大 5.5m 隆起した。（②） ・下田付近から犬吠岬に襲来、相模湾沿岸、大島、八丈島など被害。地震・津波で壊家 20,162、死者 5,233 人。（②）
8	1707.10.28 宝永 4. 10.4 12～13 時 （②）	137.8 34.1 東海道沖 （②）	8.3 （②）	Ⅶ （①）	4 （①）	・渥美の太平洋岸に津波の被害が大きく、また三河湾・知多湾・渥美湾にも津波が浸入し、田原にも大被害を及ぼした。（①） ・三河湾沿岸：渥美裏浜　波の高さ 3-5m。（②）被害の大きかったのは野田村の七郷（津波被害は不明）。（常光寺年代記）蒲郡・御津では塩田被害。（蒲郡市史、御津町史を元に作成）、豊橋・田原（汐川）では新田被害が大きかった。（②を元に作成） ・太平洋岸：渥美半島表浜 6-8m で、場所により 10m。（②）当浜津波挙り、十三里間の漁船尽く流損し、一村にて一両人宛流死す。（赤羽根町史）（常光寺年代記）	・静岡、山梨、長野各県、東海地方等地震災害あり。伊勢、遠江の堤防破壊、四日市海岸堤防破壊。駿河湾北西岸、富士川流域、太田川流域被害大、浜名湖周辺も被害あり。御前崎 1-2m、横須賀 0.5-1.0m 隆起し、浜名湖周辺数十 cm 沈下、木曽川流域も沈下し、横須賀・浜名湖付近・伊勢湾臨海域では地盤液状化があった。（②） ・熊野灘で波高 11m、高さ5m 以上は駿河湾西岸、遠州灘、志摩半島から熊野灘にかけてであり尾鷲で家屋の流失 1,000 余溺死者 1,000 人余を出している。全体で家の倒壊流失約 1 万、死者 2 千人。（②）

表１－２－１　東三河地域における既往の津波被害地震年表（３）

番号	西暦 年月日 和暦 年月日	東経(度) 北緯(度) 震央地名	地震規模 M 深さ	県内最大震度	津波規模	東三河地域での地震による津波被害	わが国全体の地震の被害状況
9	1707.10.28 宝永 4. 10.4 13～15 時 (②)	134.8 33.2 南海道沖 (②)	8.4 (②)	Ⅴ (①)	4 (①)	・愛知県では津波の高さ約 1m程度。(②) ・1707.10.28(宝永 4.10.4)12～13 時に発生した地震に含まれる。(①)	・東海道沖地震後 1～2 時間で起こり、大被害を与えた。室戸岬で 1.5m、串本 1.2m 土地が隆起し、室戸半島紀伊半島で南東部は南上りの傾動を示した。畿内、四国、九州東部は被害大きかった。(②) ・津波被害は土佐が最も大きく、流失家屋 11,170、溺死者 18,441 人、大阪で流失家屋 603、溺死者 700 余。地震・津波の全体で潰家 29,000 余、死者約 3 万人。(②)
10	1708.2.13 宝永 5. 1.22(②)	137.0 34.3 志摩半島 東方沖 (②)	6.8 又は 7.0 (②)	Ⅳ (①)	1 (①)	・渥美:波高 2-3m。田畑の被害多かった。(②) ・太平洋岸:表浜　所所高汐満チテ、田畑多ク破壊ス。(老津村)(細谷村記録常光寺年代記)	・宝永地震の余震と思われる。津波は伊勢山田吹山町を襲い田畑の被害多し。八丈島に津波きた。(②)
11	1854.12.23 嘉永 7(安政元). 11.4 9 時頃 (②)	137.9 34.0 遠州灘 (②)	8.3 (②)	Ⅵ (①)	3 (①)	・波高 2-10m。三河湾・遠州灘の沿岸に津波が襲来し被害があった。(②) ・三河湾沿岸:渥美裏浜波の高さ 3-4m。堤防が破壊されたり、家屋流失、死者、田畑浸水などの被害。特に豊橋の被害が大きかった。(②) ・太平洋岸:渥美表浜波高 8-10m で被害あり。大津波に襲われたが、倒壊家屋、山くずれがあり、余震は 7 か月ばかりつづいた。(③)漁船の流失・破壊、漁網の流失、家屋の破壊、死者・溺死者を出すなどかなりの被害。(②)	・地震動災害の大きかった所は駿河湾北・西岸、富士川流域、太田川流域の袋井・掛川等、菊川流域の小笠・菊川等、天龍川流域の磐田・豊田・龍洋等である。地盤隆起地帯は御前崎 0.8～1.2m、横須賀 0.5～1.0m、清水 1.5～2m、沈下地帯は浜名湖周辺 0.6m である。地盤の液状化は駿河湾北西部沿岸、太田川下流域、天龍川下流域等である。(②) ・津波は房総から土佐の沿岸に及び、伊豆下田で 875 戸中 841 戸流失、同地に碇泊中のロシア軍艦デイアナ号は大破 27 日沈没した。各地の波高は三重県甲賀村で 10m、相差で 21m、鳥羽 5-6m、錦浦 6m 余、二木島 9m、新鹿 11.5m。被害総計は家屋倒壊及び流失 8,300 戸、焼失約 600 戸、圧死約 300 人、流死約 600 人。(②) ・愛知県被害総計家屋倒壊 1,455、半壊 1,430、流失 2,850、土蔵寺社倒壊 1,423、同半壊 1,771、船流失 278、堤防破損 55km、溜池 52 決壊。(②) ・この地震の発生の後 11 月 27 日安政と改元され、嘉永 7 年を安政元年とした。(①)

表１－２－１　東三河地域における既往の津波被害地震年表（４）

番号	西暦 年月日 和暦 年月日	東経(度) 北緯(度) 震央地名	地震規模 M 深さ	県内最大震度	津波規模	東三河地域での地震による津波被害	わが国全体の地震の被害状況
12	1854.12.24 嘉永 7(安政元). 11.5 16 時頃 (②)	135.0 33.1 紀伊半島沖 (②)	8.4 (②)	Ⅴ (①)	3 (①)	・三河湾・遠州灘沿岸に打ち寄せられた津波による被害もあり。(蒲郡市史　本文編 2 近代編) ・三河湾沿岸:西浦村は松島を波が打ち越し、5 人の家に海水が入った。(新収日本地震史料　続補遺別巻(東京大学地震研究所))(形原役所記録) ・太平洋岸:堀切・熊野浦・伊勢路に巨大津波が襲撃。(逐城解説　詳説・吉田城と池田照政 ～ついに判明！吉田城本丸天守(代用)鉄三重櫓の概観全貌とその最期～)(『西村次右衛門日記』豊橋市史々料叢書二･三)を元に作成) ・赤羽根は津波は当所に至りては軽し。(研究輯録　三遠の民俗と歴史)	・地震被害は近畿、中国、四国の全部と九州、中部の一部に及び広範囲で火災を伴う。地盤隆起は室戸 1.2m、串本 1.2m。沈下は高知及び須崎で 1～1.6m。甲浦・加太で、1m 沈下浸水。(②) ・津波は房総から九州東岸に及び大阪湾に浸入して大被害。高さ紀伊半島で 9m、高知付近 28m、甲賀 10m。 被害総計家屋全壊約 2 万戸、同半壊 4 万戸、同焼失 6 千戸、同流失 1 万 5 千、死者 3 千人。(②) ・津波の高さは 2 丈余り(約 6 メートル)で、舞阪で 45 軒、新居の本町で 3 軒流失した。(校区のあゆみ　細谷)
13	1855.11.7 安政 2. 9.28 18 時頃 (②)	(137.6) (34.5) 遠江沖 (②)	7.0 (②)	Ⅴ-Ⅵ (①)	—	・渥美半島表浜:魚網の流失などの被害がみられているので波高は3mくらいあったと思われる。(②) ・表浜通り高潮にて網流る。浦・波瀬は破損なし。野住古屋掛 10 日許りした。(①)	・安政地震の余震。掛川熊村潰家。浜松・入野・米津・篠原等家屋倒壊、白羽・中田島・舞坂宿東方八町縄手等地割し、噴泥砂した。(②) ・津波関係:尾鷲 1.8m、伊勢 2m、九鬼 1.2m、下田 1m。(②) ・津波が渥美半島太平洋岸に襲来して被害を生じた。(①)
14	1944.12.7 昭和 19 13 時 35 分 (②)	137.1 34.0 東海沖 (②)	8.0 0-30km (②)	Ⅳ (①)	3 (①)	・渥美では田原や福江に家屋の被害がひどく、遠州灘側では赤羽根村の被害が大きかった。渥美・幡豆郡では噴砂泥水箇所が多くみられ液状化現象が現われた。(①) ・三河湾沿岸:1mくらいの津波がみられたが被害はなかった。(①) ・太平洋岸:津波の高さ 1-1.5m。被害も生じていない。(②)	・地震被害は静岡、愛知、三重、奈良、滋賀、大阪等の各府県に多く、特に愛知、静岡両県の被害は大きかった。紀伊半島東岸、伊勢湾地域は 30cm から最大 1m に達する沈下があった。遠州灘及び名古屋臨海部で砂泥水の噴出があった。(②) ・津波は銚子から土佐清水に至る広範囲に来襲した。高さは志摩半島南岸で 8m、熊野灘沿岸で 8-10m、木の本・新宮間 3m、御前崎下田間 2m、柿崎 2.5m、被害総計死者 1,223 人、負傷者 2,864 人、住家全壊 17,599、同半壊 36,520、非住家全壊 17,347、同半壊 24,473、流失家屋 3,129、焼失家屋 13。(②) ・愛知県下で死者 438 人、負傷者 1,148 人、住家全壊 6,411、同半壊 19,408、非住家全壊 10,121、同半壊 15,890 棟となっている。(②)

表１－２－１　東三河地域における既往の津波被害地震年表（５）

番号	西暦 年月日 和暦 年月日	東経（度） 北緯（度） 震央地名	地震規模 M 深さ	県内最大震度	津波規模	東三河地域での地震による津波被害	わが国全体の地震の被害状況
15	1945.1.13 昭和 20 3 時 38 分 （②）	137.2 34.7 三河湾 （②）	7.1 0-10km （②）	Ⅶ （①）	-1 （①）	・三河湾沿岸：1m内外の津波が発生したが被害はなかった。（①） ・蒲郡：岸壁では 1mほどの津波が襲来し、岸壁の上まで水が来たという。ここでは津波が 1 回で次第に高くなったようである。この津波によっては殆ど被害がなかった。（②） ・塩津：塩田の周囲の高さ 1.5mの堤防の一部が東南海地震で 1m沈下したが、そこがさらに三河地震で幅 10mほど決壊したため海水が浸入した。（②） ・形原：形原町音羽の東から江川下市辻新田方面 0.7mの沈下を見る。それは蒲郡市府相の海岸辺に及んでいる。（形原震災記録）	・地震被害が大きく、震源地に近い幡豆郡の被害が特に大きかった。全体で、死者 2,306 人、負傷者 3,866 人、住家全壊 7,221、同半壊 16,555、非住家全壊 9,187、同半壊 15,124 となった。この地震でできた著しい主断層延長 28km の付近に被害が集中した。断層の落差の最大は 2m で、たてずれ逆断層であり、隆起沈降の地変も現れた。三河では全壊率が 30%以上の町村は 6 ヶ町村で、福地村では最大の 68%に達した。名古屋市港区・南区でも死者・負傷者、家屋の全・半壊被害を出した。中島郡でも被害があった。津波最大高さ蒲郡で 1m、千間で 62cm、名古屋・豊橋・師崎でも津波がみられた。（②）
16	1946.12.21 昭和 21 4 時 19 分 （②）	135.6 33.0 南海沖 （②）	8.1 20km （②）	Ⅴ （①）	3 （①）	・渥美湾では小さな津波があったが被害はなかった。（①） ・形原漁港：二メートルを超す潮位を観測。（伊古部郷土誌）	・震害は四国、九州、近畿、中国地方に及んだ。室戸崎、紀伊半島は南上りの傾動を示し、室戸岬で 1.27m、潮岬で 0.7m 隆起、須崎及び甲浦で 1m 沈下、高知市付近沈下し、田園 15k ㎡が海面下に没した。（②） ・津波は九州から静岡県に達し、紀伊半島南端袋で高さ 6.6m、三重・徳島・高知の沿岸で 4-6m に達した。被害総計は死者 1,330 人、行方不明 113 人、負傷者 3,942 人、家屋全壊 11,591、同半壊 23,487、同流失 1,451、同浸水 33,093、同焼失 2,598、船舶破損流失 2,991 となった。（②）
17	1960.5.23 昭和 35 4 時 11 分 （②）	73.5W 38S チリ南部沖 （②）	8.25～8.5 （②）	—	4 （①）	・チリ津波が襲来し若干の被害があった（24 日）。（①） ・三河湾沿岸：波高はいちじるしく低く、渥美湾沿岸の一部に若干の家屋浸水をみた程度の被害。（③） ・太平洋岸：潮位はいつもより二メートルほど高く、満ちひきの差も三倍ほど大きい。（中部日本新聞（1960.5.25））	・チリ地震津波。津波が日本沿岸各地に襲来した（24 日早朝）。（①） ・津波は太平洋沿岸全域に波及し、チリ・ハワイ・日本の各沿岸で大被害。高さ北海道東岸で 0.4-5.0m、三陸沿岸で 0.6-6.4m、関東以南の沿岸 1-3m、チリで 25m、日本の死者 119 人、行方不明 20、負傷者 872 人、家屋流失 2,830、床上浸水 19,863、船舶その他多数破損、熊野灘の養殖真珠に対する被害大。（②）

表１－２－１　東三河地域における既往の津波被害地震年表（６）

番号	西暦 年月日 和暦 年月日	東経(度) 北緯(度) 震央地名	地震規模 M 深さ	県内最大震度	津波規模	東三河地域での地震による津波被害	わが国全体の地震の被害状況
18	2010.2.27 平成 22 (④)	72.719 35.846 チリ中部沿岸(④)	8.8(④)	—	—	・28 日に田原市赤羽根で 0.7m(東海地方で最高)、1 日に豊橋市三河港で 0.1m 観測した。人的被害は特になかった。(中日新聞(H22(2010).3.1)を元に作成)	・28 日に久慈港で 1.2m、仙台港で 1.1m、根室市花咲で 1.0m を観測。人的被害の情報はなく、住宅被害として、宮城県で床上浸水 6 棟、床下浸水 43 棟、静岡県で床下浸水 8 棟であった。漁船 7 隻が被害にあい、漁具や施設(養殖等)にも被害があった。(④)
19	2011.3.11 平成 23 14 時 46 分 (⑤)	142.9 38.1 三陸沖 (⑤)	9.0 24km (⑤)	—	—	・田原市赤羽根で同日 16 時 21 分に第一波 110cm を観測し、17 時 32 分に最大の高さの波 155cm を観測。(地震調査研究推進本部事務局(文部科学省研究開発局地震・防災研究課)ホームページ(H23(2011).4.11 地震調査研究推進本部地震調査委員会資料)) ・東三河において、人的被害、建築物被害の記録はなし。(⑤を元に作成) ・赤羽根漁港において、漁船 2 隻浸水(廃船)。(東愛知新聞(H23(2011).3.13)を元に作成)	・津波の最大波(検潮所):北海道えりも町庶野 3.5m、岩手県宮古 8.5m 以上、大船渡 8.0m 以上、釜石 420cm 以上、宮城県石巻市鮎川 8.6m 以上、福島県相馬 9.3m 以上、茨城県大洗 4.0m 以上。 ・人的被害:死者 15,846 名(岩手県 4,667 名、宮城県 9,508 名、福島県 1,605 名)、行方不明 3,317 名(岩手県 1,319 名、宮城県 1,778 名、福島県 216 名)、負傷者 6,011 名(宮城県 4,132 名)。 ・建築物被害:全壊 128,558 戸(岩手県 20,185 戸、宮城県 83,861 戸、福島県 20,009 戸、茨城県 3,070 戸)、半壊 243,486 戸(岩手県 4,561 戸、宮城県 138,220 戸、福島県 63,601 戸、茨城県 23,988 戸、千葉県 9,861 戸)、一部破損 673,397 戸、床上浸水 17,806 戸、床下浸水 15,250 戸。 ・避難者数 341,411 名(避難所の他、親族、知人宅や公営住宅、仮設住宅等への入居者も含む。(平成 24(2012).2.7 現在)(⑤)

（注）①明応地震・天正地震・宝永地震・安政地震の震害と震度分布(著者：名古屋大学名誉教授　飯田汲事、発行：愛知県防災会議地震部会)、② 飯田汲事　1985　東海地方地震･津波災害誌(飯田汲事教授論文選集）、③愛知県災害誌、④内閣府ホームページ（チリ中部沿岸を震源とする地震による津波について H22(2010).4.23)、⑤内閣府緊急災害対策本部ホームページ（H24（2012）.2.7）　（出典：各種資料を元に（社）東三河地域研究センター作成）

表１－２－２　震度の階級表

震度	名称	説　　明
0	無感	人体に感じないで地震計に記録されている程度の地震。0.8 ガル以下。
Ⅰ	微震	静止している人や、特に注意深い人だけに感じる程度の地震。0.8-2.5 ガル。
Ⅱ	軽震	大勢の人に感じる程度のもので、戸障子がわずかに動くのがわかるぐらいの地震。2.5-8.0 ガル。
Ⅲ	弱震	家屋がゆれ、電燈のようなつり下げ物は相当ゆれ、器内の水面が動くのがわかる程度の地震。8-25 ガル。
Ⅳ	中震	家具の動揺が激しく、すわりの悪い花びんなどは倒れ、器内の水はあふれ出る。また歩いている人にも感じられ、多くの人々は戸外に飛出す程度の地震。25-80 ガル。
Ⅴ	強震	壁に割目がはいり墓石、石燈ろうが倒れたり、煙突、石垣などが破損する程度の地震。80-250 ガル。
Ⅵ	烈震	家屋の倒壊は 30%以下で山くずれが起き、地割れを生じ、多くの人々は立っていることができない程度の地震。250-400 ガル。
Ⅶ	激震	家屋の倒壊が 30%以上におよび山くずれ、地割れ、断層などを生じる程度の地震。400 ガル以上。

（注）本表は気象庁による震度。各階級での数字は加速度でその単位はガル（cm/sec2）である。

（出典：明応地震・天正地震・宝永地震・安政地震の震害と震度分布）

表１－２－３　津波の規模階級表

津波の規模	説　　明
-1	波高 50cm 以下の津波で、無被害。
0	波高 1m 前後の津波で、ごくわずかの被害がある。
1	波高 2m 前後の津波で、海岸の家屋を損傷し、船艇をさらう程度。
2	波高 4-6m の津波で、家屋や人命の損失がある。
3	波高 10-20m の津波で、400km 以下の海岸線に顕著な被害がある。
4	最大波高 30m 以上の津波で、500km 以上の海岸線に顕著な被害がある。

（出典：明応地震・天正地震・宝永地震・安政地震の震害と震度分布）

１－３　各市におけるこれまでの最大の津波

図１－３－１～５では、各市において、それぞれの地震で発生した津波の最大規模と、各地区で発生した津波の最大規模を示した。また、豊橋市と田原市については、最も被害の大きい明応 7(1498).8.25、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 について、河川の状況と合わせて津波被害地浸水域を示した。

なお、表１－３－１に各地震の津波の波高を地区別にとりまとめた。

（１）豊橋市

（１）－１　三河湾沿岸（図１－３－１）

豊橋市の三河湾沿岸では、明応 7(1498).8.25、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で最大 4m の津波、慶長 9(1605).12.16、宝永 4(1707).10.4 の地震で最大 3m の津波が発生している。地区別にみると、牟呂と老津で 4m の津波、吉田方と高師で 3m の津波が発生し、前芝、下地・松葉、大崎でも津波が記録されている。

津波被害地浸水域図をみると、明応 7(1498).8.25、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 ともに内陸に大きく浸水し、三河湾に流れる河川等との位置関係を見れば、過去の津波が、河川を遡上し内陸に浸水している様子がみられ、前芝・津田・吉田方は豊川、牟呂・汐田は柳生川、磯辺（草間）は柳生川や梅田川・内張川、芦原・高師は梅田川、大崎は境川・境松川や梅田川、老津は紙田川を伝って浸水したものとうかがわれる。

江戸時代の豊橋市は、豊川河口付近、柳生川河口付近、梅田川沿岸付近、田原湾沿岸付近を中心に新田開発が活発に行われていた時期にあたり、豊川河口付近では寛文 3 年(1663)から清須新田が、柳生川河口付近では寛文 7 年(1667)から東・西松島新田が、梅田川沿岸付近では元和 8 年(1622)から船渡新田が、田原湾沿岸付近では慶長頃から天津新田が新田開発を始めており、それ以降、富士見新田（開発年次文政 3 年(1820)）まで新田開発が行われている。

このように、現在の海岸線と当時の海岸線は大きく異なっており、例えば、江戸時代初期の牟呂村は、西には三河湾が迫り、南と北は柳生川、豊川の両河口に挟まれた三河湾に突きだした半島状の地形であった。磯辺では、駒形町・本宮神社より低い所はほとんど海であり、梅田川沿いでは高足村、大崎村、草間村に湊があったとされている。

そのため、一概に現在の地形図と過去の津波被害地浸水域図を比較することはできないが、少なくとも津波が発生すれば河川の河口付近を中心に津波が浸水することが推測される。

（１）－２　太平洋岸（図１－３－２）

豊橋市の太平洋岸では、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で最大 10m、明応 7(1498).8.25 の地震で 8m の津波、嘉穂 3(1096).11.24 と宝永 4(1707).10.4 の地震で最大 7m の津波が発生している。地区別にみると、城下、赤沢、伊古部、二川で 7m、細谷で 6m の津波が記録されている。

津波被害地浸水域図をみると、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 ともに海食崖を境に津波の浸水が妨げられているが、海食崖の前面の浜辺だけでなく、太平洋に注ぐ開折谷の小河川に津波が浸入し、一部内陸に浸水していることがうかがわれる。

豊橋市の太平洋岸の浜辺は、前浜と後浜が発達した砂浜が広がっているため、海食崖の波浪浸食はあまり進んでいない。一方で、背後の海食崖（天伯原台地）の標高は 70m と高いが、開折谷が奥まで入り込んでおり、側方浸食を受けた海食崖は、なだらかに傾斜し、前面の海崖の高さは低くなっている。こうした地形の特徴を踏まえれば、地震による津波が発生すれば、開折谷を中心に津波が浸入することが推測される。

（２）豊川市（図１－３－３）

豊川市の三河湾沿岸では、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で赤坂、御油で最大 5m の津波が記録されているが、距離や標高からこのような津波の波高は困難と記されている。また、住民ヒアリングから昭和 20(1945).1.13 の地震で御馬で 0.5m の津波があったとの証言があるが、記録としては残っていない。

以上のことから豊川市は地震による津波が少なかったとも考えらえるが、実態は不明である。

なお、大風等による高潮（洪水）被害は記録が多く残っており、ここでは地震以外で発生した高潮（洪水）被害の浸水状況（昭和 34(1959).9.28 の伊勢湾台風）や、地震以外で発生した高潮（洪水）被害に関わる寺院や史跡を示した（詳細については、２－２を参照）。

（３）蒲郡市（図１－３－４）

蒲郡市の三河湾沿岸では、明応 7(1498).8.25 の地震で最大 4m の津波、嘉永 7(1854).11.4-5 と昭和 21(1946).12.21 で最大 2m の津波を記録されている。地区別にみると、塩津で 4m、形原と西浦で 2m、蒲郡で 1m の津波が発生し、三谷でも津波が記録されている。

蒲郡市は西側を中心に地震による津波が発生しており、特に海岸線が湾曲する塩津を中心に津波の規模が高くなっている。その理由は不明であるが、過去の津波から推測すれば、津波が発生すれば、塩津周辺に津波が襲う可能性があると考えられる。

（４）田原市

（４）－１　三河湾沿岸（図１－３－５）

田原市の三河湾沿岸では、宝永 4(1707).10.4 の地震で最大 5m の津波、明応 7(1498).8.25、慶長 9(1605).12.16、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で最大 4m の津波が発生している。地区別にみると、福江と田原で 5m の津波、江比間と宇津江と波瀬で 4m の津波が記録されている。

津波被害地浸水域図をみると、田原では明応 7(1498).8.25、嘉永 7(1854).11.4-5、宝永 4(1707).10.4 の津波において新田を中心に浸水しており、特に嘉永 7(1854).11.4-5 の津波は汐川を遡上し田原の内陸に大きく浸水している様子がみられ、汐川やその支流である清谷川、宮川、青津川、仁皇川を伝って津波が浸水したものとうかがわれる。

ただし、江戸時代の田原は、寛文 4 年(1664)に田原当新田が開発されて以来、享保頃迄の 60 年間に、新田の約 90%が開発されるなど、汐川河口を中心に新田開発が行われてきた経緯がある。汐川河口の津波被害地浸水域図は、新田開発地域とほぼ重なるため、一概に現在の地形図と過去の津波被害地浸水域図を比較することはできないが、少なくとも津波が発生すれば汐川の河口付近を中心に津波が浸水することが推測される。

また宇津江では、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震において、どんど川を津波が遡上して浸水しており、また江比間は今堀川、紺屋川、新堀川の 3 河川から津波が遡上し、内陸に浸水していることがうかがわれる。

なお、最大 5m の津波被害のあった福江については、津波被害地浸水域図の記録がない

が、史料では内陸の保美に浸水したことが記録されている（第 2 章）など、免々田川等から津波が浸水したものと推測される。

（４）－２　太平洋岸（図１－３－５）

田原市の太平洋岸では、宝永 4(1707).10.4 と嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で最大 10m の津波、明応 7(1498).8.25 の地震で 8m の津波、嘉穂 3(1096).11.24 の地震で最大 7m の津波が発生している。地区別にみると、赤羽根、池尻で 10m の津波、小塩津と堀切で 8m の津波、神戸で 4.2m（谷ノ口 2.4m）の津波、伊良湖で 1.5m の津波（太平洋岸に面していない場所での波高と思われる）が記録されている。なお、高松では宝永 4(1707).10.4 の津波が「常より五丈程度」との記録があり、一丈を約 3m とすれば概ね 15m と計算できるが、実態は不明である。

津波被害地浸水域図をみると、明応 7(1498).8.25、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 の津波の様子から、地区ごとに違いが読み取れる。

六連～高松では、津波による大きな浸水はみられていない。これは、当地域が標高 20-60m の急峻な海食崖がそそり立つように連続しており、かつ砂浜が狭いため海食崖が波浪浸食を受けやすく、その結果、海食崖が年々後退し開折谷はあまり発達していない。そのため、豊橋市の太平洋岸のように開折谷から津波が内陸に浸水する地形ではなかったためと推測される。

赤羽根～若見では、地震による津波が池尻川・堺川・精進川を遡上して内陸の集落にまで浸水していることがうかがえる。これは、当地域では海岸崖が切れ、池尻川が標高 20m の天伯原面を削って太平洋岸に流れており、津波が浸入しやすい地形のためと考えられる。

越戸～小塩津では、地震による津波が内陸まで浸水する様子はみられていないが、太平洋岸に流れる川尻川や波治神川、鮎川の河川から津波が遡上し浸水している様子が見受けられる。これは、当地域では再び海食崖が現れ、大山などの山地塊が太平洋岸までせり出し、磯浜が卓越しており、河川河口部以外は津波が浸入しにくい地形であったためと考えられる。

堀切では、新堀川や文録川を中心に地震による津波が広範にわたって内陸まで浸水していることがうかがわれる。これは、当地域は、太平洋岸の他地域と異なり、天伯原面が次第に低下し、海食崖が砂浜に覆われて消失しているためと考えられる。そのため、津波が河川だけでなく、標高 7m 以下の砂浜と背後に後背湿地をもつ地形に、そのまま浸入していることがうかがわれる。

日出～伊良湖は、堀切に近い日出において内陸に浸水しており、堀切と同様に海食崖を持たない地形であるためと考えられる。一方、伊良湖は、太平洋岸からは宮山を挟んだ山の北麓に集落があったため、山間部が津波の浸入を防ぎ、集落までは浸水していない様子がみうけられる。

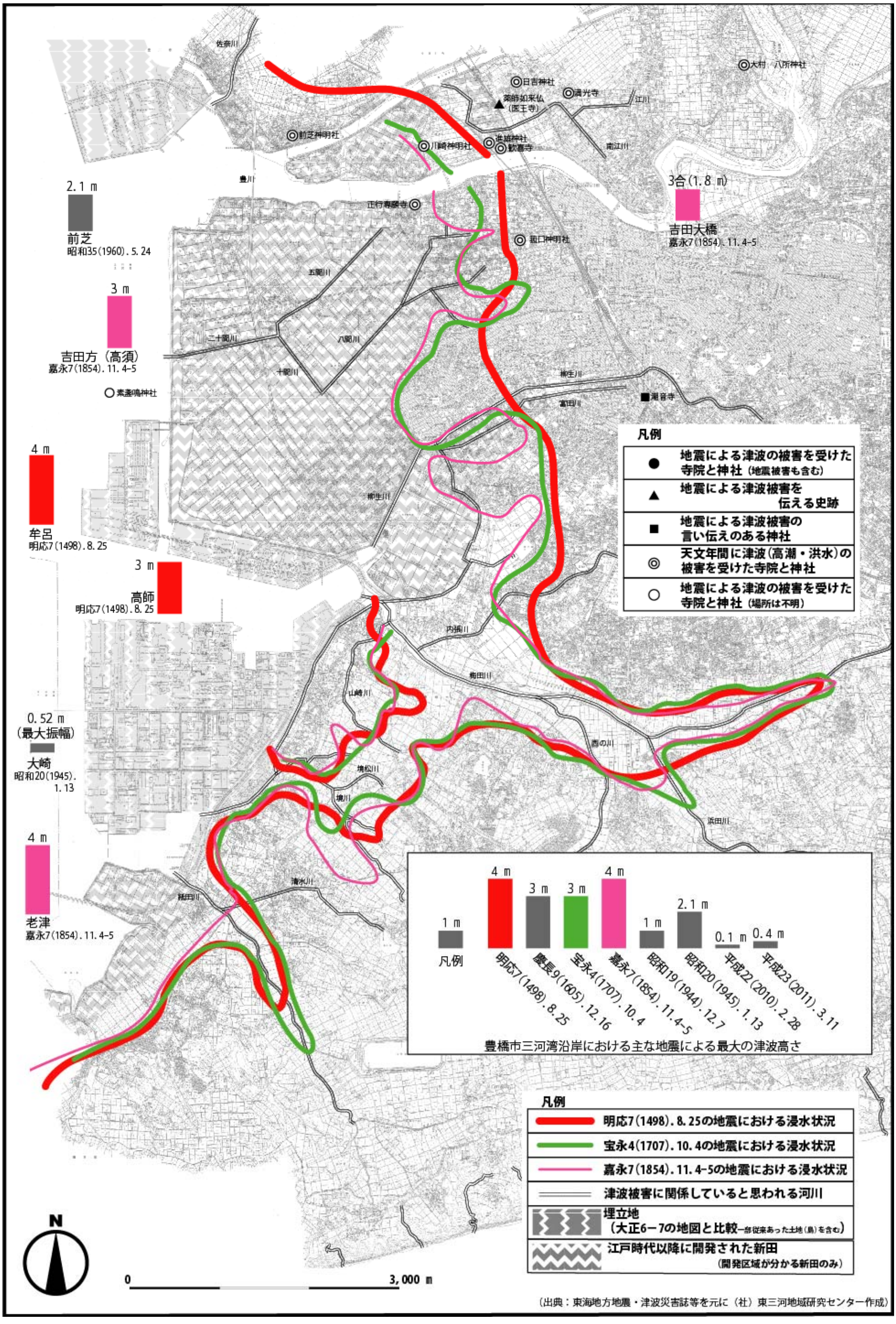

図１－３－１　豊橋市（三河湾沿岸）における津波被害地浸水域と津波の最大波高図

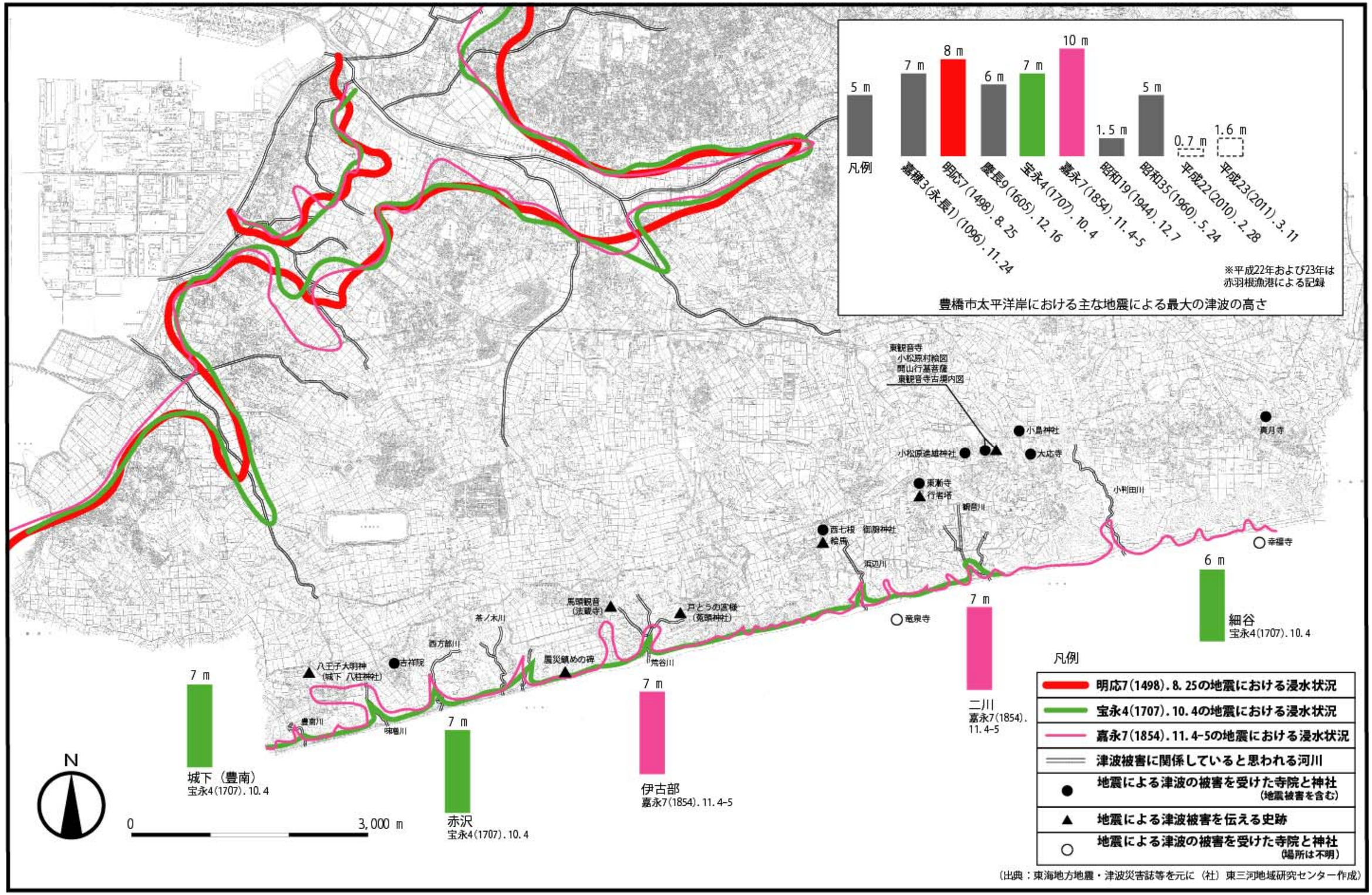

図１－３－２　豊橋市（太平洋岸）における津波被害地浸水域と津波の最大波高図

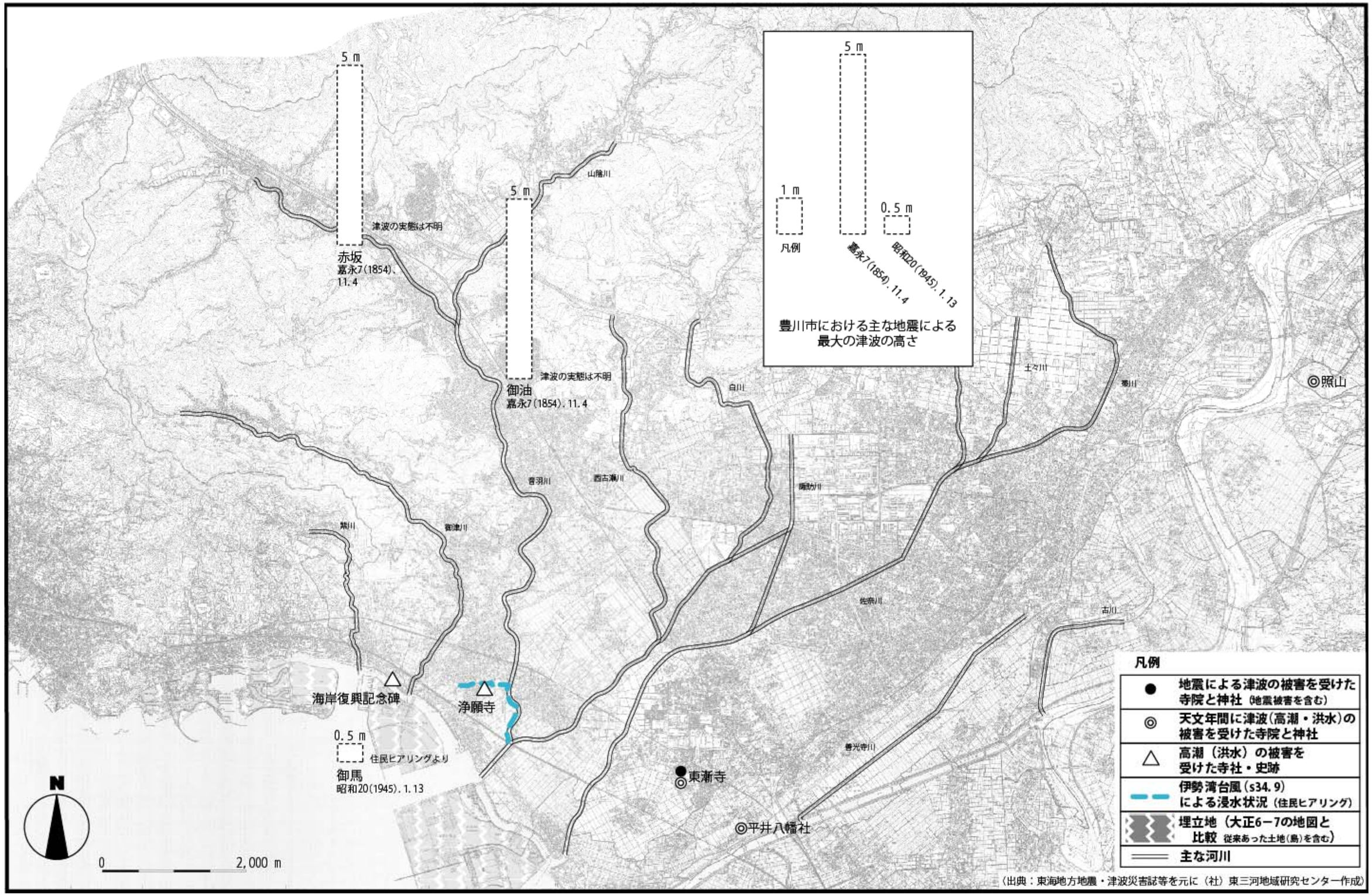

図１－３－３　豊川市における津波の最大波高図

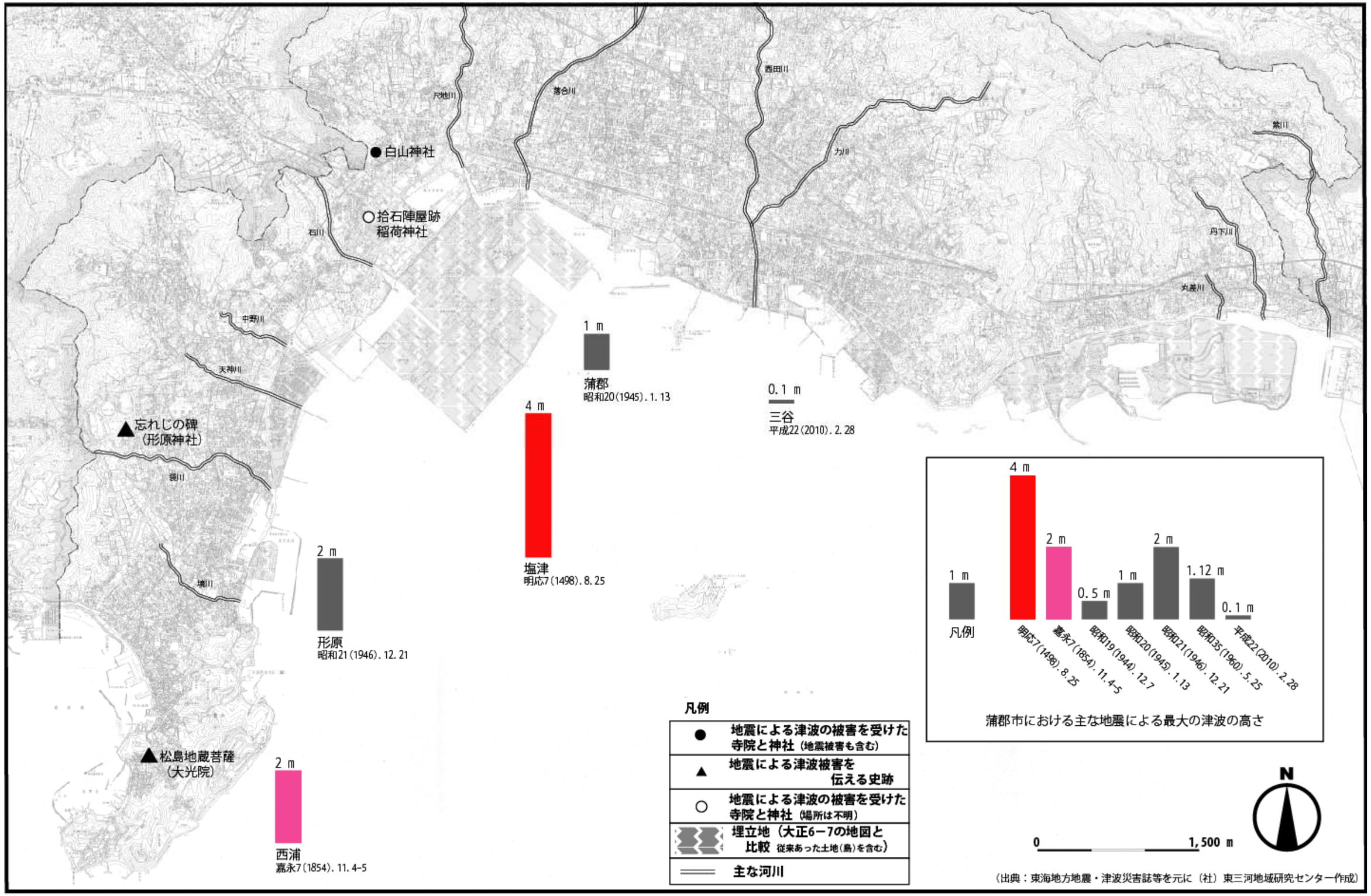

図１－３－４　蒲郡市における津波被害地浸水域と津波の最大波高図

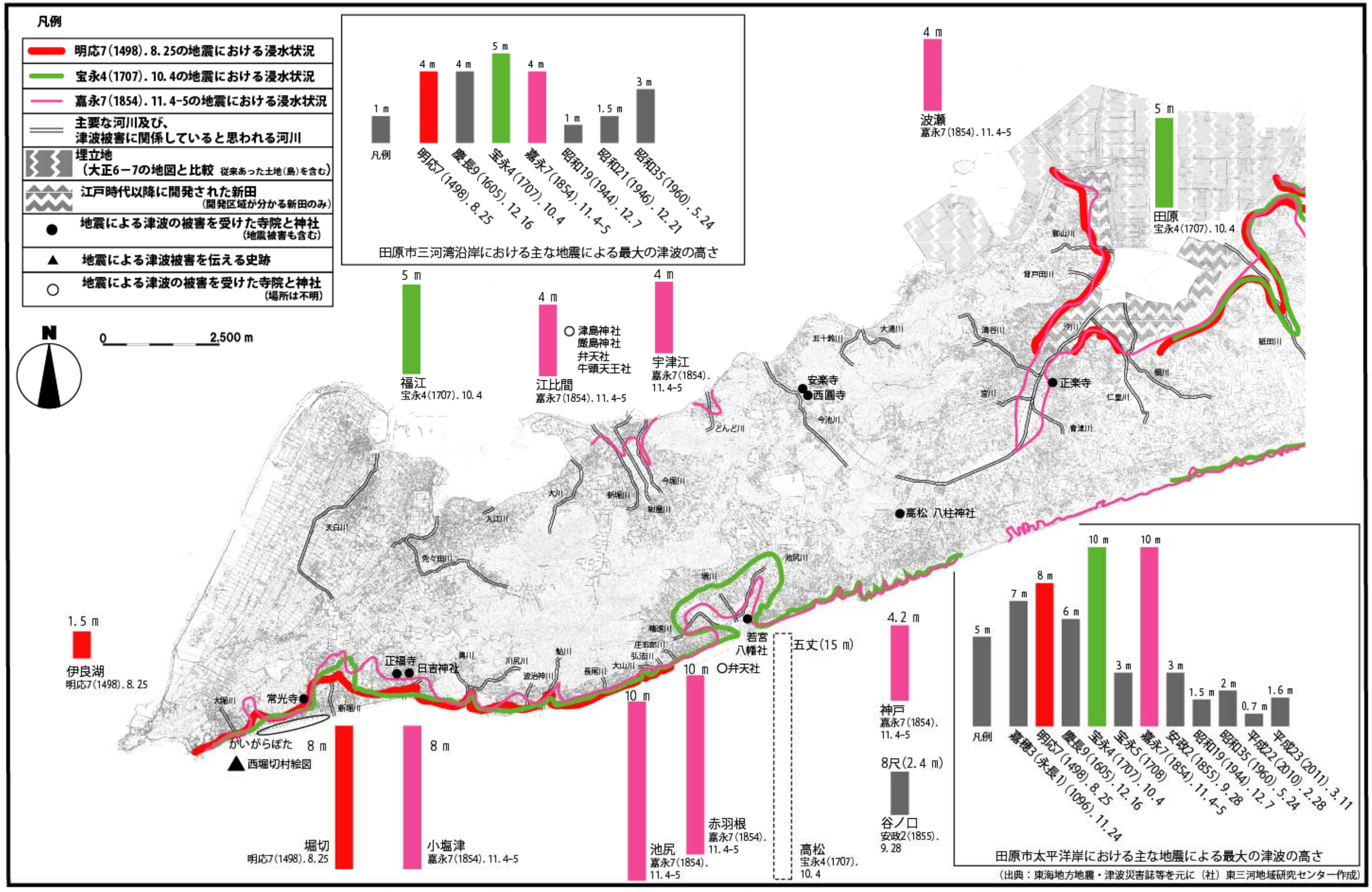

図１－３－５　田原市（三河湾沿岸、太平洋岸）における津波被害地浸水域と津波の最大波高図

表１－３－１　東三河における地震別・地区別の津波波高（１　豊橋市三河湾沿岸）

西暦	旧暦	豊橋市三河湾沿岸								
		渥美半島全体	三河湾沿岸(豊橋市中心)	前芝	下地・松葉 （吉田橋含む）	吉田方	富士見新田 （牟呂）	芦原（高師）	大崎	老津
1498. 9.20	明応 7. 8.25		吉田：4m（東海地方地震・津波災害誌）				3-4m（東海地方地震・津波災害誌）	3m（東海地方地震・津波災害誌）		
1605. 2.3	慶長 9. 12.16		吉田：3m（東海地方地震・津波災害誌）							
1703. 12.31	元禄 16. 11.23	渥美：2m（東海地方地震・津波災害誌）								
1707. 10.28	宝永 4. 10.4		吉田：3m（東海地方地震・津波災害誌）							
1854. 12.23 -24	嘉永 7. 11.4-5	2-10m（東海地方地震・津波災害誌）	3-4m（東海地方地震・津波災害誌）		吉田橋：3合（約 1.8m）（収新日本地震史料　第五巻　別巻五ノ一　（安政元年十一月四・五・七日　一頁～一四三八頁））	3m（東海地方地震・津波災害誌）				3-4m（東海地方地震・津波災害誌）
1944. 12.7	昭和 19. 12.7		1m（愛知県災害誌）							
1945. 1.13	昭和 20. 1.13		三河湾：1m（東海地方地震・津波災害誌） 豊橋：0.33m（東海地方地震・津波災害誌）		船町：0.17m（東海地方地震・津波災害誌）				最大全振幅 0.52m（東海地方地震・津波災害誌）	
1960. 5.24	昭和 35. 5.24		前芝：2.1m（東海地方地震・津波災害誌） 豊橋：1.04m（東海地方地震・津波災害誌）	前芝：2.1m 前芝：津波の振幅 0.2-0.5m（愛知県災害誌）						
2010. 2.28	平成 22. 2.28		0.1m（東愛知新聞）							
2011. 3.11	平成 23. 3.11		0.4m（東愛知新聞）							

表１－３－２　東三河における地震別・地区別の津波波高（２　豊橋市太平洋岸）

西暦	旧暦	豊橋市太平洋岸						
		東三河全体	太平洋岸 （豊橋市中心）	城下（豊南）	赤沢	伊古部	二川	細谷
1096. 12.17	嘉穂 3 （永長 1）. 11.24		3-7m（東海地方地震・津波災害誌）					
1498. 9.20	明応 7. 8.25		5-8m（東海地方地震・津波災害誌）					
1605. 2.3	慶長 9. 12.16		5-6m（東海地方地震・津波災害誌）					
1703. 12.31	元禄 16. 11.23	2m（東海地方地震・津波災害誌）						
1707. 10.28	宝永 4. 10.4	3-7m（東海地方地震・津波災害誌）	6-7m（東海地方地震・津波災害誌）	6-7m（東海地方地震・津波災害誌）	6-7m（東海地方地震・津波災害誌）			6m（渥美町郷土資料館研究紀要第 2 号（加藤克己））
1854. 12.23 -24	嘉永 7. 11.4-5	2-10m（東海地方地震・津波災害誌）	8-10m（東海地方地震・津波災害誌）	6-7m（東海地方地震・津波災害誌）	6-7m（東海地方地震・津波災害誌）	6-7m（東海地方地震・津波災害誌）	6-7m（東海地方地震・津波災害誌）	
1944. 12.7	昭和 19. 12.7		1-1.5m（東海地方地震・津波災害誌）					
1960. 5.24	昭和 35. 5.24		5m（ふるさと細谷）					
2010. 2.28	平成 22. 2.28		0.7m（東愛知新聞）					
2011. 3.11	平成 23. 3.11		1.6m（東愛知新聞）					

表１－３－３　東三河における地震別・地区別の津波波高（３　豊川市、蒲郡市）

西暦	旧暦	豊川市			蒲郡市						
		御馬	御油	赤坂	蒲郡市内	西浦	形原	形原（下市より東）	塩津	蒲郡町	三谷
1498.9.20	明応 7.8.25				塩津：4m（東海地方地震・津波災害誌）				4m（東海地方地震・津波災害誌）		
1854.12.23-24	嘉永 7.11.4-5		4-5m（東海地方地震・津波災害誌）	5m（東海地方地震・津波災害誌）	2m（東海地方地震・津波災害誌）	2m（東海地方地震・津波災害誌）					
1944.12.7	昭和 19.12.7				0.5m（東海地方地震・津波災害誌）		0.5m（東海地方地震・津波災害誌）				
1945.1.13	昭和 20.1.13	0.5m（住民からのヒアリング）			1m（東海地方地震・津波災害誌）				0.6m(愛知県災害誌)	1m（東海地方地震・津波災害誌）	
1946.12.21	昭和 21.12.21				2m を越す潮位（伊古部郷土誌）		2m を越す潮位（伊古部郷土誌） 最大振幅 0.15m（愛知県災害誌）				
1960.5.24	昭和 35.5.24				潮位が 1m（中部日本新聞（1960.5.24）（夕刊））		1.12m（東海地方地震・津波災害誌） 津波の振幅 0.23-0.86m（愛知県災害誌）				
2010.2.28	平成 22.2.28				潮位が 0.1m（東日新聞（2010.3.1））		潮位が 0.1m（東日新聞（2010.3.1）				潮位が 0.1m（東日新聞（2010.3.1）

表１－３－４　東三河における地震別・地区別の津波波高（４　田原市三河湾沿岸）

西暦	旧暦	田原市三河湾沿岸						
		渥美半島全体（田原市中心）	三河湾沿岸（田原市中心）	福江全体	江比間	宇津江	波瀬	田原
1096.12.17	嘉穂 3（永長 1）.11.24	5-7m（東海地方地震･津波災害誌）						
1498.9.20	明応 7.8.25	内 3-4m、外 6-8m（東海地方地震･津波災害誌）	概ね 3m、所により 4m（東海地方地震･津波災害誌）					3-4m（東海地方地震･津波災害誌）
1605.2.3	慶長 9.12.16		概ね 3m、所により 4m（東海地方地震･津波災害誌）					2-3m（東海地方地震･津波災害誌）
1703.12.31	元禄 16.11.23	2m 余（東海地方地震･津波災害誌）						
1707.10.28	宝永 4.10.4	3-7m（東海地方地震･津波災害誌）	3-5m（東海地方地震･津波災害誌）	5m（東海地方地震･津波災害誌）				5m（東海地方地震･津波災害誌）
1854.12.23-24	嘉永 7.11.4-5	2-10m（東海地方地震･津波災害誌）	概ね 3m、所により 4m（東海地方地震･津波災害誌）	1m（国際自動車コンプレックス研究会 NEWSLETTER vol.38）（渥美郡泉福寺史料）	3-4m（東海地方地震･津波災害誌）	3-4m（東海地方地震･津波災害誌）	3-4m（東海地方地震･津波災害誌）	3-4m（東海地方地震･津波災害誌）
1944.12.7	昭和 19.12.7		1m 足らず（東海地方地震･津波災害誌）	0.5m（東海地方地震･津波災害誌）				0.5m（東海地方地震･津波災害誌）
1946.12.21	昭和 21.12.21			1.5mの潮位（伊古部郷土誌）				
1960.5.24	昭和 35.5.24		3m（東海地方地震･津波災害誌）	0.95m（愛知県災害誌）				
2010.2.28	平成 22.2.28	1m（東日新聞（2010.3.1））						

表１－３－５　東三河における地震別・地区別の津波波高（５　田原市太平洋岸）

西暦	旧暦	田原市太平洋岸								
		渥美半島全体（田原市中心）	太平洋岸（田原市中心）	伊良湖	堀切	小塩津	赤羽根	池尻	高松	神戸
1096.12.17	嘉穂3（永長1）.11.24	5-7m（東海地方地震・津波災害誌）	3-7m（東海地方地震・津波災害誌）							
1498.9.20	明応7.8.25	内3-4m、外6-8m（東海地方地震・津波災害誌）	6-8m（東海地方地震・津波災害誌）		6-8m（東海地方地震・津波災害誌）					
1605.2.3	慶長9.12.16	内2-3m、外5-6m（東海地方地震・津波災害誌）	5-6m（東海地方地震・津波災害誌）		5-6m（東海地方地震・津波災害誌）					
1703.12.31	元禄16.11.23	2m余（東海地方地震・津波災害誌）								
1707.10.28	宝永4.10.4		6-8m,所により10m（東海地方地震・津波災害誌）		6-7m（東海地方地震・津波災害誌）			6-7m（東海地方地震・津波災害誌）	15m（野田史）（金五郎文書「歳代覚書」）	
1708	宝永5	2-3m（東海地方地震・津波災害誌）	2-3m（東海地方地震・津波災害誌）							
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	2-10m（東海地方地震・津波災害誌）	6-8m,所により10m（東海地方地震・津波災害誌）		6-7m（東海地方地震・津波災害誌）	6-8m（東海地方地震・津波災害誌）	6-10m（東海地方地震・津波災害誌）	6-10m（東海地方地震・津波災害誌）		3.6-4.2m（収新日本地震史料第五巻　別巻五ノ一　（安政元年十一月四・五・七日　一頁～一四三八頁））
1855.11.7	安政2.9.28		3m（東海地方地震・津波災害誌）							8尺（2.4m）（研究輯録　三遠の民俗と歴史）（鈴木三十郎文書（天地の間珍事変事書留）、及び庄屋文書）
1944.12.7	昭和19.12.7		1-1.5m（東海地方地震・津波災害誌）	1.5m（東海地方地震・津波災害誌）			1.5m（東海地方地震・津波災害誌）			
1960.5.24	昭和35.5.24	1m（東海地方地震・津波災害誌）5m（ふるさと細谷）	潮位はいつもより2mほど高く（中部日本新聞(1960.5.24)(夕刊)）	0.5m（中部日本新聞（1960.5.24）（夕刊））						
2010.2.28	平成22.2.28		0.7m(東愛知新聞)				0.7m（東日新聞（2010.3.1））			
2011.3.11	平成23.3.11		1.6m(東愛知新聞)				1.6m（東愛知新聞（2011.3.12））			

第２章　各市における津波被害の歴史

２―１　豊橋市

２―１―１　三河湾沿岸

（１）全体の概要

豊橋市の三河湾沿岸は、嘉穂 3(1096).11.24 から平成 23(2011).3.11 まで計 12 回の地震による津波が記録されている。

そのうち、津波被害のあった地震は、①嘉穂 3(1096).11.24 の津波は、慶長や宝永津波と同じような影響、②明応 7(1498).6.25 の津波は、草間（磯辺）で大津波発生し被害、③明応 7(1498).8.25 の津波は、吉田に波高 3～4m の規模で豊橋で大きな被害、④慶長 9(1605).12.16 の津波は、波高 3mの規模で、集落や田畑に被害、⑤宝永 4(1707).10.4 の津波は、吉田に 3m の規模で海岸新田が浸水、⑥嘉永 7(1854).11.4-5 の津波は、高さ 3～4mの規模で豊橋に大きな被害（死者 14 名、高潮による溺死者 11 名、行方不明者 3 名、怪我人 1 名、流失家屋 4 軒、田畑 90.1ha に海水浸水）の 6 地震と報告されている。

地区別にみると、前芝、吉田方、牟呂、汐田など江戸時代より新田開発が行われた地域では、津波による田畑への浸水被害が多くでている。また、磯辺（草間）、高師、芦原、老津など、江戸時代に海辺に近かった集落でも被害がみられている。

表２―１―１　豊橋市三河湾沿岸の津波被害記録（１）

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容	被災地等
1096.12.17	嘉穂3（永長1）.11.24	津波被害	・渥美半島裏浜：永長津波（1096年）の場合の史料はみあたらないが、慶長や宝永津波の場合と同じような影響があった。慶長や宝永津波では、堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなどの被害があり、浸水も著しく、田畑等に被害を与え荒廃地となった所も多かった。（東海地方地震・津波災害誌）	
1498.7.23	明応7.6.25	津波被害	・草間（磯辺）において、大津波の被害あり。（校区のあゆみ　磯辺（草間区地誌略））	磯辺
1498.9.20	明応7.8.25	津波被害	・吉田：3-4m。（東海地方地震・津波災害誌） ・豊橋の被害が大きかったので波高も4mくらいに達したものと思われる。（東海地方地震・津波災害誌）	牟呂、高師
1605.2.3	慶長9.12.16	津波状況	・吉田：津波の高さ3m。（東海地方地震・津波災害誌） ・渥美半島裏浜：慶長や宝永津波では、堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなどの被害があり、浸水も著しく、田畑等に被害を与え荒廃地となった所も多かった。（東海地方地震・津波災害誌）	
1707.10.28	宝永4.10.4	被害少ない	・吉田：波高約3m。津波が海岸新田へ浸入したが大きな被害はなかった。（東海地方地震・津波災害誌）	前芝、吉田方、磯辺
1680、1705、1707、1710	延宝8、宝永2、宝永4、正徳元	新田浸水	・高須・土倉新田（吉田方）、松島新田（汐田）において、宝永4年の地震・津波を含む、自然災害による津波や高潮で何度も大きな被害を受けている。（牟呂史 ）	吉田方、汐田
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波被害、死傷者、船流出、田畑浸水	・波の高さ3-4mと推定される。豊橋の被害が大きかったので波高も4mくらいに達したものと思われる。（東海地方地震・津波災害誌） ・吉田（豊橋）：海辺では津波が浸入して田畑90.1ha余に海水、砂入等の被害を与えた。流失家屋4軒、難破船、生死不明3名、怪我人1名あった。（東海地方地震・津波災害誌）（豊橋市史） ・死者一四人、高潮による溺死者一一人、行方不明者三人など悲惨な結果をもたらした。（とよはしの歴史） ・渡船（今切）流失破損四八隻、漁船流失破損九二隻。（高豊史（尾三遠地震小史による）〔山本忠佐日記〕）	下地・松葉、吉田方、牟呂、磯辺、芦原、老津
1944.12.7	昭和19.12.7	被害なし	・（三河湾）1m位の津波。被害はなかった。（愛知県災害誌）	
1945.1.13	昭和20.1.13	被害少ない	・豊橋：津波がみられた。（東海地方地震・津波災害誌） ・（三河湾）波高が1mくらいが最大でほとんど津波被害はなかった。（東海地方地震・津波災害誌） ・豊橋：最大全振幅33cm。（東海地方地震・津波災害誌）	下地・松葉、大崎
1946.12.21	昭和21.12.21	被害なし	・（三河湾）津波は小さく、被害はなかった。（渥美郡災害年表）	前芝
1960.5.24	昭和35.5.24	家屋浸水	・前芝：津波2.1m、豊橋：1.04m。（東海地方地震・津波災害誌） ・（三河湾）津波は渥美湾にも侵入してきたが、波高は低く、そのうえ最高波が到達した時刻が干潮時にあったために潮位はあまり上がらず、渥美湾沿岸の一部に若干の家屋浸水をみた程度の被害ですんだ。（渥美郡災害年表）	前芝

表２―１―１　豊橋市三河湾沿岸の津波被害記録（２）

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容	被災地等
2010.2.28	平成22.2.28	住民避難	・三河湾岸の三河港豊橋地区で10センチ（同4時51分）、第2波は三河湾岸では確認されなかった。（東愛知新聞） ・豊橋市では、三河湾で1メートルの津波が予測されるとし、同日午後1時30分に「避難準備情報」を三河湾沿岸と河口部付近に発令した。同市内の三河湾沿岸部の老津から前芝一帯の防潮堤に設置されている陸閘、立切などの扉48ヵ所を閉じた。（東日新聞）	
2011.3.11	平成23.3.11	住民避難	・三河港豊橋地区では同5時42分に高さ40センチの津波を観測した。（東愛知新聞） ・豊橋市は同3時32分、災害情報連絡室を開設。海岸近くの人々に対し、避難勧告を発令した。津波に備えて市広報車4台と消防団の5つの方面隊が太平洋側と三河湾を広報と巡視に回った。午後5時には災害対策会議を開き、施設の被害情報の共有、今後の連絡体制などを確認。（東日新聞）	

（２）前芝・津田

前芝においては、宝永 4(1707).10.4、昭和 21(1946).12.21、昭和 35(1960).5.23（津波は 24 日）の地震で津波が記録されており、特に宝永 4(1707).10.4 の津波では梅藪村で塩田が全滅したとの報告がある。なお、前芝では、江戸時代に入ると新田開発が盛んに行われ（新田の数は 14 にもなる）、そのうち山内新田（開発年次 1731 年）は、宝永 4(1707).10.4 で消滅した塩田跡地につくられたと伝えられている（校区のあゆみ　前芝）。

また津田にある「医王寺の薬師如来」は、大地震の津波により、幡豆郡大浜の火煙下山から薬師如来が三河湾を漂流して下五井村へと流れ着き、下五井の人々が薬師如来を祀り、医王寺境内の一隅に別堂を建てて安置したのが薬師堂との縁起が残されている。

表２―１―２　前芝・津田の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	塩田被害	・（前芝）梅藪村の塩田が全滅。（蒲郡市史　本文編2　近世編） ・（前芝）宝永4年の富士山噴火による大地震の時塩浜を失った。これがのち山内新田となった。（校区のあゆみ　前芝）
1946.12.21	昭和20.12.21	津波現象	・（前芝）：第1波が押し波ではじまっている。（愛知県災害誌）
1960.5.24	昭和35.5.24	津波現象	・（前芝）：津波2.1m。（東海地方地震･津波災害誌） ・（前芝）：津波来襲回数7回、津波の周期35～75分、津波の振幅20-50cm。（愛知県災害誌）
1689以前	元禄2以前	伝承（史跡）	・（下五井（津田））：元禄2年（1689）満光寺住職が記した「下五井村薬師如来縁起」には次のように記されている。鳳来寺山の開祖、利修仙人が、杉の巨木から3本の薬師如来仏を彫った。1体は鳳来寺に安置、1体は美濃国の嶺峯山に納め、1体を幡豆郡大浜の火煙下山に納めた。後年、大地震の津波により大浜の火煙下山が倒壊流失した。薬師如来が三河湾を漂流して下五井村へと流れ着いた。下五井の人々は、薬師如来を祀った。薬師如来の霊験はあらたかで人々の崇信が篤かった。この薬師如来を、元禄2年、小馬場の医王寺住職が村人から譲り受けて、医王寺境内の一隅に別堂を建てて安置したのが薬師堂である。（ふるさと津田（下五井村薬師如来縁起））

（３）下地・松葉

下地・松葉では、嘉永 7(1854).11.4-5、昭和 20(1945).1.13 の地震で津波が記録されている。特に嘉永 7(1854).11.4-5 の津波では豊川を遡上し、水位が 3 合[1]位(約 1.8m)に増水し吉田大橋が損傷（往来の支障を来す程の損傷ではない）している。

江戸時代の吉田大橋は、慶長年間では津波（地震かは不明）により流失、宝永 4(1707).10.4 の地震では吉田大橋が損傷（津波の影響かは不明）し、また嘉永 7(1854).11.4-5 の地震から 3 年後の安政 4 年に洪水が発生し吉田大橋が 30 間流失しているなどの記録がある。なお、豊橋（とよばし）は、地震による被害の記録はないが、江戸時代では三十数回にわたり橋桁を流失したとの記録が残されている。

そのほか、昭和 20(1945).1.13 の地震で船町に津波（最大振幅 17cm）が観測されている。

[1] 1 合は 60cm。

表２―１―３　下地・松葉の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1596-1615	慶長年間	吉田大橋流失	・津波のため橋が流されたので架け替え工事。（郷土誌　下地）（地震による津波かは不明）
1707.10.28	宝永4.10.4	吉田大橋被害	・吉田大橋の修繕が行はれたが、これは大震災の結果によるもので、所謂小破修繕であつた。(國史上より觀たる豊橋地方)（津波の影響かは不明）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	吉田大橋被害、流出	・高汐が発生。大川（吉田川）の水位は三合位に増水し逆流。幸い吉田の大橋は橋上の往来に支障を来たす程の損傷は免れた。安政4（1857）.5.14、先月末（4/26期）から降り続く雨により大川（吉田川）が増水し、3年前の大地震では軽傷であった大橋を、猛烈な水勢と上流から筏と思われる夥しい量の材木が直撃し、橋梁の約30間（＝約54m）が流失したのだ。城郭修復もままらないところに、洪水により吉田の大橋が三十間程流失した。（逐城解説　詳説・吉田城と池田照政（『西村次右衛門日記』豊橋市史々料叢書二・三）））
1945.1.13	昭和20.1.13	津波現象	・船町：最大振幅（cm）17（第5波）、津波周期（分）15-28、平均（分）20、初動押波。（東海地方地震・津波災害誌）
		豊橋（とよばし）流失について	【津波による史跡等（嘉永7.11.4：豊橋（とよばし））】 ・江戸時代を通じて豊川に架る「豊橋」は、三十数回の橋桁の流失を記録している。東海道の重要な橋であったため、幕府直轄工事で補修が行われた。（幕府直轄の橋は四つあるがその一つ）さらに、河口が三河湾に臨んでいるため、潮の満ちこみにより、海水が河口から11km地点まで遡上するので、上流の大雨と重なると洪水を引き起こした。（ふるさと津田）。

（４）吉田方

吉田方では、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が記録されている。

宝永 4(1707).10.4 の津波では高須・土倉新田（開発年：寛文 5 年(1665)）の堤防が決壊し海水が流れ込んで田畑の作物に被害がでており、その結果馬見塚では宝永 4(1707).10.4 の地震後から取高が激減している。

嘉永 7(1854).11.4-5 の津波では、吉田方は吉川村川田まで潮が入り、吉川堤、天神西堤、中地堤に被害がでている。特に、西田面の田畑での被害が重く、新田各所で堤が決壊して潮水が入っており、高須新田では波高 3mの津波で堤防が破壊され大損害、青竹新田（開発年：明和 7 年(1770)）では潮が入る被害があったと報告されている。

江戸時代の吉田方は、豊川河口の中州が発達したこと等もあり、全国でもさきがけて 1600 年代に新田開発が進展した（校区のあゆみ　吉田方）が、そうした新田に津波の被害が大きかったことがうかがえる。

表２―１―４　吉田方の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	取高激減	・（馬見塚）宝永四年から取高が激減している。これは宝永四年の大地震と津浪等をはじめとしてこの間天災地変があいついだため。（豊橋市史　第二巻）
		新田被害、浸水	・（高須・土倉新田）高須・土倉新田の堤防が破損して大被害があった。（愛知県災害誌） ・（高須・土倉新田）高須土倉地区の堤防が決壊、潮水が流れ込んで田畑の作物皆無となり。（校区のあゆみ　吉田方）
1680、1705、1707、1710	延宝8、宝永2、宝永4、正徳元	新田被害、浸水	・（高須・土倉新田）延宝八年（1680）、宝永二年（1705）、同四年、正徳元年（1711）とたびたび、津波や暴風雨による堤防決壊の被害を受け、新田はほとんど海底に沈んでしまい、新田百姓は屋敷の周囲に自力で堤を築き、牟呂・日色野方面の畑地を借りて耕作し、新田を守りとおしたという。（牟呂史（高須新田・土倉新田・下野新田開発記録））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	新田被害、浸水	・（吉田方全体）新田各所では堤が決壊して潮水が入るようになった所も少なくなかった。（校区のあゆみ　吉田方） ・（吉田方全体）田畑の損害は東田面に軽く、西田面重し。（郷土史料第三輯　吉田方の沿革　上巻） ・（吉田方全体）吉田方四十七軒倒壊、外の家は半ころび、吉田城半ころび、堤こわけ入り、高須新田、吉川村川田まで汐来る。吉川堤百二十間、幅三尺、天神西堤は二十三間、中地堤は二十間ものにならず。（校区のあゆみ　吉田方（吉川村大林弥平太記））
		新田被害	・（高洲新田）波高3m。堤防破壊して大被害があった。（東海地方地震・津波災害誌） ・（高須新田）死人なし。（郷土史料第三輯　吉田方の沿革　上巻）
		新田浸水	・（青竹新田）青竹新田の外新田凡百町歩程のもの堤溜りの個所出来汐入る。（郷土史料第三輯　吉田方の沿革　上巻）

（５）牟呂・汐田

牟呂では、明応 7(1498).8.25、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が記録されている。明応 7(1498).8.25 は 3～4m の津波があり、牟呂吉田の素盞嗚神社が流失、現在地（豊橋駅の西南 2km に移転の記録がある）に移転している。嘉永 7(1854).11.4-5 では、修築（弘化 4 年(1847)）した富士見新田（開発：文政 3 年(1820)）が、直後の嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で破損したとの報告がある（津波の影響かは不明）。

汐田では、宝永 4(1707).10.4 の地震による津波やその他自然災害の高潮により、松島新田（開発：寛文 7 年）が高須・土倉新田と同様の被害（海水が流れ込んで田畑の作物に被害）をうけたと記録されている。

江戸時代初期の牟呂村は、南と北は柳生川と豊川の両河口に挟まれ、広大な干潟が形成され新田開発の適地となっていた。牟呂村の多くの人は、汐田、吉田方等の周辺新田を開発、または耕作するなどの関わりを持っていた（校区のあゆみ　牟呂）が、地震による津波が開発した新田に大きく被害をおよぼしたと思われる。

表２―１―５　牟呂・汐田の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1498.9.20	明応7.8.25	神社流失、移転	・（牟呂吉田）津波の高さ3-4mと推定。（東海地方地震･津波災害誌） ・（牟呂吉田）吉田村大字牟呂大西の素盞嗚神社が流失したので現在の地（豊橋駅の西南2km）に移転。（東海地方地震･津波災害誌）
1680、1705、1707、1710	延宝8、宝永2、宝永4、正徳元	新田被害、浸水	・（松島新田（汐田））高須・土倉新田等と同様に津波や高潮で何度も大きな被害を受けている。（牟呂史（郡史資料牟呂吉田村））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	新田被害	・（富士見新田（牟呂））弘化四年（1847）に修築に成功した。しかし、嘉永7年（1854）の大地震で再び破損し、その後幾度かの修築計画が出たが成功せず、明治にいたった。（牟呂史）

（６）磯辺・福岡・中野

磯辺では、明応 7(1498).6.25、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が記録されている。明応 7(1498).6.25 は大津波で海辺の家屋が破壊され、宝永 4(1707).10.4 は津波により海岸の堤防を破壊し品井潟（神野新田町）、広嶋（駒形町）などが浸水し、嘉永 7(1854).11.4-5 では津波で草間村の海岸が決壊したとされている。このように、津波の被害が内陸まで及んでいるが、当時の磯辺の地形は、駒形町・本宮神社により低い所はほとんど海であり、内張川に沿って入り込んでいる所が草間・向草間であった（草間村には湊があり、海上輸送が盛んであった）（校区のあゆみ　磯辺）など、当時の海岸線は集落と近接であったと思われる。

こうしたことから、磯辺より内陸にある小池町（福岡）、小浜町（中野）でも、津波にまつわる言い伝えがある。小池町では、三河に地震があり津波が長円寺の下で止まったことから、そのあたりの土地を「ここまで潮が満ちてきた」という意味で「潮満（塩満）」と呼ぶようになり、長円寺を「海の潮の音が聞こえた寺」という意味で「潮音寺」と呼ばれ、津波のあった 7 月 9 日を潮音寺のお祭り日にしている。小浜町では、大地震で津波の被害を受け建物も道具も流失してしまったが、縁の下に隠してあった銭は全部残っており、その後この小さな浜辺の村も昔通りの平和な村になり、「小浜村」という名になったと伝えられている。

表２―１―６　磯辺・福岡・中野の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1498.7.23	明応7.6.25	家屋流失	・（磯辺）大津波によって海辺の多くの人々が住まいを破壊された。（校区のあゆみ　磯辺（草間区地誌略））
1707.10.28	宝永4.10.4	堤防破壊、海水浸水	・（磯辺）津波が海岸に打ちよせ堤防を破壊し品井潟・広嶋などに流れ込み、砂浜になってしまった。（校区のあゆみ　磯辺（草間区地誌略））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	海岸破壊	・（磯辺）津波によって草間村の海岸は決壊してしまった。（校区のあゆみ　磯辺（草間区地誌略））
1944.12.7	昭和19.12.7	津波なし	・（磯辺）津波は発生しなかった。（校区のあゆみ　磯辺）
		伝承	・（小池（福岡））あくる年に、三河に大地震があったそうじゃ。七月九日じゃと言われとるがのう。三河のあちこちで、うちはぶっつぶれるし、海辺の村にゃあ津波がくるし、そりゃあ、えれえことじゃった。（省略）村の衆は、われ先にと逃げてしもうた。どん作は、「そうじゃ、こんな時こそ、長円寺の観音様に助けてもらおう。」と言うて、長円寺の観音堂の前にひれふして、「観音様、どうか津波を止めてくだせえ。おらんとうの田畑やうちを守ってくだせえ。おねげえでごぜえます。」と、くりかえしくりかえしお祈りしたんじゃと。（省略）おしよせてきた津波が、ふしぎなことに、長円寺の下までくると、止まったんじゃと。（省略）「長円寺は、おらが村のだいじなお寺じゃ。」と言うて、みんながお参りするようになった。（省略）お坊さんをてあつくほうむって、みんなで力を合わせて、長円寺をりっぱなお寺に建て直してのう、新たに仁王門も作った。長円寺の下で津波が止まったということで、そのあたりの土地を、村の衆は『ここまで潮が満ちてきた』ちゅう意味で、潮満（しおみち）とよぶようになった。後に塩満と書くようになった。（省略）『海の潮の音が聞こえた寺』ちゅうことで、長円寺は、いつしか潮音寺と呼ばれるようになった。地震と津波のあった七月九日を潮音寺のおまつりの日にした。（豊橋市立福岡小学校ホームページ）
		伝承	・（小浜（中野））「地しんだ!!」二人が立っておれん程の大地しんだ。浜で腹ばいになっとると、沖の方でコーツという音がする。「津波だ!!」「こりゃあ、こうしちゃあおれんぞ。早く高いとこへ逃げろ。」「津波だあ、津波だあ!!」（省略）津波がひいてから、しょぼしょぼと、もどってみると、土台の石だけを残して、建物も道具もごっそりと、津波が海へさらって行ってしもうた。「おみよ、縁の下の銭が残っとるかも知れんぞ。」どろをよけて、かめをうめた所をほってみると、「やい、銭だけは、全部残っとるぞ!!」「よかったのん。それだけありゃあ、小さなうちが建つらあ。」（省略）この小さな浜辺の村も、昔通りの平和な村になってのう。小さな浜辺の村ちゅうことで、小浜村ちゅう、名になったそうな。（豊橋市立福岡小学校ホームページ）

（７）芦原・高師

高師・芦原では、明応 7(1498).8.25、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が記録されている。明応 7(1498).8.25 は高さ 3m の高波が高師浜にきたと記録されており、嘉永 7(1854).11.4-5 は大津波が襲来し、家屋敷が多数流失し、道目記地区（大山町）の集落は松井に移転し、浜海道船原（浜道町）の集落の一部も高地へ屋敷替えしている。

江戸時代には、梅田川沿いの高足村、大崎村、草間村に湊があった。中でも中核になっていたのが高足湊（現・西高師町船渡）であり、20～50 石ぐらいの大きな船も入り、船着場には問屋もあった（校区のあゆみ　芦原）など、港町として形成していたが、地震による津波が梅田川を遡上し集落に大きな影響を与えたことがうかがわれる。

表２―１―７　芦原・高師の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1498.9.20	明応7.8.25	津波現象	・高師浜に高波がきた。高さ約3m程度と思われる。（東海地方地震・津波災害誌）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	家屋・神社流失、移転	・三河湾に大津波襲来、家屋敷流失多数、道目記地区（大山町）は松井に屋敷替えした。神社も移転した。浜海道船原（浜道町）の一部は高地へ屋敷替え（移転）した。（校区のあゆみ　芦原）

（８）大崎・老津・杉山

老津では、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で 3～4m の津波がきており、地震による倒壊家屋が 40 戸あったと記録されている（津波の影響かは不明）。

大崎では、昭和 20(1945).1.13 の地震で津波（最大全振幅 52cm）が観測されているが、被害は記録されていない。

なお、杉山は津波による被害は記録されていないが、図１－３－１の津波被害地浸水域をみると、明応 7(1498).8.25、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 の各地震で津波が紙田川を遡上し内陸まで浸水していることが推測される。

表２―１―８　大崎・老津の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23	嘉永7.11.4-5	津波現象、家屋倒壊	・（老津）波高3-4m。倒壊家屋40戸、山崩れのほか津波がきた。（東海地方地震・津波災害誌（常光寺年代記））
1945.1.13	昭和20.1.13	津波現象	・（大崎）最大全振幅52cm。（東海地方地震・津波災害誌） ・（大崎）最大振幅26cm（第1波）、津波周期（分）10-30、平均（分）20、初動押波。（東海地方地震・津波災害誌）

２―１―２　太平洋岸

（１）全体の概要

豊橋市の太平洋岸では、これまで 11 回の地震による津波が記録されている。そのうち被害が記録されている津波は次の 6 回であり、①嘉穂 3(1096).11.24 の津波は波高 3～7m の規模で船・漁具流失、②明応 7(1498).8.25 の津波は波高 5～8m の規模で死傷者、家屋損壊被害、③慶長 9(1605).12.16 の津波は波高 5～6m の規模で船・漁具の流失、④元禄 16(1703).11.23 の津波は波高 2m の規模で漁舟流出、⑤宝永 4(1707).10.4 の津波は波高 6～7m の規模で死傷者、家屋損壊、漁具流出、⑥嘉永 7(1854).11.4-5 の津波は波高 8～10m の規模で家屋損壊となっている。

渥美半島の太平洋岸には、数 10～200 戸程度の塊村をなした 40 近くの集落が、海食崖の前面に広がる後浜や開折谷の中にあり、半農半漁の生活をしていた。しかし、度重なる暴風雨や高潮に悩まされ、海岸沿いの「浜屋敷」から台地上の「山屋敷」へ移転が続き、宝永 4(1707).10.4 の津波で漁具の流失だけでなく集落自体も大きな被害を受け、それを契機に浜屋敷は完全に放棄されたといわれている。

しかし、高豊村から小塩津村（田原市）に至る集落は、宝永 4(1707).10.4 の地震では海岸の崩落や漁具の流出はあったものの、津波による家屋への直接被害は記録されていない。このことから、太平洋岸の集落ごとに、宝永 4(1707).10.4 の津波による被害状況に違いがあるものと見受けられている。

表２―１―９　豊橋市太平洋岸の津波被害記録（１）

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容	被災地等
1096.12.17	嘉穂3.11.24	津波被害	・波高3-7m。（明応津波はやはり高い6-8mの波高と思われるが永長津波はやや低かったように思われる。）（東海地方地震・津波災害誌） ・慶長と同様（慶長の津波においても船の破損、魚網、魚具類の流失など）の被害があり。（東海地方地震・津波災害誌）	
1498.9.20	明応7.8.25	死者、家屋倒壊	・津波5-8m。（東海地方地震・津波災害誌） ・大地震、地破同時大海潮（大津波）来諸国湊浦々津々人家倒死者多数。（老津村史（細谷村記録常光寺年代記）） ・大地震津波襲来。（校区のあゆみ　高豊）	
1586.1.18	天正13.11.29	津波襲来	・津波が渥美表浜に波及したものと考えられる。（東海地方地震・津波災害誌） ・大地震津波襲来。（校区のあゆみ　高豊）	
1605.2.3	慶長9.12.16	船・漁具流失	・推定波高5-6m。（明応津波はやはり高い6-8mの波高と思われるが永長津波はやや低かったように思われる。）（東海地方地震・津波災害誌） ・片浜の船皆打ち破れ、漁網も流出した。（東海地方地震・津波災害誌（常光寺年代記））	
1703.12.31	元禄16.11.23	船・漁具流失	・この津波にて漁舟多く流さる。（赤羽根町史（常光寺年代記））	高豊一帯、高塚
1707.10.28	宝永4.10.4	死者、家屋流失、漁具流失	・波高6-7m。（東海地方地震・津波災害誌） ・渥美の太平洋沿岸に津波の被害が大きく。（東海地方地震・津波災害誌） ・太平洋沿岸の村落は大半が流失してしまった。これを契機に東観音寺・常光寺などをはじめ多くの寺社や村落が北方の高地に移転し、それまでの街道は修復できないまでに破壊された。（愛知県文化財調査報告書第六六集-田原街道・伊勢街道-） ・当浜津波挙り、十三里間の漁船尽く流損し、一村にて一両人宛流死す。（赤羽根町史（常光寺年代記）） ・遠州灘沿岸では5-6町四方の海中に島ができたが、これは潮が引いたので現われたものかもしれない。（東海地方地震・津波災害誌）	高豊一帯、赤沢、伊古部、高塚、二川一帯、細谷

表２―１―９　豊橋市太平洋岸の津波被害記録（２）

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容	被災地等
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	家屋倒壊	・波高8-10mで被害あり。（東海地方地震･津波災害誌） ・表浜（遠州灘沿岸）は大津波におそわれたが、倒壊家屋、山くずれがあり、余震は7か月ばかりつづいた。（愛知県災害誌） ・安政元年（1854年）の大地震では「片浜十三里皆がけくづる」と地元の記録にある。（静岡県建設部ホームページ（遠州灘海岸保全基本計画（平成15.7静岡県・愛知県）））	高豊一帯、城下、赤沢、伊古部、高塚、二川一帯、細谷
1944.12.7	昭和19.12.7	津波襲来	・波の高さ1-1.5m。（東海地方地震･津波災害誌） ・太平洋沿岸デハ地震直後海水ハ引イテ行キ約三分位ノ後、カエシテキタ。然シ波浪ハ強クナカッタ。（伊古部郷土誌（愛知県渥美半島災害状況調査）） ・波高は宝永や安政津波の約4分の1くらい（※宝永・安政両津波はだいたい同じ高さの6-8m）となっており、かなり低く被害も生じていない。（東海地方地震･津波災害誌）	
1945.1.13	昭和35.5.24	津波襲来	・渥美半島にやはり押し寄せたらしいのですが、その時二から五メートル来たではないかと言われています。（ふるさと細谷）	
2010.2.28	平成22.2.28	住民避難	・赤羽根で最大70cmの津波の記録あり。（東愛知新聞） ・表浜の海岸には多くのサーファーらが、サーフィンをしていたが、津波警報発令と同時に同市消防団、消防本部などの車両延べ47台と人員294人が巡回して避難を呼びかけた。（東日新聞） ・今回の「騒動」で、豊橋市伊古部海岸ではサーファー対策が浮き彫りになった。午前11時すぎ、数人がサーフィンを楽しんでおり、そこに津波襲来に関する「緊急情報」が流れたものの、ほとんど聞き取れず、サーファーらに情報は伝わらなかった。（東愛知新聞）	
2011.3.11	平成23.3.11	住民避難	・赤羽根で最大1.6mの津波の記録あり。（東愛知新聞） ・豊橋市の海岸部に津波注意報が出されたのを確認すると、土本潤一署長は即座に「表浜にパトカーを出せ」と指示。パトカーはすぐに海岸部へ向かった。（東愛知新聞）	
		津波による集落移転	【表浜の集落の概要】 ・「表浜」と呼ばれる渥美半島の太平洋岸には、数10～200戸程度の塊村をなした40近くの集落が、断続的に連なっている。この表浜集落も、海食崖の後退に伴い、北方の高地へと移転が繰り返されてきた。現在の集落の南側には「元屋敷」と呼ばれるかつての屋敷跡が各所に残されている。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）） 【長谷村（湖西市）～高豊村での集落移転の展開】 ・長谷村から高豊村にかけては海食崖上の天伯原台地の標高は70mと高いが、開折谷により深く浸食されているため、海食崖の先端部はなだらかになっている。江戸時代前期には、集落や耕作地が海食崖の前面に広がる後浜や開折谷の中にあり、半農半漁の生活をしていた。宝永地震では、崖の崩落や大津波のために、漁具の流出だけでなく、集落自体も大きな被害を受けた。毎年襲来する暴風雨や高潮に悩まされ、海岸沿いの「浜屋敷」から、台地上の「山屋敷」への移転が続いていたが、宝永地震を契機に浜屋敷は完全に放棄された。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）） ・高豊村から小塩津村に至るまでの集落については、池尻村を除けば、海崖の崩落や漁具の流出はあったものの、津波による家屋への直接の被害は記録されていない。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸））	

（２）高豊

高豊は、城下、(東西)赤沢、伊古部、高塚、(東西)七根を包含した地域であるが、この地域では元禄 16(1703).11.23、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5、昭和 19(1944).12.7 の地震で津波が記録されている。高豊は、江戸時代から現在まで 4～5 回の屋敷替えがあったとされるが、その背景には貞享 3 年(1686)の地震、宝永 4(1707).10.4 の地震・津波、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震・津波、昭和 19(1944).12.7 の地震の 4 つが大きくかかわっている。

具体的には、①貞享 3 年(1686)5 月から宝永 4(1707).10.4 にかけての地震、津波災害で村全戸数の大移動があったとされ、それまで渚近くに構えていた家を後背地の丘陵台地に家屋敷を移した（高豊一帯の寺社が一斉に移転したのもこの時期）、②嘉永 7(1854).11.4-5 の地震、津波災害で、渚より丘陵台地に家を移した時の山屋敷跡から更に北方に約 100m 後退した（今日、「旧屋敷」と呼んでいる名はこのときの屋敷をさしている場合が多い）、③昭和 19(1944).12.7 の地震災害により屋敷替えした（津波は発生せず津波による被害はなかった）と報告されている。

表２―１―１０　高豊の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1703.12.31	元禄16.11.23	漁具流失	・津波起こり、七ヶ村の漁師漁具類一切流失。この時、高塚村若宮様陸地に遷宮。（高豊史）
1707.10.28	宝永4.10.4	家屋被害、漁船流失	・津波おこり家屋大破、漁船流失。（高豊史） ・津浪がおし寄せ舟と網のすべてを流した。暮迄余震が続き、三度津浪が押し寄せ、浜は皆海になった。（高豊史（高塚村庄屋の田中八衛門文書）） ・城下、赤沢、伊古部、高塚にて津波被害の記録あり。（東海地方地震･津波災害誌）（高豊史）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波襲来	
1944.12.7	昭和19.12.7	被害なし	・海岸ニテハ引潮ハ一ノ潮迄露出シタルモ、ツナミモ来ラズ被害ナシ。（高豊史（高豊村の被害報告書））
1686～1944	貞享3～昭和19	津波による集落移転	【高豊の集落移転の特徴】 ・城下町の大円寺を始め、西赤沢町の吉祥院、伊古部町の法蔵寺、西七根町の聴松庵、東七根町の東光寺なども、延宝から宝永にかけての自然災害により、海食崖下より現在地に移転している。なお寺院移転にともない家屋の移転も行われその旧居跡などは、高塚町、伊古部町などに今なお残り、伊古部町の「本郷」などはすでに一部が海中となっている。高豊一帯の集落の記録では、江戸時代から現在までの屋敷替えの回数は、実に4回から5回にも及ぶという。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）） 【高豊の集落移転の展開】 ・高豊村の住人の家屋敷は今日判明する限りでは、少なくとも三回から四回の屋敷替を行っている。 （1）貞享三年（一六八六）五月から宝永四年（一七〇一）にかけての地震、津波災害による屋敷替・・・貞享三年から宝永四年の一五年間における屋敷替は村全戸数の大移動であり、それまで渚近くに構えていた家を後背地の丘陵台地に家屋敷を移したのである。高塚町の田中八兵衛文書によると、「貞享三年八月五日の大地震により家裏山が崩れ、大分の家がその下敷となったために、やむなく山屋敷に家を移し家普請をした」とある。そして「家普請に二ヶ月弱の日数を要した」とある。 （2）嘉永七年（一八五四）一一月の四国南海上を震源地とする地震、津波災害による屋敷替・・・今日も渚より丘陵台地に家を移した時の山屋敷跡は海の見える丘陵台地上にわずかながら残っている。この山屋敷から更に北方に約一〇〇メートル後退し、屋敷替が行われている。これが嘉永七年（一八五四）一一月五日の四国南海上を震源地とした地震災害の被害者らである。今日、各家で呼んでいる「旧屋敷」の名はこのときの屋敷をさしている場合が多い。 （3）昭和一九年一二月八日、熊野灘沖を震源地とする地震災害による屋敷替。（高豊史） 【宝永4(1707).10.4）の津波の被害】 ・城下、東西赤沢、伊古部、高塚、東西七根を包含した旧高豊村の地域で、この内高塚、伊古部は野依村、東西の七根は高師村からそれぞれ住昔分村されたものである。この地域の海岸は宝永四年の大海嘯に欠崩れて住民は数町又十数町後退移転した。随って古来の外浜街道は海岸近くを通っていたものである。（豊橋寺院誌）

（２）－１　城下（豊南）

城下（豊南）では、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が記録されており、共に 6～7mの高さの津波で漁具流失の被害は記録されているが、集落への被害は報告されていない。これは城下が、中世後期に豪族畔田氏の居城があったとされ、崖下に集落や水田が存在していた（これが城下の地名の起源である）が、波浪浸食により宝永 4(1707).10.4 の地震前の早い時期に、海食崖下の上の台地に立地したためと報告されている（貞享 3 年(1686)の地震で城下の部落が浜屋敷から山屋敷に移転したとの記録もある）。

しかし、八柱神社（城下）の文献をみると、「宝永四年の地震により、それまで塩ヶ嶋一円に居を構えていた村人は 4、5 町後方の「みそか谷」一帯に居を移す」と報告されており、一部浜に集落が残っていたと考えられ、宝永 4(1707).10.4 の津波で集落が被害を受けた可能性も否定できない。

表２―１―１１　城下（豊南）の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	津波襲来	・波の高さ・6-7m。（東海地方地震・津波災害誌）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波、漁具流失	・波高は地形から6-7mと推定。浜漁道具の品残らず流失。（東海地方地震・津波災害誌）
1686以前	貞享3以前	津波による集落移転	【城下の集落移転の特徴】 ・城下の旧道よりさらに南に、海食によって削られたが、中世後期の豪族畔田氏の居城跡がある。城跡は、太平洋の海岸から50m余の絶壁上にある。出曲輪以南は浸食によって海中に沈んだが、主要部と北側の家臣団の居館跡がよく残っている。南北朝時代には城の南方に低地があり集落があったと伝えられる。「城下」という地名も、城より下にあったからつけられた名である。集落が北へ北へと移動し、城跡よりも北（上）へ移動した後も、そのまま「城下」と称している。（渥美町郷土資料館　研究紀要第2号（加藤克己）） ・城下岸壁の崖の上に、南北朝時代に居城が築かれ、崖下に集落や水田が存在していた。これが「城下」の地名の起源となったが、海食崖の激しい波浪浸食により海岸沿いの集落は、早い時期に消滅している。江戸時代には、海食崖の上の台地に集落が立地していた。このため、宝永地震では、大津波による集落の被害はなく、浜辺においてあった網や船などの漁具の流出が主な被害として記録された。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）） 【貞享3年】 ・高塚、西七根、城下などの部落が浜屋敷から山屋敷へと移転したのも、この貞享三年の地震の翌年。（高豊史）
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による神社の影響	【八柱神社（城下町）】（宝永地震（津波不明）） ・城下村の八柱神社は赤沢村より分村の当時には前述の通り、祭神として貴船大明神と天照大神であった。ところが宝永六年（一七〇六）以降には祭神が八王子と改められている。その理由は宝永四年（一七〇四）の地震により、それまで塩ヶ嶋一円に居を構えていた村人は四、五町後方の「みそか谷」一帯に居を移すと共にそれまで城下村の三嶋が別々に祀っていた貴船大明神・天照皇太神・砂宮神を一処にあつめ、八王子大明神と改名したのである。（高豊史）

（２）－２　赤沢

赤沢では、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が記録されており、共に 6～7mの高さの津波であったと報告されている。

宝永 4(1707).10.4 の地震では、赤沢は被災地（津波の影響かは不明）と記録されており、太平洋に注ぐ開折谷の小河川に宝永地震の津波が浸入し、川筋の標高数 m 付近にあった村落が被害をうけていると報告されている。また、同地域にある吉祥院は、元和元年（1615）、延宝 8 年(1680)の海嘯（地震によるものかは不明）により、少し北方に移ったが、宝永 4(1707).10.4 の地震で寺山がくずれ、現在地に移転し、それにともない集落も移転したと記録されている。

なお、宝永 4(1707).10.4 の地震の際に、赤沢、伊古部では 5 町（500m）四方の島が海中にできたといわれており、これは高さ 6～7m の大津波が引く際に、幅 500～800m ほどの海底が出現し島のようになったのではないかと考察されているなど、津波の引き潮の様子を伝えている。

表２―１―１２　赤沢の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	家屋被害	・波の高さ6-7m。（東海地方地震・津波災害誌） ・太平洋に注ぐ開析谷の小河川に、宝永地震の大津波が浸入した。川筋の標高数m付近にあった村落が被害を受けた。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）） ・被災地は赤沢 。（愛知県災害誌（参河国聞書　三州吉田記・宝永地震記）） ・ 赤沢、伊古部の海中浜中に島山ができた。（校区のあゆみ　細谷（細谷校区史）） ・被災地は赤沢、伊古部、西伊古部など34ケ村に及んだ。また、5町（約500m）四方の島が海中にできたという。この夜は余震が30～40回もあり、余震は翌春まで続いた。（藤城氏：高さ6-7mの大津波が引く際に、幅500-800mほどの海底が出現し、島のようになったものと考えたい。）（田原市博物館研究紀要第3号（藤城信幸）（参河国聞書、三州吉田記））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波襲来	・津波の高さ6-7m。（東海地方地震・津波災害誌）
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による神社への影響	【吉祥院】（宝永地震（津波不明）） ・現在地の南方海岸地にあったが、延宝八年（一六八〇）と天和元年（一六八一）の海嘯のために、少しく北方に移り、後更に宝永四年一〇月四日（一七〇七）の地震により、寺山がくずれ、危険な状態にさらされたために現在地に移転した。（高豊史）

（２）－３　伊古部

伊古部では、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が記録されている。

宝永 4(1707).10.4 では、伊古部は被災地（どの程度津波の影響かは不明）と記録されており、特に船・漁具が流失するなど漁業に大きな被害があったほか、集落にも被害を与えた。当時の伊古部集落の中心は、大塚・本郷・枇杷ケ谷一帯にあり、海食崖の下に通っていた伊勢街道に近いところに栄えていた（移転先の段丘崖上は地下水位が深く、雨水で生活用水に利用していたことも浜に集落があった 1 つの要因と思われる）が、宝永 4(1707).10.4 の地震・津波を境に、浜辺にあった集落は段丘崖上に移転している。なお、法蔵寺にある馬頭観音は、宝永 4(1707).10.4 の津波による村の移転によって置き去りにされていたものを、本堂に納めたという言い伝えがある。

嘉永 7(1854).11.4-5 の津波は 6～7m の規模であり、船 3 隻が大破・流失、漁具は残らず流失し、居宅も高波で大破するなど集落にも甚大な被害を与えた。下永良陣屋の日記では、伊古部村の大羽山（西伊古部海岸と思われる）が 800m 海中に押し出され、一つの島になったと報告されており、引き潮の威力を伝えている。なお、地元では、この津波で推定 29m の高台まで海水が上がったとの言い伝えもある。

そのほか、昭和 35(1960).5.23（津波は 24 日）の地震では、伊古部海岸に通常の高潮より 1m 高い津波があがり、地元の有志で所有している地引網の漁船（愛知県漁連準会員）を引き揚げた（被害はない）という地元証言がある。

表２―１―１３　伊古部の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	漁業被害	・伊古部の漁業は大きな災害を受けた。船、網、道具などの多くが流失した。網の復活をはかるすべもなく、二～三人の個人が小網を作り細々と漁を続けた。（伊古部郷土誌） ・被災地は井古部・西伊古部。（高豊史（高塚村庄屋の田中八衛門文書）） ・ 赤沢、伊古部の海中浜中に島山ができた。（校区のあゆみ　細谷（細谷校区史）） ・被災地は赤沢、伊古部、西伊古部など34ケ村に及んだ。また、5町（約500m）四方の島が海中にできたという。この夜は余震が30～40回もあり、余震は翌春まで続いた。（藤城氏：高さ6-7mの大津波が引く際に、幅500-800mほどの海底が出現し、島のようになったものと考えたい。）（田原市博物館研究紀要第3号（藤城信幸）（参河国聞書、三州吉田記））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	船流失、漁具流失、家屋被害	・津波の高さは地形から6-7mと推定。渥美表浜において道具船3隻のうち1隻大破し、2隻流失した。地引網4状、登網38、大袋4口、中袋2口、下袋2口その他船道具残らず流失した。居宅も高波で大破した。（東海地方地震・津波災害誌） ・伊古部村字大羽山（西伊古部海岸のことか）は凡そ八〇〇メートル海中へ押し出され、一つの島となってしまった。そして船、網ともに高浪にて残らず引かれてしまった。（高豊史（下永良陣屋日記））
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による集落移転	【伊古部の集落移転の特徴】 ・江戸時代の伊古部集落の中心は、大塚・本郷・枇杷ケ谷一帯にあり、海食崖の下を東西に通っていた伊勢街道に近いところが栄えていた。宝永地震を境に、浜辺にあった集落は、段丘崖上に移転した。地下水位が深いため、雨水をためて生活用水に利用しなければならなくなった。（田原市博物館研究紀要第3号（藤城信幸）（伊古部郷土誌））
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による遺跡	【法蔵寺】（宝永地震） ・馬頭観音は、津波による村の移転によって置き去りにされていたものを、本寺に納めたものといわれる。（愛知県文化財調査報告書第六六集　-田原街道・伊勢街道-）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波による史跡	【震災、鎮めの石碑】 ・碑文　既白大士（太陽神）、八大竜王（水神）　根礒大明神（海岸守護神）。（震災、鎮めの石碑） ・この石碑は安政6年に網元の仙太郎さんが震災が二度と起きない事を願って立てました。 安政元年（嘉永7年）の地震について「安政元年（1854）11月4日午前9時頃と、5日午前5時頃続けて2度にわたり起きたマグニチュード8.4と言われる大地震により伊古部村の大羽根山が800メートル海中へ押し出され一つの島となった。漁労に使う舟、網とも高波に残らず引かれた。家屋の倒壊、流出甚大なり」。と古文書に記されいる。この地震は「大津波をともなっており、言い伝えでは推定29メートルの高台まで海水が上がった」とのことである。（震災鎮めの石碑案内板）
1960.5.24	昭和35.5.24	津波についての住民証言	【住民証言】 ・昭和35年のチリ地震の際には、通常の高潮より1m上がり、海岸道路付近まできた。地引網の漁船（愛知県漁連から準会員として登録している地元の有志で所有している船）が伊古部の海岸にあり、その船は引き揚げたため、特に被害はなかった。（西七根地区住民より聞き取り）

（２）－４　高塚

高塚では、元禄 16(1703).11.23 の地震による津波、宝永 4(1707).10.4 の地震とその後の余震による津波、嘉永 7(1854).11.4-5 後の余震による津波が記録されている。

元禄 16(1703).11.23 の津波では漁具類が流失し、若宮様が陸地に遷宮したとの記録がある。宝永 4(1707).10.4 の津波では、船・網をすべて流失し、また余震が続き 3 度津波が押し寄せ、浜は皆海になったと報告されている。高塚の集落は、貞享 3 年(1686)の地震で浜屋敷から後方の台地上の山屋敷へ移転したとされており、元禄 16(1703).11.23 と宝永 4(1707).10.4 の津波による集落への直接的な被害は報告されていないが、宝永 4(1707).10.4 の地震により高塚村の 24 軒（40%）が転び、戸とうの宮様[2]（菟頭神社）なども海へ崩れ落ち、また浜屋敷にいた住民 1 名が土砂の下敷きとなったなど、地震による被害は大きかったと報告されている。

また嘉永 7(1854).11.4-5 の地震では余震が翌年まで続き、そのたびに高潮が起こり漁船や網を流出したため、村が極度に疲弊したなどの津波による漁業への被害が報告されている。

表２―１―１４　高塚の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1703.12.31	元禄16.11.23	漁具流失	・津波起こり、七ヶ村の漁師漁具類一切流失。この時、高塚村若宮様陸地に遷宮。（高豊史）
1707.10.28	宝永4.10.4	船・漁具流失、家屋等被害	・津浪がおし寄せ舟と網のすべてを流した。暮迄余震が続き、三度津浪が押し寄せ、浜は皆海になった。（高豊史（高塚村庄屋の田中八衛門文書）） ・地震により、高塚村の家は24軒（40%）が転び、あとすべての家が傾いた。戸とうの宮様（菟頭神社）は古池、松木ともに海へ崩れ落ちてしまった。その時に左五兵衛という者1人は、浜屋敷にいて土砂の下敷きとなってしまった。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）（高塚村庄屋　田中八兵衛文書））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	船・漁具流失	・安政元年の大地震の余震は翌年一杯迄続き、そのたびごとに高潮が起り、そのため漁船や網を流すという被害。 高塚村ではこの地震により村が極度に疲弊し、庄屋の小野田吉次郎は代官に助郷免除を嘆願している。（高豊史（愛知県災害誌））
1680～1686	延宝8～貞享3	津波による集落移転	【貞享3年】 ・高塚、西七根、城下などの部落が浜屋敷から山屋敷へと移転したのも、この貞享三年の地震の翌年。（高豊史） 【延宝8年～貞享3年】 ・高塚村は、延宝8年(1680)の大型台風のために、網や漁船は残らず流され、民家も倒壊され、海崖は崩れ谷となった。海岸沿いの「浜屋敷」は危険な状態にさらされた。さらに、貞享3年(1688)に遠州灘を地震が襲った。この地震は先の台風によって欠壊した浜屋敷の谷をさらに大きく崩し、谷を中心に地割れをつくった。このため高塚は浜屋敷より後方の台地上の「山屋敷」に家屋を移転した。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による神社の影響	【菟頭神社】（宝永地震（津波不明）） ・地鳴り、大地しん大分にゆれ、山くずれ、海へなき引申し候ふ……戸とうの宮様、古地松木共に海へゆり出し申し候」と「戸とうの宮様」が宝永四年の大地震によって海へゆり出てしまう被害にあった。（高豊史（名主田中八兵衛の「御免定書付」））

（２）－５　七根

七根では、地域にある竜泉寺が宝永(1707)4.10.4 の地震で津波の被害をうけ、移転したと記録されている以外、地震による津波の被害は報告されていない。これは西七根が貞享 3 年(1686)の地震で浜屋敷から山屋敷へ移転したため、宝永 4(1707).10.4 の津波の被害は少なかったものと推測される。しかし、当地域に立地する御厨神社の記録では、御厨神社が立地していた「河内の地」は宝永の大津波を最後に海中に没し、安全な北方高地に移転

[2] 高豊史では「「戸とうの神」と書かれているのはあくまで当て字であり、すでに寛永 10 年（1633）の時点には「奉造立菟頭大明神」と棟札には書かれている。」と記されている。

し、住家が移る時に氏神（御厨神社）も遷宮されたと記されており、宝永地震による津波で集落になんらかの被害があったものと思われる。

なお、豊橋市の集落は江戸時代初期、海食崖の下にあったとされている。江戸時代初期の「小松原村絵図」をみると、小松原村の海岸の浜辺に西七根村の田畑が示されていることから、当時、西七根村でも海岸沿いに田畑を所有していたことが推測される。

また、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震による津波について、御厨神社の絵馬が当時の七根の様子を描いており、その中で「大津波来りて　村々の網舟　悉く押流され目に掛る物もなし」と伝えている。

表２―１―１５　七根の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1686～1707	貞享3～宝永4	津波による集落移転	【七根の集落移転の特徴（※）】 ・西七根の起り：西尾市岩瀬文庫に再三足を運び古文書をあさって居る中、はからずも三河古地図に、宝暦年代の地図の中に七根村の中で「家の内」と書かれた所が有った。是正しく河内である。種々村の記録を調査した結果も同じく、昔の先住民は、現在の高地でなく海岸近くで生活を営み、少々の農業や漁業をして生活していたと思われる。古老より言い伝えられている事は、昭和二十五・六年迄栄えた地曳網にて二ツ山かかり（岩場）と言われる所があった。これまで昔は陸続きにして先住民が居たと言われていた。此の所が真の河内である。而し、長い年月の間に太平洋の荒波や強い季節風、又、度々の地震津波のために陸地は次第に浸蝕されていき、宝永の大津波を最後に海中に没し去ったのである。故に河内の住民は安全な北方高地に居を移すを余儀無く去れ、海岸に浜屋敷を構えた。是も長くは続かず更に北方に上り山屋敷へと移り住むようになっていった。（御厨神社） 【貞享3年】 ・高塚、西七根、城下などの部落が浜屋敷から山屋敷へと移転したのも、この貞享三年の地震の翌年。（高豊史）
1707.10.28以前	宝永4.10.4以前	津波による史跡	【小松原村絵図（江戸時代前期）】 ・東観音寺が海岸近くに位置していることから江戸時代前期のものと考えられる。図は1町を1寸（約3600分の1）に縮尺した実測図で、南北に細長い同村田畑の他村との入り込みを色分けで示し、小松原村の田畑は黄土色、東隣小島村の田畑が紫色、西隣寺沢村の田畑がオレンジ色、その西、西七根村の田畑が白色で示されている。（絵図から地図へ―移り変わる豊橋の風景―（小松原村絵図））
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による神社の影響	【竜泉寺】（宝永地震・津波） ・創立の年代は不明で、初め海辺にあったが波浪のため欠崩れたので、この地の代官戸田三郎兵衛から元屋敷同様の換地を受けて再興した。前記浜欠は宝永四年の海嘯に依ったものと思われる。（豊橋寺院誌） 【御厨神社】（宝永地震・津波） ・氏神様も河内の地（※参照）があった時代は其そこに建立されていたと思われるが、住家が移る時には氏神も移り、度々遷宮されていたであろう。元禄八年の棟札に、「此の下に、在りしをここに移す」とある。順に山の上に居を構えた様子を知ることができる。御厨神社が現在の赤坂の地に鎮座せしは何時の時代であるかは、確たる記録がないので知る由もないが、何れ元禄以後には間違いない。（御厨神社）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波による史跡	【御厨神社】 ・嘉永七年（一八五四）に一般に云われている「安政の大地震」が起った。安政の大地震は一一月四日、五日と二日にわたり宝永地震と同様に関東以西の太平洋岸に大きな被害を及ぼした。―中略―西七根御厨神社絵馬（巻頭写真）には「高塚村の彦坂与六網の漁船が津浪後西七根の浜辺の枝に打ち上げられた」と記してある。（高豊史(西七根御厨神社絵馬／下永良陣屋日記)） 【御厨神社絵馬】 ・去ル安政元年寅霜月四日　朝五ツ頃天地も崩る斗り　大地震也　此日宿頼有りて　氏神社へ参籠す　地しん治れバ我家へ帰り　網舟共覚束なく　先浜辺へ参り候へば最早　大津波来りて　村々の網舟　悉く押流され目に掛る物もなし　即舟のミ　山の半バにたゞよひ徒き　是ばかり誠に　氏神の冥助と　身の毛もよだちて覚えし　隣村彦坂与六郎所持の網　此表共　右の舟にて尋出す　数多の漁船残りなく　打ちくだかれ　即舟斗り安穏に助り候ハ　只事にあらず　余りの有難さに　此船板を額に拵えて　即子孫の果ゝに至る迄　神明の冥助を　仰き奉らんが為　捧奉もの也 ″″慶應三年　　丁卯四月五日　　儒に應じて　周岳之を図す。（御厨神社宮司　鈴木源一郎（平成二十三年十月吉日））

（３）二川

二川は、寺沢、小松原、小島、細谷を包含した地域で、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が記録されている。

宝永 4(1707).10.4 では大津波が発生し、多くの人馬が死亡する被害を受け、その影響で

社寺住民共に現在地に移ったと報告されている。宝永 4(1707).10.4 の地震時、東観音寺を始め数多くの寺院・神社が二川に立地していたが、この地震を境に一斉に移転していることが記録されている。

江戸時代前期と江戸時代中期の「小松原村絵図」をみると、江戸時代前期の小松原は、太平洋の海岸沿いに集落が多く集まり、原野の中の谷筋を中心として耕地が点在しているが、江戸時代中期以降の小松原は、東観音寺のほかに集落が内陸部に多く描かれており、津波によって多くの集落が内部に移ったことがわかる。

なお、豊橋市の集落は江戸時代初期、海食崖の下にあったとされている。江戸時代初期の小松原村絵図でも、海岸の浜辺に小松原村のほか小島村、寺沢村、西七根村の他地域の田畑の入り込みの様子が示されており、豊橋市の他の太平洋岸の集落も、海岸沿いに田畑を所有していたことが推測される。

嘉永 7(1854).11.4-5 では 6～7m の津波が発生し、津波が二川町の海岸地帯に来て過半潰れ死人も多かったと報告されているが、詳細は記録されていない。なお、大地震・津波が 7 ヶ月続くなど、余震による津波があったことが報告されている。

表２―１―１６　二川の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	津波被害	・大地震　大津波　山々崩壊　人馬多く死ぬ。（校区のあゆみ　二川）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	死者、家屋被害	・津波の高さ6-7m。（東海地方地震・津波災害誌） ・波の高さは地形から6-7mと推定。地震後津波が来て過半潰れ死人が多かった。津波は二川町の海岸地帯に来たと思われる。（東海地方地震・津波災害誌（大日本地震史料）） ・大地震　津波7ヶ月続く。（校区のあゆみ　二川）
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による集落移転	【二川の集落移転の特徴】 ・高豊地区の東、表浜海岸の小笠原、寺沢、小島、東細谷の地で小松原一帯は往古熊野移住民の開拓発展した処と思われ、寺沢、小島、東細谷の地は鎌倉時代高師村から分村したものといわれている。この地域も宝永四年の大海嘯に遭って社寺住民共数町又十数町後退した現在地に移った。（豊橋寺院誌）
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による史跡	【小松原村絵図】 ・この東観音寺は元来海岸近くに立っていたが、宝永4年(1707)の大地震に伴う津波で大きな被害を受け、正徳3年(1713)に至って海岸より離れた現在地へ移転したもので、左の図は東観音寺が海岸近くに位置していることから江戸時代前期のものと考えられる。図は1町を1寸（約3600分の1）に縮尺した実測図で、南北に細長い同村田畑の他村との入り込みを色分けで示し、小松原村の田畑は黄土色、東隣小島村の田畑が紫色、西隣寺沢村の田畑がオレンジ色、その西、西七根村の田畑が白色で示されている。集落は家の形で表し、太平洋の海岸沿いに多く集まっている。また道は朱線で表し、吉田・大岩・二川などの行き先を記している。この図を見ても荒れた原野の中の谷筋を中心として耕地が点在していることがわかる。これに対して上記の図は、非常に概略的ではあるが、東観音寺が内陸部に位置することから江戸時代中期以降の小松原村の絵図である。この図には東観音寺のほかに集落を表す家の形が内陸部に多く描かれており、図下部の浜沿いに本屋敷の表記があることからも、津波の被害によって多くの集落が内陸部に移ったことがわかる。（絵図から地図へ―移り変わる豊橋の風景―（小松原村絵図））

（３）－１　寺沢

小松原では、宝永 4(1707).10.4 の地震による津波で東漸寺が被害を受けたと記録されている。寺沢では、東漸寺は海辺に立地していたが、宝永 4(1707).10.4 で大海嘯（大津波）の被害にあい、現在の地に移ったと記録されている。なお、東漸寺の行者塔が、当時、海岸の墓地に建っていたが、大津波のときもこの塔だけは残って現在に至っていると報告されている。

なお、豊橋市の集落は江戸時代初期、海食崖の下にあったとされている。江戸時代初期の「小松原村絵図」をみると、小松原村の海岸の浜辺に寺沢村の田畑が示されており、当時、寺沢村でも海岸沿いに田畑を所有していたことが推測される。

表２―１―１７　寺沢の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28以前	宝永4.10.4以前	津波による史跡	【小松原村絵図（江戸時代前期）】 ・東観音寺が海岸近くに位置していることから江戸時代前期のものと考えられる。図は1町を1寸（約3600分の1）に縮尺した実測図で、南北に細長い同村田畑の他村との入り込みを色分けで示し、小松原村の田畑は黄土色、東隣小島村の田畑が紫色、西隣寺沢村の田畑がオレンジ色、その西、西七根村の田畑が白色で示されている。（絵図から地図へ―移り変わる豊橋の風景―（小松原村絵図））
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による神社の影響	【東漸寺】（宝永地震・津波） ・創立当初の所在地は現在地の南方海辺であったが、宝永4年（1707）の大海嘯の後今の地に移した。（豊橋寺院誌）
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による史跡	【東漸寺の行者塔】 寺沢町の東漸寺本堂から、墓地におりる坂道の入り口に、苔むした行者塔が1基ある。今から380年ほど前、慶長年間にまでさかのぼる。北陸地方の某藩の武士が1人、父の仇をさがし求めて全国を歩き回るうちに、いつしか路銀も使い果たしてしまい、流浪の果てに寺沢の東漸寺の仏門をたたいた。ある日、ほん然として悟った彼は、長い復しゅうの夢から覚め、仇打ちをやめて懐かしい故郷へと思ってはみたものの、今さら仇を討たずに帰藩もできず、思いあまった末に仏縁を得た三河の東漸寺に杖を運び、頭をまるめて仏門に入り安嶺禅師の弟子となった。本堂西の行者塔は、彼が後年この寺の住職になったときに西国33か所の苦しい思い出に加え、彼と同じ諸々の恨み悩みをもつ悲しい遍路たちの幸せを願い、海岸の墓地に建てたものだという。宝永4年（1707）の大津波のときも、この塔だけは不思議にも残って現在に至っている。（校区のあゆみ　小沢）

（３）－２　小松原

小松原では、宝永 4(1707).10.4 の地震による津波で東観音寺と小松原進雄社が被害を受けたと記録されている。江戸時代の小松原村は一村一円東観音寺領であり、東観音寺は鎌倉から室町時代にかけて大いに栄え、江戸時代に入っても徳川氏の庇護をうけた名刹であった。東観音寺は元来海岸近くに立っていたが、宝永 4 年(1707)の大地震に伴う津波で大きな被害を受け、正徳 3 年(1713) に至って海岸より離れた 18 町（約 1.9km）北側の現在地へ移転している。その跡地が小松原の海岸の雑木林の中にあり、「開山行基菩薩」と刻まれた石碑が建っている。また、小松原進雄社は、海辺の柄沢平に奉祀してあったが、宝永 4(1707).10.4 の大津波によって現在地に移転したといわれている。

江戸時代初期の「東観音寺古境内図」では、東観音寺があった付近の海岸には伊勢街道が通り、町屋が立ち並び人が往来する様子が示されており、小丘上にあった東観音寺が被害を受けていることから、海岸付近には相応の被害があったと思われる。江戸時代前期の「小松原村絵図」をみると、太平洋の海岸沿いに集落が多く集まり、原野の中の谷筋を中心として耕地が点在し、また海岸の浜辺にも小松原村、小島村、寺沢村、西七根村の田畑の入り込みの様子が示されており、海岸沿いに田畑を所有していたことがうかがわれる。

表２―１―１８　小松原の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による神社の影響	【東観音寺】（宝永地震・津波） ・宝永4年（1707）には大津波をうけて現在地の南方一八町の旧地より現在地に移転。（東観音寺歴史資料目録） 【小松原進雄社】（宝永地震・津波） ・もと海辺の柄沢平に奉祀してあったが、宝永四年（一七〇七）の大津波によって現在地に移転したという。（豊橋市史　第一巻）
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による史跡	【小松原村絵図】 ・江戸時代の小松原村は、一村一円東観音寺領であった。東観音寺は行基菩薩の開眼と伝えられ、鎌倉から室町時代にかけて大いに栄え、江戸時代に入っても徳川氏の庇護をうけた名刹である。この東観音寺は元来海岸近くに立っていたが、宝永4年(1707)の大地震に伴う津波で大きな被害を受け、正徳3年(1713)に至って海岸より離れた現在地へ移転したもので、左の図は東観音寺が海岸近くに位置していることから江戸時代前期のものと考えられる。図は1町を1寸（約3600分の1）に縮尺した実測図で、南北に細長い同村田畑の他村との入り込みを色分けで示し、小松原村の田畑は黄土色、東隣小島村の田畑が紫色、西隣寺沢村の田畑がオレンジ色、その西、西七根村の田畑が白色で示されている。集落は家の形で表し、太平洋の海岸沿いに多く集まっている。また道は朱線で表し、吉田・大岩・二川などの行き先を記している。この図を見ても荒れた原野の中の谷筋を中心として耕地が点在していることがわかる。これに対して上記の図は、非常に概略的ではあるが、東観音寺が内陸部に位置することから江戸時代中期以降の小松原村の絵図である。この図には東観音寺のほかに集落を表す家の形が内陸部に多く描かれており、図下部の浜沿いに本屋敷の表記があることからも、津波の被害によって多くの集落が内陸部に移ったことがわかる。（絵図から地図へ―移り変わる豊橋の風景―（小松原村絵図）） 【東観音寺古境内図】 ・所掲図は宝永四年の大海嘯以前、寛文頃（一六六一～七三）の境内図で、立派な堂塔伽藍、多くの参詣者、山下の海辺に並ぶ民家、往来の人々の様子が精密に写実的に描かれており、東観音寺の旧態をうかがう好資料であるとともに、近世前期の地方風俗画としても貴重である。（豊橋市史　第二巻） ・江戸時代初期の「小松原観音寺古境内図」を見ると、下方に荒々しい波の打ち寄せる太平洋と漁船や帆船が描かれている。地引き網を引く漁師の姿も見られる。波打ち際に伊勢街道が通り、暖簾を下げた町屋の前を、多くの旅人や馬に乗った武士などが往来している。伊勢街道から参道が丘陵に向かって分かれていて、開折谷を流れる川に架かった橋を渡り、坂道を上がりながら、境内へと入る。丘陵の奥に檜皮葺の観音堂や阿弥陀堂、多宝塔が建てられている。境内のすぐ下は険しい崖になっていて、田畑を耕す百姓も描かれている。江戸時代初めには、海岸付近の小丘上にあった小松原の東観音寺も、宝永地震と大津波により伽藍の大部分が破損した。7年後に18町（約1.9km）北側の現在地に移転している。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）） 【開山行基菩薩】 ・小松原の海岸へ下りる途中、畑の一角に雑木林が残されている。中に踏み入ると「開山行基菩薩」と刻まれた石碑が建っている。 ここは以前、東観音寺があったところである。宝永4年（1707）渥美半島一帯に被害をもたらした大地震により、部落が移動した。これを機に東観音寺も宝永5年（1708）から享保元年（1716）にかけて現在地に移転した。（校区のあゆみ　小沢）

（３）－３　小島

小島では、宝永 4(1707).10.4 の地震による津波で大応寺、小島神社（津波による被害かは不明であるが、当時海岸に立地していた）が被害を受けており、両方ともこの地震・津波を契機に移転したと記録されている。

なお、豊橋市の集落は江戸時代初期、海食崖の下にあったとされている。江戸時代初期の「小松原村絵図」をみると、小松原村の海岸の浜辺に小島村の田畑が示されていることから、当時、小島村でも海岸沿いに田畑を所有していたことが推測される。

表２―１―１９　小島の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28以前	宝永4.10.4以前	津波による史跡	【小松原村絵図（江戸時代前期）】 ・東観音寺が海岸近くに位置していることから江戸時代前期のものと考えられる。図は1町を1寸（約3600分の1）に縮尺した実測図で、南北に細長い同村田畑の他村との入り込みを色分けで示し、小松原村の田畑は黄土色、東隣小島村の田畑が紫色、西隣寺沢村の田畑がオレンジ色、その西、西七根村の田畑が白色で示されている。（絵図から地図へ―移り変わる豊橋の風景―（小松原村絵図））
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による神社の影響	【大応寺】（宝永地震・津波） ・明暦2年（1656）住持玄釣首座の時殿宇を建造したが、宝永4年（1707）大海嘯の難に遭って衰退したのを、住持光厳祖錐首座（寛延3年5月13日寂）が現在の地に移転し、同6年8月庫裡一棟を新築した。（豊橋寺院誌） 【小島神社】（宝永地震（津波不明）） ・西小島の海岸にあったが、宝永年間の地震のため北方に移された。（校区のあゆみ　小沢）

（３）－４　細谷

細谷では、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波被害が記録されている。

宝永 4(1707).10.4 は高さ 6m の大津波が表浜一帯を襲い、細谷では村々の船や漁具が残らず流失し、山は崩れて谷は埋り、多くの住民、馬が亡くなったとの記録がある。当時の細谷の集落は海岸崖下にあり、現在の海岸より 200m 沖合に散在していたが、宝永 4(1707).10.4 の津波で大半が流失、移転したため、新たに遠州との境界として、道路脇の丘に松を植え、お堂を建てたとされている。また、細谷に立地していた真月寺、幸福寺が宝永 4(1707).10.4 の地震で津波を受けて、移転し、特に幸福寺は部落と共に移転したことが記録されている。

嘉永 7(1854).11.4-5 では、津波にて網船が流失したことが記録されており、宝永 4(1707).10.4 の地震のように集落に被害がでた記録はない。

表２―１―２０　細谷の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	船・漁具流失	・高さ6mもの大津波が表浜一帯を襲い、海食崖下の集落は大半が流出してしまった。（渥美町郷土資料館　研究紀要第2号（加藤克己）） ・細谷村：大津波あり、村々網、船、その他漁具残らず流失、山は崩れ、谷は埋まりて、人馬多く死す。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）（宝永4年の細谷村の記録）） ・細谷村：宝永地震の大津波やその後の高潮によって、海食崖下にあった細谷一帯の田畑が流出していることが記されている。「去年の地震なおやまず、高潮にて、田、畑多く破壊す。」（田原市博物館研究紀要第3号（藤城信幸）（宝永5年の細谷村の記録））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	船・漁具流失	・夫より直様浜へ参り見申候所、東方より津浪にて網船諸々にて流し。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治）（細江村記録））
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による神社の影響	【真月寺】（宝永地震・津波） ・創立後330年を経て宝永4年（1707）大海嘯の難に遭い、享保2年（1717）紹禅恵隆和尚の代、現在地に移転再興した。（豊橋寺院誌） 【幸福寺】（宝永地震・津波） ・宝永4年（1707）の大地震ならびに津波のため部落が壊滅した頃上細谷村から地原へ分村してきた人々と共に幸福寺も移って来た。（校区のあゆみ　細谷）
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による集落移転	【細谷の集落移転の特徴】 ・宝永4（1707）年10月、巨大地震が発生。当地は大津波に襲われた。現在の海岸線より200メートル沖合いに散在していた村は移転、新たに遠州との境界とした道路脇の丘に松を植え、お堂を建てた。（校区のあゆみ　細谷）

２―２　豊川市

２―２―１　地震による津波被害

（１）全体の概要

豊川市では宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5、平成 22(2010).2.27（津波は 28 日）の地震で津波が記録されており、特に宝永 4(1707).10.4 の津波では大草、泙野、下佐脇で塩田の被害が、嘉永 7(1854).11.4-5 の津波では御馬、御油・赤坂（不明な点が多い）で被害が報告されている。

表２―２―１　豊川市の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容	被災地等
1707.10.28	宝永4.10.4	塩田被害	・大草、泙野、下佐脇にて塩田の被害あり。（蒲郡市史　本文編2　近世編）、（御津町史　本文編）（村差出帳）	大草、泙野、下佐脇
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波被害	・御馬にて津波の被害あり。（御津町史　史料編　下巻） ・御油、赤坂にて津波被害の報告あり。（東海地方地震・津波災害誌）、（愛知県災害誌）	御馬、御油、赤坂
2010.2.28	平成22.2.28	住民避難	・午前9時45分に災害対策本部を設置。（東日新聞（2010.3.1）） ・同11時30分に伊奈町・平井町、御津町で防災無線を使って津波到達見込み時刻などを伝えて注意を呼びかけた。（東日新聞（2010.3.1）） ・午後1時からは市と消防本部、消防団が御津海岸と豊川放水路河口部で車両巡視と広報活動。両地区合わせて19ヵ所の防潮扉を閉め、ひ門をさげた。（東日新聞（2010.3.1）） ・臨海埋め立て地の立地企業には、操業中の6社に注意を促した。（東日新聞（2010.3.1））	御津、小坂井
	明応元以前～天文年間	伝承（神社移転、流失）	・東漸寺、平井八幡社において、大海嘯（大洪水）による流失被害あり。（小坂井町誌）、（前芝村誌）	小坂井
1945.1.13	昭和20.1.13	住民証言	・御馬港にて津波の目撃の証言あり。（御馬地区住民より聞き取り）	御馬
1960.5.24	昭和35.5.24	住民証言	・御馬港にて津波の目撃の証言あり。（御馬地区住民より聞き取り）	御馬

（２）大草・泙野

大草・泙野では、宝永 4(1707).10.4 の地震で津波が記録されており、両地域とも塩田に大損害を受けたほか、大草では堤防が 8.5km も破損し、損害も大きかったとの記録がある。

泙野村では、元禄 5 年(1692)の塩浜で年貢 5 石 5 斗余と記録されているなど、村人は農業に従事していたが、農閑期には製塩に従事していた（御津町史）。また大草村は貞享 4 年(1687)の年貢免状に「塩拾石弐斗六升浜役」とあり、元禄時代ごろでは、西方村よりも塩田反別は多かったと推測されている（蒲郡市史）。このように地域住民の生活を支えていた塩田が津波で大きな被害を受けたことが推測される。

表２―２―２　大草・泙野の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	塩田被害	・（大草）塩田が大損害を受けた。（蒲郡市史　本文編2　近世編） ・（大草）太郎左工門代官所管下堤防破損8.5km、被害大。（東海地方地震・津波災害誌） ・（泙野）塩田が大損害を受けた。（蒲郡市史　本文編2　近世編）

（３）御馬

御馬では、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が記録されている。「激波ノ為二五百俵計海面へ引出サル」と報告されている。御馬湊は寛永 12 年(1635)、時の代官によって、御城米江戸回航基地の一つとなり、遠く稲橋、新城方面の年貢米が集積されている（御津町史）ことから、この津波被害は御馬港での被害と思われる。

また御馬地区の住民から、昭和 20(1945).1.13、昭和 35(1960).5.23（津波は 24 日）の地震の津波が報告されており、昭和 20(1945).1.13 の津波は通常の高潮より 50cm くらい高いところに海面が来ており、昭和 35(1960).5.24 の津波は満潮時の水位まで海面があがり、一日に何度か満ち引きがあったという証言を得ている。

表２―２―３　御馬の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	流出被害	・大地震津波、潰家怪我人等在、御廻米御検査日ニテ御米野拼ノ処、激波ノ為ニ五百俵計海面へ引出サル。（御津町史　史料編　下巻）
1945.1.13	昭和20.1.13	住民証言	・1945年1月13日は当時17歳の高校生で、御馬村に在住。地震発生時は寝ていて、激震で目が覚めて、驚いて表にでると、南の渥美半島の方に青い火花が数回見え、ドンドンという音があったような感じがあった。なにかあると浜にいく習慣があり、その後御馬の港にいくと、すでに5～6人きおており、潮が高くなっているとみんなで騒いでいた。今思うと、普通の高潮より50cmくらい高いところに海面があったと思う。その後、寒くて家港を後にし家に戻ったため、海のことはわからないが津波による被害はなかったと思う。余震が強かったので怖くて家に入れず、1ヶ月くらいのりほしのたこ5枚で、四方の壁と屋根にして地震小屋を建てて、外で寝た。また、戦争中なのでよその地区の状況はわからないが、後で形原の方の断層があったのを知って驚いた。（御馬地区住民より聞き取り）
1960.5.24	昭和35.5.24	住民証言	・1960年のチリ地震のときは、御津町役場に勤務しており、御馬港をみにいった。御馬の港では、大潮（満潮）の時は防波堤のあるところまでくることもあるが、チリ地震でもその満潮時のところ（防波堤の地面まで）まで水位があがってびっくりした。地震によるものか満潮によるものかはわからないが、潮が増したことはまちがいなく、また引きも何度かあり、一日に何度か満ち引きがあった。港に特に被害はなかった。（御馬地区住民より聞き取り）

（４）下佐脇

下佐脇では、宝永 4(1707).10.4 の地震で津波が発生しており、塩田は全滅し、水田、畑も被害があったと記録されている。

江戸時代の下佐脇は、村民のほとんどは農業に従事したが、海によりアサリなどを採取し、安政 5 年(1858)ごろからはノリの採取が行われた。製塩は運上を免ぜられる程度であったと言われている（御津町史）が、そうした塩田や田畑が津波で大きな被害を受けたことがうかがわれる。

表２―２―４　下佐脇の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	塩田被害	・塩田が全滅。（蒲郡市史　本文編2　近世編） ・かつては塩浜も存在していたが、宝永の地震のために消滅し、またこの時には水田二六〇石、畑三〇石が被害にあっている。（御津町史　本文編）（村差出帳）

（５）御油・赤坂

御油・赤坂では、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が 4～5m発生し、死傷者や家屋流失などの多大な被害があったと記録されている。ただし、御油・赤坂での津波は音羽川に沿って遡上したものと思われるが、距離や標高からこのような津波の波高は困難と記されている。また、別の文献では、御油・赤坂ともに嘉永 7(1854).11.4-5 の地震では被害が軽かったとの報告もある。

表２―２―５　御油・赤坂の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	死傷者、家屋流出（不明な点あり）	・（御油）津波の高さは4-5m。津波で過半流れ、また死人怪我人も多かった（以上大日本地震史料）。音羽川上流約8kmの位置にあり、このような大波が遡上したとは考えにくい。（東海地方地震・津波災害誌） ・被害は軽かった。（愛知県災害誌）
		死傷者、家屋流出（不明な点あり）	・（赤坂）津波の状況では高さは5mくらい。津波で7分通り流され、死人怪我人も多かった。赤坂は陸地であるので、津波が上ったとすれば、音羽川に沿って入ったものと考えられる。しかし音羽川上流約10kmの位置に現在あり、レベルもやや高いので、このような津波の波高は困難。（東海地方地震・津波災害誌） ・被害は軽かった（愛知県災害誌）

（６）小坂井（伊奈）

小坂井（伊奈）では、東漸寺と平井八幡社において、天文年間における津波にまつわる言い伝えがある。（なお、地震による津波かは不明）

東漸寺は、もともと前芝村に本尊のみが祀られていたが、津波のために伊奈の地に漂着したので村人が祀られていた地蔵尊を本尊として堂宇を建てて、明応元年(1492)に東漸寺とした。（なお、天文 9 年（1540）の大海嘯のため流され、今の地に移されたとの文献もある。）

平井八幡社は、天文年間の初期（1532 頃）の大洪水によって社殿を流失し、豊橋市賀茂の照山の麓に流れ着いたとの言い伝えがある。

表２―２―６　小坂井（伊奈）の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1492以前	明応元以前（地震によるものかは不明）	神社移転（伝承）	【東漸寺】 ・知多郡緒川の乾坤院亨隠和尚は、伊奈城主本多隼人佐泰次に迎えられて、城中に一席の法話を試みた。それより先、前芝村に東漸寺があったが、廃絶し小堂に本尊のみが祀られていた。ところが津波のために伊奈の地に漂着したので、村人が祀っていた地蔵尊を本尊として、本多泰次が堂宇を建てて本多家累代の香華寺として斉田を寄付し亨隠禅師を開基として、万年山東漸寺としたのが、明応元年（1492）の事であった。（小坂井町誌） （※前芝村誌では、「天文9年（1540）に大海嘯があり此の地方は社寺人家がことごとく流失という大被害があった。即ち現在の伊奈東漸寺は前島（前芝）にあったが、この大海嘯のため流され、そのため今の地に移された」とある。）
	天文年間（地震によるものかは不明）	神社流失（伝承）	【平井八幡社】 ・最初は社供神がお祀りしてあったが、天文年間の初期（1532頃）の大洪水によって社殿を流失してしまった（賀茂の照山の麓に流れ着いたと伝えられている）。しかし、社供神の御神体は重く、流失をまぬがれたので、天文21年（1552）の新築に当たって菟足大明神の分身を勧請し、社供神と併せ祀ったのが、この棟札に記されたのだろう。（小坂井町誌）

２―２―２　地震以外の津波[1]（高潮・洪水）被害

豊川市における地震による津波以外の高潮（洪水（大風も含む））の記録は合計 13 回である。豊川市を襲った地震による津波は少ないが、大風等による高潮（洪水）は多く発生している。

特に被害の大きい災害は 7 回であり、①寛永 13 年(1636)の高潮（洪水）は、人馬の死亡 80 有余、助かった家は僅かに 20 戸の被害、②正徳元(1711).8.23 の高潮（洪水）は、高さ 4 尺余で死者 4 人、潰家 142 戸の被害、③享保 3(1718)の高潮（洪水）は、2 名が波にさらわれ船も多く破損、④天保 7(1836)の高潮（洪水）は、沿岸や音羽川沿いの堤防が 16 か所も決壊し水田が浸水、⑤明治 22(1889)の高潮（洪水）は、大草で 12 名死亡、御馬で 11 名死亡し流失家屋 24、倒壊 39 の被害、⑥昭和 28(1953).9.25 の 13 号台風での高潮（洪水）は、海岸護岸が決壊大破し海水浸入、家屋流失、漁船流失の被害、⑦昭和 34(1959).9.28 の伊勢湾台風での高潮（洪水）は、護岸を越え、防潮扉を始め河川堤防からの大規模な海水流入の被害、と報告されている。

これらの高潮（洪水）により、浄願寺は寛永 13 年(1636)の高潮（洪水）被害をうけ現在地に移転したとの記録がある。また、大草村では明治 22(1889)の高潮（洪水）を後世に伝えるために「水死者追弔碑」を、愛知県では昭和 28(1953).9.25 の高潮（洪水）を伝えるために御津町に「海岸復興記念碑」を建てている。

[1] 地震と確定できない津波は、高潮（洪水）と表記した。

さらに、住民ヒアリングでは、昭和 34(1959).9.28 の伊勢湾台風で、大潮が音羽川を遡上し、内陸の御津南部小学校の南側まで潮が浸入（図１－３－３参照）し、御馬の住宅は床上 40cm 位まで浸水したと証言している。また、御馬港では堤防の上限まで潮がきて、御馬港の漁船は陸地にまで流れたと証言している。

表２―２―７　地震による津波以外の高潮（洪水）被害記録

項目	西暦	旧暦	御津町
①津波の被害状況	1636	寛永13	・（御馬村）大海嘯平潮ヨリ高サ壱丈余人馬ノ死亡八拾有余。（御津町史本文編） ・（御馬村）嘉永13年の津波は「前代未聞」といわれ、人馬の死亡八十有余、助かった家は僅かに20戸だけであったといわれている。（御津町史本文編(御馬村の記録)）
	1660	万治3	・（御馬村）小海嘯屋敷ヨリ三尺。（御津町史本文編） ・（御馬村）津波が起こったことが記されている。（御津町史本文編(御馬村の記録)）
	1680	延宝8	・（御馬村）津波が起こったことが記されている。（御津町史本文編(御馬村の記録)）
		延宝8.8.6	・（御馬村）中海嘯屋敷ヨリ四尺。（御津町史本文編）
	1711	正徳元.8.23	・（御馬村）暴風激浪屋敷ヨリ高サ四尺余潰家壱百四拾弐戸此時全村弐百戸二不適半潰吹荒シ全村悉皆死人四名。（御津町史本文編）
	1718	享保3	・（御馬村）津波で堤防が決壊。その時の津浪では、舟も多く破損し、百姓1人、舟方1人が浪にさらわれている。（御津町史本文編(御馬村の記録)） ・（御馬村）津波で再び堤防大破し、この時も公儀普請は認められず自普請による築堤となり、領主へ援助を求めている。（御津町史史料編上巻(御馬区有文書)）
		享保3.9.13	・（御馬村）波高サ三尺。（御津町史本文編）
	1808	文化5.7.24	・（御馬村）暴風高潮。（御津町史本文編）
	1811	文化8.8.5、同8.8.14	・（御馬村）大風津浪両度二及ブ。（御津町史本文編）
	1836	天保7	・（御馬村）御馬村では暴風雨に加えて津波が襲来し、「稀代の大変、言語に述べ難く心配当惑つかまつり候」とあり、沿岸や音羽川沿いの堤防が16か所も決壊し、水田には潮が流れ込む。（御津町史本文編(御馬村の記録)）
		天保7.8	・（御馬村）波怒激シ高潮三尺。（御津町史本文編）
	1837	天保8.8.5、同8.8.14	・（御馬村）暴風津波両度二及ベリ始メ三尺余終六尺余海嘯特二烈敷臥褥中枕ノ顛揚スルカ如ク対へ当時ノ人々斯ノ如キ海鳴ニハ相始メテ遭遇セリト云フ。（御津町史本文編）
	1854	明治8.8.9、同8.9.10、同8.10.1	・（御馬村）明治八年八月九日大風雨出水破堤流橋架換同年九月十日風雨大水流橋十月一又々大水流橋三度二及ブ。（御津町史本文編）
	1889	明治22	・（御馬村）明治二二年海嘯（津波）の際は、山口又六一家をはじめ、多くの世帯の高潮との悲惨な闘いや被害状況、救助対策等が述べられている。（御津町史本文編） ・（大草村）大草には明治二二台風による一四名の戒名を刻した「水死者追弔碑」が建てられ、当時の惨状を物語っている。（御津町史本文編）
		明治22.9.11	・（御馬村）明治22年9月11日海嘯ノ天変・・・略・・・御馬村全村戸数　百八拾七戸、内流失家屋　弐拾四戸、倒家三拾九戸、半流　拾七戸、死亡男女拾壱人。（注：七丁目表右より六行目には拾弐人とある。）（御津町史資料　第十九集）
	1953.9.25	昭和28.9.25	・（御津町）たまたま満潮時のため高潮となって海岸線に沿う延長二千八〇五メートルの護岸が決壊大破し、海水（高潮）が浸入し、家屋は流失、破壊され、実に惨憺たる情景を呈する被害を被った。防風林として育っていた松の巨木も、瞬時にして根こそぎとなったものが多く、低地では軒に迫るほどの高潮となり、御馬港にあった漁船はことごとく押し流され、その多くは下佐脇寄りの堤防へ打揚げられる有様であった。（御津町史本文編）
	1959.9.26	昭和34.9.26	・（御津町）十三号台風の際の教訓としては、海岸堤防の構築が最も急務とされ、そのほとんどが整備されていたので、今後のは絶対に安心だと思われていたのにもかかわらず、台風の威力は予想外の強さで、高潮はこの護岸を軽く乗り越えて来襲した。また、防潮扉をはじめ、河川堤防の未改良箇所からの大規模な海水流入によって、町内の海岸部一帯は十三号台風の惨状を再現してしまった。（御津町史本文編）
②津波による神社の移転	1636	寛永13	・（御馬村）【浄願寺】元来この寺は御馬城址の西南、旧字須賀にあり。津波に襲われ、翌年現在地に移転再建。（みと歴史散歩）
③津波による史跡	1953.9.25	昭和28.9.25	・（御津町）愛知県が昭和三二年一〇月に建てた。【海岸復興記念碑】 碑文（抽出）・・・昭和二十八年九月二十五日夕刻秋分大潮の満潮時に知多半島から三河湾を北東に向かって来襲した台風十三号は県下全域に至って甚大な被害を齎しその総額六百七十五億円に達したが特に海岸の被害は激甚を極め被災延長百五十六粁復興所用額百五十億円に達した。（みと歴史散歩）
④津波による証言	1953.9.25	昭和28.9.25	・（御津町）伊勢湾台風のときは、大潮が音羽川をさかのぼり、内陸の御津南部小学校の南側まで潮がきた。また御馬港の堤防では上すれすれまで潮がきて危なかった。御馬港の漁船は陸地にまで流され、再度港に戻すときは音羽川までもっていって川を伝って港に戻した。 ・御馬の集落では、伊勢湾台風では床上30-40cmまで潮がきた。（御馬地区住民からのヒアリング）

２―３　蒲郡市

２―３―１　地震による津波被害

（１）全体の概要

蒲郡市における地震による津波が記録されているのは 9 回である。そのうち津波の被害が記録されているのは、明応 7(1498).8.25、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 の 3 回の地震である。

地区別では、西浦、形原、塩津など蒲郡市西側の地域で津波による被害が多く、特に塩津や西浦では建物の流失が記録されている。

表２―３―１　蒲郡市の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等内容	蒲郡市内	被災地等
1498.9.20	明応7.8.25	津波、神社流出	・塩津にて高さ4m　白山神社流される。（東海地方地震･津波災害誌）	塩津
1707.10.28	宝永4.10.4	塩田被害	・塩津にて塩田の被害あり。（蒲郡市史　本文編2　近世編）、（塩津村誌）	塩津、大塚
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	家屋浸水、田畑被害	・西浦にて津波の高さ2mの記録あり。（東海地方地震･津波災害誌） ・蒲郡市内においては、人的な被害は少なかったようであるが、一部家屋や田畑に被害を及ぼした。（形原役所記録）（総務省消防庁ホームページ（防災課　全国災害伝承情報（平成17年3月）） ・津波二而流レ其数未篤と不知不分。（王稔記）	西浦、形原、塩津
1855	安政2	高潮被害	大塚にて高潮による被害あり。（蒲郡市史　本文編2　近世編）	大塚
1891.10.28	明治24.10.28	津波被害の報告あり	・三谷にて津波被害の報告あり。（海嘯汐入免租下戻簿　旧三谷町行政文書）	三谷
1944.12.7	昭和19.12.7	被害少ない	・西浦・形原にて波の高さ0.5mの記録あり。（東海地方地震･津波災害誌） ・三谷町から蒲郡町にかけてほとんど被害はない。（愛知県災害誌）	西浦、形原
1945.1.13	昭和20.1.13	被害少ない	・蒲郡町で1mの津波の記録あり。（東海地方地震･津波災害誌） ・人や建物に被害をおよぼすような津波は起きていない。（三河地震Q＆A）	西浦、形原（下市）、塩津、蒲郡町
1946.12.21	昭和21.12.21	津波現象	・形原にて2mを超す潮位ありとの記録あり。（伊古部郷土誌） ・形原にて津波の現象あり。（愛知県災害誌）、（伊古部郷土誌）	形原
1960.5.24	昭和35.5.24	津波現象	・形原にて波高1.12mの記録あり。（東海地方地震･津波災害誌） ・蒲郡など潮位が約一メートル。（中部日本新聞(1960.5.24)(夕刊)）	形原
2010.2.28	平成22.2.28	住民避難	・形原にて潮位が約10cm上昇との記録あり。（東日新聞（2010.3.1）） ・竹島水族館、生命の海科学館、市民会館、市博物館が臨時休館。（東愛知新聞（2010.3.1）） ・蒲郡市で避難勧告は2723世帯、避難したのは12世帯15人。（東日新聞（2010.3.1））	形原、三谷
2011.3.11	平成23.3.11	住民避難	・避難勧告は2723戸、8198人。午後6時半現在、6世帯13人が避難した。（東愛知新聞（2011.3.12））	

（２）西浦

西浦では、嘉永 7(1854).11.4-5、昭和 19(1944).12.7、昭和 20(1945).1.13 の 3 回の地震で津波が記録されている。

特に嘉永 7(1854).11.4-5 において、高さ 2mの津波が松島を波が打ち越して、5 人の家に海水が入り、住民は屋外にて小屋を建てて寝たとの記録がある。なお、松島では大部分の松の木と地蔵菩薩が流失し、その後大光院に移され、現在祀られているとの言い伝えが残っている。

昭和 19(1944).12.7 では波高 0.5mの津波が、昭和 20(1945).1.13 では最大全振巾 50cm の津波が観測されているが被害の報告はない。ただし、昭和 20(1945).1.13 の津波では、波が引く様子が目撃され、住民が急いで高台に避難した記録が残されている。

表２―３―２　西浦の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波状況	・津波の高さ2m。（東海地方地震･津波災害誌）
		住民行動	・津波の被害をうけ、住民は屋外に小屋をたてて寝た。（蒲郡市誌）（御獄神社日誌）
		家屋浸水	・橋田沖にある松島を波が打ち越し、5人の家に海水が入った。（新収日本地震史料　続補遺別巻（東京大学地震研究所））（形原役所記録）
1944.12.7	昭和19.12.7	津波状況	・波の高さ0.5m。（東海地方地震･津波災害誌） ・小津波、引き潮で始まった。（東海地方地震･津波災害誌）
1945.1.13	昭和20.1.13	津波状況	・1m海面が下がる。（東海地方地震･津波災害誌） ・最大全振巾50cm。（東海地方地震･津波災害誌） ・隆起1.3m。（蒲郡市誌）（地震研究彙報24号（東大）　深溝断層　津屋弘逵）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	彫像流出	・松島地蔵菩薩の由来と現在 一説には安政元年の大地震による大津波で付近一帯は大きな水害を受けました。当時、松島には多くの松の木が繁茂していましたが、それらの松の木の大部分は地蔵菩薩ともども流失されたと聞いております。その後、流失した地蔵菩薩は改めて新しく建立され、安政4年大光院創立と同時に、大光院の縁の下に安置され、現在に至っております。一方、流出された松島地蔵菩薩は数々の霊験が物語られ、橋田地区の人々に厚く信仰されていました。その後、漁師が漁をしていたときに、胴体がバラバラでしたが地曳き網や打瀬網に全部拾われ、縁の元である大光院に移し、現在大光院入口石段の下段の場所に鎮座されております。（西浦町の昔と今）
1945.1.13	昭和20.1.13	住民証言	・外へ出たら、家の前の海の水がものすごい勢いで沖のほうへ引いていくのが見えた。それを見て、集落のおばあちゃんたちが口を揃えて「津波が来るから上がらなきゃ」と言った。そこで周囲の家4～5軒みんなで高台にあるお稲荷さんの方へ急いで避難した。（歴史地震研究会ホームページ（歴史地震・第22号）

（３）形原

形原では、嘉永 7(1854).11.4-5、昭和 19(1944).12.7、昭和 20(1945).1.13、昭和 21(1946).12.21、昭和 35(1960).5.23（津波は 24 日）、平成 22(2010).2.27（津波は 28 日）の 6 回の地震で津波が記録されているが、大きな津波の被害は記録されていない。

しかしながら、形原の下市地区は昭和 20(1945).1.13 の地震で津波が来て家屋に浸水したとの住民証言の記録がある。昭和 20(1945).1.13 の地震では、断層が河原・下市を境に南西と北東に分かれ、西南側の旧形原漁港で 1.5m 隆起し、東北側の下市で 0.7m 沈下した。そのため沈下した下市地区で、海水が浸水したものと思われる。（なお、下市での沈下は蒲郡市府相の海岸辺まで及んでいることから、塩津や蒲郡の海岸にも影響していると思われる。）

表２―３―３　形原の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波現象、被害なし	・津波ニテ家ヲ引キ出サルル所モアリ、当地ハマダマダサハリ少シ。（塩津村誌）（御獄神社日誌） ・大きな津波の被害といったものはなく。（蒲郡市史　本文編2　近代編）（形原役所記録） ・津波に備えて立ち退く用意はしたものの、波はおいおい穏やかになり、けが人もなかった。（新収日本地震史料　続補遺別巻（東京大学地震研究所））（形原役所記録）
1944.12.7	昭和19.12.7	津波等状況	・波の高さ0.5m。（東海地方地震･津波災害誌）
1945.1.13	昭和20.1.13	津波等状況	・水の変化がみられたところとみられないところがあった。（東海地方地震･津波災害誌） ・形原漁港では1.5mの隆起。（蒲郡市誌）（験震時報14号　昭和20年1月13日　三河地震について　井上宇胤）
1946.12.21	昭和21.12.21	津波等状況	・押し波で始まり最大振幅15cm。（愛知県災害誌） ・二メートルを超す潮位。（伊古部郷土誌）
1960.5.24	昭和35.5.24	津波等状況	・津波の振幅23-86cm。（愛知県災害誌）
2010.2.28	平成22.2.28	津波等状況	・潮位が約10cm上昇。（東日新聞（2010.3.1））
1945.1.13	昭和20.1.13	住民証言	・前日は津波もない。当日は津波はなかった。（三河地震Q＆A）

表２―３―４　形原（下市）の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1945.1.13	昭和20.1.13	津波等状況	・形原町音羽の東から江川下市辻新田方面0.7mの沈下を見る。それは蒲郡市府相の海岸辺に及んでいる。（形原震災記録）
1945.1.13	昭和20.1.13	住民証言	・下市に津波が来た。（三河地震Q＆A）
		住民証言	・家の前の、林光寺の坂は、平らな道が坂になった。私の家の前が、海だった。・・・形原町の被害は大きく、死者は211名　私の家の周りは、ほとんど海で、地震と津波で、海が沈んでいった。実際に、知っている人は、もうほとんどいません。（三河地震Q＆A）

（４）塩津

塩津では、明応 7(1498).8.25、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5、昭和 20(1945).1.13 の 4 回の地震で津波とその被害が記録されている。

明応 7(1498).8.25 では 4m の津波があり竹谷町の白山神社が流され、凡そ百年後に北方の山の現所に移転している。宝永 4(1707).10.4 では鹿島の塩田で約 6 石（約 3 割）が潰れ、竹谷の塩田も潮が入り潰れている。

嘉永 7(1854).11.4 では、竹谷地先の太田新田も堤防が決壊し、犬飼港の陸続き堤防が流され、また拾石陣屋（逸見陣屋）跡地（天保 8 年(1837)の大水害で崩壊）では津波で残っていた石も流され跡形もなくなっている。

昭和 20(1945).1.13 では、津波が 60cm 発生し、また昭和 19 年(1944)の地震で沈下した堤防（1.5m）の一部が決壊した要因も重なり、塩田に海水が浸水していると記録されている（なお、昭和 20 年の地震でさらに地盤沈下した影響もあると思われる）。

当地域は、江戸時代、蒲郡市でも塩田開発、新田開発が活発に行われた地域であるが、津波やその他自然災害の被害で苦労して作られた地域でもある。塩田では、竹谷村の塩田はおそくとも 16 世紀後半に成立しており、鹿島村の塩田も寛永 4 年(1627)に存在していた（蒲郡市誌）とされているが、両塩田とも宝永 4(1707)年の津波で被害を受けている。また蒲郡市の中で大規模新田開発と位置づけられる太田新田は、弘化 4 年(1847)に完成し、嘉永 4 年(1851)には本格的な耕作を開始しているが、嘉永 7 年(1854)の津波だけでなく、安政 2 年(1855)・5 年(1858)・7 年(1860)と立て続けに堤防が切れて被害がでている（蒲郡市史）。

表２―３―５　塩津の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1498.9.20	明応7.8.25	津波現象	・高さ4mと推定。（東海地方地震･津波災害誌）
1707.10.28	宝永4.10.4	塩田被害	・（鹿島）諸引き高（約二〇石）のうち約六石が塩浜潰地。（蒲郡市史　本文編2　近世編） ・（竹谷）塩田は被害を受け「松平左門様御代ヨリ汐入段々潰地引ニ罷成候」のように18世紀初期には減少している。（塩津村誌）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	塩田被害	・（竹谷）竹谷村地先の太田新田も堤防が決壊し、犬飼港の陸続き堤防が流されたと伝えられている。（塩津村誌）
1945.1.13	昭和20.1.13	津波現象	・津波の高さは約60cm。（愛知県災害誌）
		塩田被害	・塩田の周囲の高さ1.5mの堤防の一部が東南海地震（1944.12.7）で1m沈下したが、そこがさらに三河地震(1945.1.13)で幅10mほど決壊したため海水が浸入した。（東海地方地震･津波災害誌）
1498.9.20	明応7.8.25	神社流出	・（竹谷）白山神社流される。（東海地方地震･津波災害誌） ・（竹谷）明応8年の津波で社殿は流壊した。神夢によって爾来凡そ百年後に北方の山の現所に遷し祀った。（塩津村誌）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	史跡流出、神社再建	・拾石陣屋（逸見陣屋）：享保3年5ヵ村五百石の旗本逸見家は、二百参石と持高の多い拾石村の本郷に陣屋を構えていた。陣屋は大小の延石を並べ石垣は花崗岩で頑丈であったというが、天保8年の大水害で崩壊し延石や花崗岩を残して流されてしまった。以後修復されないでいた。安政元年の東海大地震の津波で跡形もなく残っていた石も流されてしまったという。陣屋一角にあった稲荷神社は、その後陣屋跡に再建されている。（塩津村誌）

（５）蒲郡・三谷・大塚

蒲郡・三谷・大塚では、宝永 4(1707).10.4（大塚）、昭和 20(1945).1.13（蒲郡）、平成 22(2010).2.27（津波は 28 日）（三谷）の地震で津波が記録されているが、被害は記録されていない。

昭和 20(1945).1.13（蒲郡）では 1m ほどの津波が来襲し、岩壁の上まで水が来たとの報告がある（地盤沈下による影響も考えられる）。なお、明治 24(1891).10.28 の地震で、三谷で津波被害による納税還付内訳があるが、被害状況は不明である。

表２―３―６　蒲郡・三谷・大塚の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	被害少ない	・（大塚）大塚村の被害は少なかった。（蒲郡市史　本文編2　近世編）
1891.10.28	明治24.10.28	津波被害の報告あり	・十月二十八日大地震（濃尾）。（蒲郡町誌） ・（三谷）津波被害のため納税還付内訳。 ※金額と名前のみ記載で、被害状況は不明。（海嘯汐入免租下戻簿　旧三谷町行政文書）
1945.1.13	昭和20.1.13	津波現象	・（蒲郡）岸壁では1mほどの津波が襲来し、岸壁の上まで水が来たという。（東海地方地震・津波災害誌）
2010.2.28	平成22.2.28	津波現象	・（三谷）潮位が約10cm上昇。（東日新聞（2010.3.1））

２―３―２　地震以外の津波（高潮・洪水）被害

蒲郡市における地震による津波以外の高潮（洪水（大風も含む））の記録は合計 25 回ある。蒲郡市を襲った地震による津波は少ないが、大風等による高潮（洪水）は多く発生している。

特に被害の大きい高潮（洪水）は 6 回あり、①安政 2 年(1855)では高波で塩浜被害、②万延元年(1860)では大風雨により田畑浸水、③明治 3 年(1870)では大風雨による家屋倒壊、④明治 22 年(1889)では大津波（高潮・洪水）により死傷者、家屋流失多数、⑤昭和 28 年(1953)では家屋倒壊、塩田被害、⑥昭和 34 年(1959)の伊勢湾台風では死傷者（ただし水死はなし）・家屋流失が記録されているなど、地震による津波と比較しても被害が大きいことがわかる。

なかでも、昭和 34 年(1959)の伊勢湾台風では、これまでの高潮（洪水）経験を活かし、早期警備体制をとったことが、人的被害を最小限にとどめることに繋がったと伝えている。

表２―３―７　地震による津波以外の高潮（洪水）被害記録（１）

西暦	和暦	出典
1639	寛永16	・八月大風諸国破損多シ。（王稔記）
1660	万治3	・七月十六日洪水。（王稔記）
1680	延宝8	・壬（閏）八月六日大風。（王稔記）
1689	元禄2	・十一月二日大浩（洪）水。（王稔記）
1699	元禄12	・六ノ廿九大風大雨。（王稔記）
1702	元禄15	・正月朔日大東風大雨。（王稔記）
1737	元文2	・三月十七日嵐吹大雨氷降ル。（王稔記）
1738	元文3	・二月朔日氷降五月五日ヨリ六月五日迄雨降続ク。（王稔記）
1740	元文5	・八月廿二日大風洪水世界一等悪年。（王稔記）
1747	延享4	・六月十三日ヨリ七月廿三日迄旱二十四日八月十九日 廿七日三度大風雨。（王稔記）
1780	安永9	・九月八日大風雨。（王稔記）
1784	天明4	・卯極月ヨリ正月迄大旱魃従大旦公雨請正月十五日ヨリ 十七日迄十七日大洪水。（王稔記）
1788	天明8	・正月晦日ヨリ二月朔日迄大風雨。（王稔記）
1806	文化3	・九月十七日大風又十二月二十九日も大風吹ク。（王稔記）
1808	文化5	・九月二十五日大風所之倒木多シ。（王稔記）

表２―３―７　地震による津波以外の高潮（洪水）被害記録（２）

西暦	和暦	出典
1812	文化9	・三州表大雨洪水土砂崩。（蒲郡市史）
1837	天保8	・八月十三日より大風雨。（蒲郡町誌）
1855	安政2	・閏7月15日朝の高波・高潮によって、塩浜が大きな被害を受けた。破損したかまど577ヶ所、杭木2228本・桁木3342本。（高波高汐被害報告　大塚区有文書（要約））
1860	万延元	・三州表強風雨災害 5月13日の報告によれば、同月10・13日の大風雨によって、形原・西浦の海辺近くの田畑に海水が入ったり稲生の田などに船が2、3艘流れ込んだりした。 22日の報告では、苗腰吹き折れ、低地は水をかぶり、海辺は海水が入り、嵐の後も雨が続いたという。（形原役所記録（要約））
1870	明治3	・閏十月の報告で、「度々御注進奉申上候通近年稀成数度之大風雨水難其上汐入様大痛二罷成…。（乍恐書付以奉願上候　大塚村）
		・当月十八日夜大風雨二付村方倒家有之候。（乍恐書付を以御届奉申上候　不相）
1885	明治18	・五月大暴風雨。（蒲郡町誌）
1889	明治22	・八月十七日午後七時頃より高潮襲来し、潮は高く線路に至り家屋の流失したるもの数十余戸に及び人畜の死傷多く其惨状言語に絶す。（蒲郡町誌）
		・大津波が襲来して溺死者十四名、浸水家屋三十三戸、冠水田五町十歩の大被害を見たことがある。その死者の霊を慰める碑は現存する。（大塚村の思いで）
		・明治22年（1889）大津波のあった時、人々は前の明神山と八幡宮へ避難した。津波は八幡宮の根岸まで波が来ていて、犬飼の人が老母親を背負って丸太の上を渡って避難してきたが、危なくて見ていられないほどの大波であったという。（塩津村誌）
		・形原村で家屋流失36戸、全壊55戸、半壊45戸計136戸、金平村で全壊9戸、半壊2戸、計11戸、一色村は全壊3戸、半壊2戸計5戸と記録されている。（蒲郡市誌）（形原戸長役場記録「暴風海嘯家屋流失倒家調」）
1898	明治31	・図面なし　道路破損、堤防決壊、橋梁破損、浸冠水、山崩れ、溺死者3名。（大塚区有文書　洪水被害報告）
1953	昭和28	・13号台風 9月25日に蒲郡を襲った「13号台風」における三谷町の被害状況調べ 図面は、床上浸水区域を赤色で、床下浸水区域を水色で、冠水区域を黄色で示しており、河川近くの被害が大きいのがわかる。（旧三谷町・形原町・西浦町各行政文書（要約））
		・海岸一帯には、木材や船舶が打ち上げられて多くの家屋が倒壊していた。海岸堤防の決壊62か所で延長11,132mにおよんだ。（蒲郡市誌） ・三谷町一帯から丸山町にかけては国道247号線を越えて水深2m以上の所もあり、蒲郡町も海岸一帯は鉄道線路付近まで水に浸った。塩津竹谷地区の塩田はこの台風で完全に破壊された。（蒲郡市誌）
1959	昭和34	・台風15号（伊勢湾台風） 9月26日に蒲郡を襲った「伊勢湾台風」に、市は午後7時に沿岸市民に即時避難命令を発し、消防団も避難活動に尽力した。 蒲郡都市計画図（25000分の1）に浸水区域を水色で加筆した図面をみると、一部は東海道線以北にまで到達している。 当時の市役所は、現在の蒲郡郵便局の位置にあり、床上まで浸水した。 （旧三谷町行政文書　台風十五号被害対策陳情書および図面（要約））
		・伊勢湾台風罹災者名簿　346件　被災番号、区分（全壊・半壊・床上等）、住所、氏名、続柄、性別、年齢、備考等 ・罹災申告書保証書綴 ・台風15号関係書類　2冊　各戸別災害状況調査綴。 （旧形原町行政文書　台風15号関係書類）
		・浸水集計表…住所・人名（家族人数）・被害状況（床上・床下等） 地区別7冊（鉢地、水竹、東区、松区、上区、中区、北区、西区、塩津、大塚、府相町、蒲郡町、小江町） 集計表1冊　等。（伊勢湾台風関係資料　蒲郡消防署より）
		・人的被害：死者5人、重傷11人、軽傷433人。 ・住家の被害：全壊295、流失56、半壊819、床上浸水1814、床下浸水659、非住家被害2056。 ・蒲郡は高潮および波浪警報を受けると直ちに市民に避難命令を発したため、物件災害はあったが、水死者は、幸いひとりも出なかった。蒲郡は先の台風第13号の経験をいかして早期警備体制をとったことが、人的被害を最小限にとどめることにつながったものといえよう。（蒲郡市誌）

（出所：蒲郡市博物館作成資料を元に作成）

２―４　田原市

２―４―１　三河湾沿岸

（１）全体の概要

田原市の三河湾沿岸は、嘉穂 3(1096).11.24 から平成 23(2011).3.11 まで計 11 回の地震による津波が記録されている。

そのうち津波の規模の大きかった津波は、嘉穂 3(1096).11.24、明応 7(1498).8.25、慶長 9(1605).12.16、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 の 5 回の津波であり、嘉穂 3.11.24 の津波を除きいずれも 3～4m（宝永 4(1707).10.4 の津波は最大 5m との記録がある）の波高で、堤防破壊、家屋流失または破壊、死者、浸水による田畑等の被害があったと記されている。(嘉穂 3(1096).11.24 の津波については史料がみあたらないが、慶長 9(1605).12.16 や宝永 4(1707).10.4 の津波と同じような影響があったと記されている)。

なかでも、宝永 4(1707).10.4 の津波では福江、野田、田原、嘉永 7(1854).11.4-5 の津波では福江（向山、畠）、伊川津、村松、馬伏、江比間、宇津江、田原で津波被害がでていると記録されている。そのほか、昭和 35(1960).5.24 の津波では、波高そのものは低かったが、渥美湾沿岸の一部で若干の家屋浸水があったと記録されている。

表２―４―１　田原市三河湾沿岸の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容	被災地
1096.12.17	嘉穂3（永長1）.11.24	死者、家屋流失、田畑浸水	・永長津波（1096年）の場合の史料はみあたらないが、慶長や宝永津波の場合と同じような影響があったものと考えられる。 ※明応、慶長、宝永、安政の四大津波ではだいたい同じくらいの影響と見なされる。波高は概ね3m位で、所により4mにもなったものと思われる。堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなどの被害があり、浸水も著しく、田畑等に被害を与え荒廃地となった所も多かった。（東海地方地震・津波災害誌）	
1498.9.20	明応7.8.25	死者、家屋流失、田畑浸水	・概ね3m位、所により4m。（東海地方地震・津波災害誌） ・堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなど被害があり、浸水も著しく田畑等に被害を与え荒廃地となった所も多かった。（東海地方地震・津波災害誌）	田原
1605.2.3	慶長9.12.16	死者、家屋流失、田畑浸水	・概ね3m位、所により4m。（東海地方地震・津波災害誌） ・堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなど被害があり、浸水も著しく田畑等に被害を与え荒廃地となった所も多かった。（東海地方地震・津波災害誌）	田原
1707.10.28	宝永4.10.4	死者、家屋流失、田畑浸水	・高さ3-5m。（東海地方地震・津波災害誌） ・概ね3m位、所により4m。（東海地方地震・津波災害誌） ・堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなど被害があり、浸水も著しく田畑等に被害を与え荒廃地となった所も多かった。（東海地方地震・津波災害誌）	福江、野田、田原
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	死者、家屋流失、田畑浸水	・概ね3m位、所により4m。（東海地方地震・津波災害誌） ・堤防が破壊されたり、家屋が流失または破壊、死者も出るなど被害があり、浸水も著しく田畑等に被害を与え荒廃地となった所も多かった。（東海地方地震・津波災害誌）	福江（向山新田、畠）、伊川津、村松、馬伏、江比間、宇津江、田原
1944.12.7	昭和19.12.7	被害なし	・1m足らずの波高であり、被害はなかった。（東海地方地震・津波災害誌）	福江、江比間、田原
1945.1.13	昭和20.1.13	被害少ない	・1mくらいが最大。（東海地方地震・津波災害誌） ・ほとんど津波被害はなかった。（東海地方地震・津波災害誌）	
1946.12.21	昭和21.12.21	津波現象	・福江にて津波あり。（伊古部郷土誌）、（愛知県災害誌）	福江
1960.5.24	昭和35.5.24	家屋浸水	・衣浦や矢作川下流域で3mくらいになった所もあり、若干浸水した所もでたようであるが、日本近海の近地津波のような激しさはなく、それほどの被害はなかった。（東海地方地震・津波災害誌） ・津波は渥美湾にも侵入してきたが、波高は低く、そのうえ最高波が到達した時刻が干潮時にあったために潮位はあまり上がらず、渥美湾沿岸の一部に若干の家屋浸水をみた程度の被害ですんだ。（渥美郡災害年表）	福江
2010.2.28	平成22.2.28	住民避難	・三河湾にも最大で1メートルの津波が予想されるとあって、伊勢湾フェリー、名鉄フェリーが午前11時45分から欠航した。（東日新聞（2010.3.1）） ・避難勧告は、田原市1万921世帯。しかし、避難したのは田原市で3世帯3人にとどまった。（東日新聞（2010.3.1））	田原
2011.3.11	平成23.3.11	住民避難	・田原市は、各校区市民館20カ所に避難所を開設。神戸、伊良湖、福江、泉、清田の5校区で計14人が自主避難した。（東愛知新聞（2011.3.12））	

（２）福江（中山、向山、亀山、保美、畠、吉田、高木、山田）

福江では、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5、昭和 19(1944).12.7、昭和 21(1946).12.21、昭和 35(1960).5.24 の 5 回の地震による津波が記録されている。

宝永 4(1707).10.4 の津波では福江と田原で波高がやや高く 5m 近くに達したと報告されている。

嘉永 7(1854).11.4-5 の津波では、福江の各地で津波被害が発生しており、福江で床上 3 尺[1]（約 0.9m）の浸水があり内陸の保美まで潮水が浸水したとの記録がある。向山新田では、大津波で常堰、水門の堤防が破壊し、囲い堤が欠損し、約 56 町[2]（約 56ha）の新田が一面亡所となった。向山新田は延宝元年(1673)に新田開発され、新田堤の内側に塩田もみられるなど製塩業が盛んであった（渥美町史）が、そうした産業に被害をもたらしたと思われる。畠では、川岸通りの家が浸水、水道橋、観音橋（江川（免々田川の支流））が破損し、地震津波で潰家居宅 1 軒、長屋潰 2 ケ所などの被害が記録されている。畠は畠村陣屋が立地し、湊河岸に商店街が立地していた（渥美町史）が、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で商店街を中心に津波被害があったと思われる。古田では、船 2 隻、浜道具が流失している。古田は福江の中でも漁労が盛んであったとされる（渥美町史）が、漁業に津波被害を受けたものと思われる。

昭和 19(1944).12.7 は波高 50cm の津波、昭和 21(1946).12.21 は最大全振幅 15cm の津波、昭和 35(1960).5.24 は福江で最大振幅 50cm、小中山で最大振幅 95cm の津波が発生しているが、被害は報告されていない。

表２―４―２　福江（中山、向山、亀山、保美、畠、吉田、高木、山田）の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	津波現象	・（福江全体）福江や田原で波高やや大きかったようで、5m近くにも達したものと思われる。（東海地方地震・津波災害誌）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	家屋浸水	・（福江全体）福江では床上3尺、約1mまで津波が来ており保美のあたりまで潮水が入ってきている。（国際自動車コンプレックス研究会NEWSLETTER vol.38）（渥美郡泉福寺史料）
		新田浸水（向山新田）	・（向山新田）大津波のために囲い堤が決壊し、総反別56町4反歩余の向山新田は、開発以前の元の姿の入江同然になってしまった。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治）） ・（向山新田）向山新田では、常堰は砕け、両水門の間の堤防が凡そ25間切れ、新開田の堤も30間程欠損した。その外の堤も5-6尺ゆり込み、道通りには7-8寸の割れ目ができ、新田一面亡所同様になってしまった。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治）） ・（向山新田）被災後、向山新田の堤防復旧工事に官民挙げて取り掛った。（渥美町の民族探訪）
		家屋浸水、新田浸水（畠）	・（畠）高汐、新田堤水門より切込常堰くだけ新田不残水入。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（畑村文書） ・（畠）畑村の川岸通りの家は水に浸かり、水道橋、観音橋も破損した。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治）） ・（畠）地震津波による潰家居宅1軒、居宅庇2ケ所、灰部屋1ケ所、土蔵半潰24ケ所、寺半潰1ケ所、寺厨1ケ所、店半潰1軒、長屋潰2ケ所、長屋半潰2ケ所。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））
		船・漁具流失（古田）	（古田）大津波打寄、古田にて網船弐艘、浜道具大はん流失。（収新日本地震史料第五巻別巻五ノ一（五月雨噺し））
1944.12.7	昭和19.12.7	津波現象	・（福江全体）地震後30分位にして引潮に始まる津波を観測、波高約50cm。（東海地方地震・津波災害誌） ・（福江全体）潮が今まで足首くらいしかかくれなかったのに、地震後膝までくるようになった所がある。（東海地方地震・津波災害誌）
1946.12.21	昭和21.12.21	津波現象	・（福江全体）約一メートル五十センチの潮位。（伊古部郷土誌） ・（福江全体）押し波ではじまり最大全振幅15cmその周期25分。（愛知県災害誌）
1960.5.24	昭和35.5.24	津波現象	・（福江）津波来襲回数7回、津波の周期35～75分、津波の振幅20-50cm。（愛知県災害誌） ・（小中山）津波来襲回数11回、津波の周期30～85分、津波の振幅25-95cm。（愛知県災害誌）

（３）伊川津

伊川津では、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震による津波で、伊井新田の囲い堤が残らず欠け、亡所同様となり、その修復が安政 2(1855).7 までかかったと記録されている。

伊井新田は、天保 5 年(1834)に約 50 町歩の開発が成り、伊川津北部沿海地に入植者が

[1] 1 尺は約 30cm
[2] 1 町は約 99.18 アール

入ったが、日照りに弱く、潮害を受けやすいやせ地であったため、生活は貧しいものであった（渥美町史）。この地震前後の入植者数をみると、嘉永 5 年(1852)は家数 19 戸、人数 48 人であったが、安政 6 年(1859)は 17 戸、46 人（渥美町史）と減っており、嘉永 7 年(1854)の津波被害の影響があったものと推測される。

表２―４―３　伊川津の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	新田被害（伊井新田）	・（伊井新田）高津波のために囲い堤は残らず欠け崩れ、亡所同様になってしまった。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治）） ・（伊井新田）囲い堤が津波によって破壊され、その修覆のための普請が、安政二年（1855）の七月までかかった。（渥美町の民族探訪）

（４）江比間

江比間・村松・馬伏の 3 地域では、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震による津波が記録されている。海岸沿いにある江比間では、3～4m の津波が発生し浸水しており、特に江比間港（現泉漁港）では「地震、津波大変ニテ何事モ打忘レ」と被害の大きさを伝えている。また、江比間の海に近い一本松に鎮座していた津島神社、厳島神社、弁天社、牛頭天王社が津波の被害をうけ、前ノ山（前山）に移転したとの記録がある（前ノ山は七峰山（現在では七つ山と呼ぶ）を指すと考察されている）。江比間は、神社が住吉神社を始め、古くから熊野社、江戸期勧進の秋葉・厳島・津島・稲荷社など 10 社が郷中に散在して祀られていた（渥美町史）が、津波被害を契機に多くの寺院が前ノ山に移転したと思われる。

一方、江比間の海岸から新堀川、今堀川、紺屋川で繋がる内陸に位置する馬伏・村松や、江比間内でも内陸にある川向・山崎では、川の堤が破損したとの記録があり、特に馬伏では「登り川堤大波大われ」とあることから、津波が川を遡上して堤を破壊したものと推測される。

そのほか、昭和 19(1944).12.7 の津波では、潮位が上昇し海岸付近の岩礁が海水に浸ったと記録されている。

表２―４―４　江比間の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23	嘉永7.11.4-5	津波被害、堤被害（江比間）	・（江比間）波高3-4m。（東海地方地震･津波災害誌） ・（江比間）津波により浸水があった。（東海地方地震･津波災害誌） ・（江比間港）朝四ツ大地震ニ相成リ大津浪来襲「地震、津浪大変ニテ何事モ打忘レ」云々トアリ。（泉村々史）（江比間郷史）
		堤被害（川向、山崎）	・（江比間）川向、山崎堤等破損二百八十四間（約500m）。全壊三戸、半壊五戸。山より大石十三落下。（泉村々史）（江比間村霜月四日大地震破損書上帳）（村松村回状附留帳） ・（江比間）川向の防約100間余中割れ、70間小割れ、山崎から大湯まで89間大割れした。津波により浸水があった。（東海地方地震･津波災害誌）
		登り川堤大波（馬伏）	・（馬伏）大地震に付、登り川堤大波大われ修復に候。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（諸向書留覚帳写）
		大川境大破（村松）	・（村松）全壊5戸、大川境大破。（泉村々史）（江比間村霜月四日大地震破損書上帳）（村松村回状附留帳）
1944.12.7	昭和19.12.7	津波現象（江比間）	・（江比間）付近の岩礁は大潮の高潮時でも波が来なかったのに、潮位が上昇し海水に浸かる。（東海地方地震･津波災害誌）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	神社被害（津島神社、厳島神社）	・（江比間）津島神社と厳島神社は鎮守山の北方、海に近い「一本松」に鎮座されていた。いずれも神社というより祠であったが……。 七峯山の中腹に遷座されたのはいつ頃だろうか。ほとんど記録を発見することができなかったが、安政五年（一八五八年）のものがある。「津島神社、厳島神社、二社ヲ一本松ヨリ前ノ山ヘ遷座ス」がそれである。安政年間には神社の修覆再建が集中的に続いている。おそらく、安政元年十一月四日朝四つに起った大地震と大津波の来襲で相当な被害をこうむったせいであろう。津島神社、厳島神社が海岸近くから「前ノ山」へ移されたという記録の「前ノ山」は、鎮守山ではなく七峯山を指しているのではないだろうか。（江比間史）
		神社被害（弁天社、牛頭天王社）	・（江比間）高汐満、追々浪欠御宮松木不残立枯に相成候。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（八王子様造立、弁財天様造立、山ノ神様造立、天王様屋根替入用帳） ・（江比間村）内面に面する海岸に祀られていた「一本松御宮」の、弁天社、牛頭天王社が、大地震の後の高潮で境内の浜が欠け、松木の立ち枯れ等があり、安政五年（1858）六月に前山の土地に移した。（渥美町の民族探訪）

（５）宇津江

宇津江では、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で 3～4m の津波が記録されており、津波で制札場が破損し、地引網引場が冠水し、田畑に津波が浸水したと記録されている。湾岸村々のうち宇津江と中山の 2 村のみ地引網を所有し、集団（網仲間）をつくり操業していた。また宇津江については田畑が少なく、地引網で稼ぎ暮らしを立てていた（渥美町史）が、嘉永 7(1854)年の津波で地引網操業を中心に被害があったものと思われる。

表２―４―５　宇津江の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	家屋等破損、漁具流出、田畑浸水	・3-4m。（東海地方地震･津波災害誌） ・津波では制札場破損し、地引網引揚波冠。（東海地方地震･津波災害誌） ・東御本田2反6畝23歩浸水、浜田分2反7畝分、新田分3反8畝5歩浸水。（東海地方地震･津波災害誌）

（６）野田・波瀬

野田では、宝永 4(1707).10.4 の地震で津波の被害が記録されており、海辺に津波が上がり、網、船、漁具は流失し、浜筋の者は残らず山に逃げたと記録されている。なお、宝永 4(1707).10.4 の地震では、野田が最も被害を受けた（田原藩領内の家屋破壊等 1400 軒のうち 580 軒を野田が占める）と報告されているが、どの程度津波による影響であったかは不明である。(地域内にある真宗白雲山西圓寺の堂宇がすべて倒壊し、安楽寺も大地震で潰れたのも、津波による影響かは不明である。)

波瀬では、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波があったとされるが、被害は報告されていない。

表２―４―６　野田・波瀬の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	漁具流失、家屋破壊（野田）	・村々の網船其の他の漁具不残流失し、山は崩れ、谷は埋りて人馬多く死す。別て破損夥しきは野田七郷なり。（伊古部郷土誌）（常光寺年代記） ・海辺へつなみ上り、浜筋の者は残らず山へ逃げた。（野田史）（金五郎文書「歳代覚書」） ・田原藩領内の居宅、小屋の倒壊、破損家屋は1400軒に及んだが、この内580軒を野田村が占めていた。（ただし、津波による被害かは不明）（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）（参河国聞書、三州吉田記））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波現象（波瀬）	・3-4m。（東海地方地震･津波災害誌）
1707.10.28	宝永4.10.4	神社倒壊（野田）	・野田村保井の真宗白雲山西圓寺の堂宇はすべて倒壊し、後年現在地に移転した。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治）） ・安楽寺（野田）：大地震で潰れてまた建直した。（田原町史中巻） ・西圓寺、安楽寺ともに、津波による被害かは不明。（寺院関係者より聞き取り）

（７）田原

田原では、明応 7(1498).8.25、慶長 9(1605).12.16、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5、昭和 19(1944).12.17、平成 22(2010).2.27（津波は 28 日）の地震で津波が記録されている。明応 7(1498).8.25 の地震では高さ 3～4mの津波が、慶長 9(1605).12.16 の地震では高さ 2～3mの津波が発生しているが、具体的な被害は記録されていない。

宝永 4(1707).10.4 の津波は高さ 4～5m と推定され、当地域が西三河の一色・寺澤・平沢と最も大きな被害を受けている。特に津波により汐川を中心に被害が大きく、汐川の堤が壊れ海新田[3]の堤防が決壊し田畑に大きな被害をもたらした。また田原御城下、藤田の二ツ池堤や漆田正楽寺地内、清谷橋まで潮が来ており、汐川を津波が遡上して支川の清谷川まで汐が入り込んだ。

[3] 海新田の場所は不明。

嘉永 7(1854).11.4-5 の津波は高さ 3～4m と推定され、汐川が津波を遡上し船倉橋まで高潮が上がり、橋・堤に損傷を与えるなどの被害が記録されている。特に、海新田[4]は津波で堤が切れ、翌年まで海になっていたと記録されている。また海辺では船・漁具が多数流失し、100 間（約 180m）の浜辺が欠けた所もあると報告されている。

そのほか、昭和 19(1944).12.17 は 0.5m の津波が発生し、汐川や蜆川の岸の堤防が所々沈下し、吉胡地内の低湿田地の一部が海水面下に沈下し、海岸低地に海水が浸入したと記録されている。

表２―４―７　田原の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1498.9.20	明応7.8.25	津波現象	・三遠大地震で暴風雨、大津波あり、津波の高さは約3-4mと推定される。（東海地方地震･津波災害誌）（田原町史）
1605.2.3	慶長9.12.16	津波現象	・津波の高さ2-3m。（東海地方地震･津波災害誌）
1707.10.28	宝永4.10.4	汐川堤防被害、新田・田畑被害、川橋汐さす	・三河湾・知多湾・渥美湾にも津波が浸入し田原や一色・寺津・平坂にも大被害を及ぼした。（東海地方地震･津波災害誌） ・福江や田原で波高やや大きかったようで、5m近くに達したものと思われる。（東海地方地震･津波災害誌） ・津波の高さは4m余と推定される。地震後潮位5-6寸（15-18cm）上がり高潮時々起り補強した。（東海地方地震･津波災害誌） ・汐川筋の堤防も数百間にわたって欠壊した。海新田等の堤も津波によってさらわれてしまった。（西円寺史）（御祐筆日記） ・田地の損耗もまた大きく特に津波によって海新田の堤防が決壊し被害が大きかった。また汐川の堤も壊れ田畑も荒廃した。このように地震と津波の被害が汐川を中心に大きかった。（東海地方地震･津波災害誌） ・田原御城下、藤田の二ツ池堤まで汐さす。漆田正楽寺地内、清谷の橋までも汐さす。（野田史）（金五郎文書「歳代覚書」）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	橋・堤損傷、漁具流失、新田被害	・高さ3-4mと推定。（東海地方地震･津波災害誌）（青窓紀聞） ・船倉橋辺りまで高潮が上がり。（渥美町の民族探訪） ・高汐打入り、橋・堤等に損所あり、海岸が欠込み村々の漁猟船道具等多数流失。（東海地方地震･津波災害誌）（青窓紀聞） ・海新田は、つなみにて堤切れ、翌年迄も海に成申候　すべて底き所は一尺五寸、或は二尺位の広さ割れ申候　浜田辺は高ミ故地は割れ不申候、枯木川辺割れ申候　浜方はツナミ、地震の後半刻計過ぎツナミ三本打申候　此の節手網四帖・網船・諸道具共流失申候、片浜不残の事に御座候、浜辺は、五間・八間・十間・二十間、或は百間欠け申候。（収新日本地震史料　第五巻五ノ一）（庄屋日記　田原町庄屋　彦坂弥八郎）
1944.12.7	昭和19.12.7	堤防被災、海岸低地浸水	・0.5m。（東海地方地震･津波災害誌） ・汐川や蜆川の岸では堤防が所々沈下した。また吉胡地内の凸出の低湿田地約0.5×0.25kmは海水面下に沈下した。海水が海岸低地に浸入した。（東海地方地震･津波災害誌）
2010.2.28	平成22.2.28	住民避難	・「三河湾岸だが、汐川を津波が遡（そ）上する心配がある」として、市総合体育館や市文化会館は午後2時から休館に入った。（東愛知新聞（2010.3.1））

２―４―２　太平洋岸

（１）全体の概要

田原市の太平洋岸では、これまで 17 回の地震による津波が記録されている。被害の大きい津波は次の 10 回であり、①嘉穂 3(1096).11.24 の津波は、波高 3～7m の規模で船・漁具流失、②明応 7(1498).8.25 の津波は、波高 6～8m の規模で死傷者、家屋損壊被害、漁船・漁具流失、③慶長 9(1605).12.16 の津波は、波高 5～6m の規模で船・漁具の流失、④元禄 16(1703).11.23 の津波は、海水が漲溢し、死者多く、船・網・漁具流失、⑤宝永 4(1707).10.4 の津波は、波高 6～8m で所により 10m の規模で死傷者、家屋損壊、漁船・漁具流失（半農半漁の集落は大打撃）、⑥宝永 5(1708)の津波は、波高 2～3m の規模で田畑に浸水被害、⑦嘉永 7(1854).11.4-5 の津波は、波高 6～8m で所により 10m の規模で死傷者、家屋損壊、漁船・漁具流失（3 度の津波が押し寄せる一方、引き波により見たこと

[4] 海新田の場所は不明。なお田原町庄屋の彦坂弥八郎氏は神戸村の庄屋であったため、太平洋岸の新田の可能性もある。

がない磯が現れ、目が届く範囲では潮水がなくなった)、⑧安政 2(1855).9.28 の津波は、波高 3m くらいで漁網流失、⑨昭和 35(1960).5.24 の津波は、潮位はいつもより 2m 高く、満ち引きの差も 3 倍ほど大きく、高潮で揚げ船をさらわれ丘にあげた、⑩平成 23(2011).3.11 の津波は、赤羽根漁港で波高 1.6m の規模で、2 隻が浸水し廃船、と報告されている。

渥美半島の太平洋岸には、数 10～200 戸程度の塊村となした 40 近くの集落があり、その集落を結ぶ伊勢街道が 16 世紀まで栄えていたが、年々の海岸浸食により道は高台に移動し、坂道が多い道となった。特に宝永 4 年の地震で太平洋岸の村落は大半が流出し、これまでの街道（伊勢街道）は修繕できないほどに破壊され、これを契機に常光寺などの寺社や村落が北方の高地に移転している。

しかしながら、被害状況を地域別にみると、宝永 4(1707).10.4 では堀切と池尻の 2 地域のみに被害の記録がある。同様に、嘉永 7(1854).11.4-5 では、堀切と池尻以外の地域でも被害がでているが、それらは船や漁具の流出が主であり、堀切や池尻のような家屋被害の記述がほとんど記録されていない。

この理由として、田原市の太平洋岸は、激しい波浪浸食で急峻な海食崖が形作られ、断崖のように砂浜まで迫っていることがあげられる。これは、豊橋市の太平洋岸のように、台地の奥まで切り込んだ深い開折谷をもち、広い後浜に耕地や浜屋敷があった地形とは大きく異なっていた。また、渥美半島の海食崖では、城下（豊橋市）以西は帯水層をもたない砂礫の互層からなり、浜辺では生活用水や農業用水が容易に得られなかった。

この 2 点から、田原市の太平洋岸の集落は、背後の海食崖上の台地に置くほかなかったため、堀切と池尻以外の地域は津波による被害は免れたと報告されている。

表２―４―８　田原市太平洋岸の津波被害記録（１）

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容	被災地等
1096.12.17	嘉穂3(永長1).11.24	船破損、漁具流失	・波高3-7m。(明応津波はやはり高い6-8mの波高と思われるが永長津波はやや低かったように思われる。)(東海地方地震・津波災害誌) ・愛知県内の被害不詳。(愛知県災害誌) ・船の破損、魚網、魚具類の流失などの被害。(東海地方地震・津波災害誌)	
1498.9.20	明応7.8.25	死傷者、家屋破壊、漁具流失	・6-8mの波高。(東海地方地震・津波災害誌) ・漁船の流失・破壊、漁網の流失、家屋の破壊、死者・溺死者をだすなどかなりの被害。(東海地方地震・津波災害誌)	堀切
1586.1.18	天正13.11.29	津波襲来	・津波が渥美表浜に波及したものと考えられる。(東海地方地震・津波災害誌) ・大地震津波襲来。(校区のあゆみ　高豊)	堀切
1605.2.3	慶長9.12.16	船破損、漁具流失	・波高5-6m。(明応地震と比べてやや低かったように思われる。)(東海地方地震・津波災害誌) ・船の破損、魚網、魚具類の流失などの被害。(東海地方地震・津波災害誌) ・片浜の船皆打破れ、魚網を流失した。人知らず明日見て驚くなり。(東海地方地震・津波災害誌)(常光寺年代記)	堀切
1703.12.31	元禄16.11.23	死者、船漁具流失	・船網漁具等を流失。(東海地方地震・津波災害誌)(愛知県渥美郡史)(細谷村記録常光寺年代記等) ・海水漲溢人多く死し、船網漁具等流失す。(細谷村記録常光寺年代記等。(元禄16年11月22日の記録として))	赤羽根一帯
1707.10.28	宝永4.10.4	死者、家屋破壊、船流失、網流失	・波高6-8mであり、場所により10mにも達している。(東海地方地震・津波災害誌) ・漁船の流失・破壊、漁網の流失、家屋の破壊、死者・溺死者を出すなどかなりの被害。(東海地方地震・津波災害誌) ・漁船や漁網などがことごとく流失し、地引網を主体とした半農半漁の表浜の村々は、大打撃を受けた。(田原市博物館　研究紀要第3号(藤城信幸))	堀切、池尻、赤羽根、高松
1708	宝永5	田畑浸水	・波高2-3m。(東海地方地震・津波災害誌) ・田畑の浸水被害。(東海地方地震・津波災害誌) ・宝永五年(一七〇八)春、去年ノ地震止マズ、所所高汐満チテ、田畑多ク破壊ス。(老津村史)(細谷村記録常光寺年代記)	
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	死者・溺死者、家屋破壊、漁船流失、網流失	・波高6-8mであり、場所により10mにも達している。(東海地方地震・津波災害誌) ・漁船の流失・破壊、漁網の流失、家屋の破壊、死者・溺死者を出すなどかなりの被害。(東海地方地震・津波災害誌) ・三度津波が押し寄せ、ほうべの七分目程まで潮が上がった。(渥美町の民族探訪) ・堤防等の4mもゆり落ちた所があり、表浜(遠州灘沿岸)は大津波におそわれたが、倒壊家屋、山くずれがあり、余震は7か月ばかりつづいた。(愛知県災害誌) ・片浜筋村にも高ほうべ迄打付、其浪引取候節は昔より見たる人もなき沖の磯々皆々あらわれ、目の届くだけは汐一水も無之。(渥美町郷土資料館　研究紀要第7号(清田治))(田中家文書)	日出、堀切、小塩津、和地、若見、池尻、赤羽根、高松、神戸
1854.12.24	嘉永7.11.5	津波現象、被害なし	・堀切にて地震による津波の記録あり。地震の翌日(5日)の夕方、強い余震ののち、西南方角より雷鳴の如き重声が轟いた。「田原より五里程有之堀切ト申ス処江打寄口候由飛脚之者田原ニテ承り候趣」と巨大津波が襲撃。(逐城解説　詳説・吉田城と池田照政～ついに判明！吉田城本丸天守(代用)鉄三重櫓の概観全貌とその最期～)(『西村次右衛門日記』豊橋市史々料叢書二・三) ・赤羽根にて地震による津波の記録あり。今日の津波は当所に至りては軽し。(研究輯録　三遠の民俗と歴史)	堀切、赤羽根一帯
1855	安政2.2.1	津波現象、被害なし	・赤羽根にて地震による津波の記録あり。海汐ハ増し候。(赤羽根の古文書　近世史料編)	赤羽根一帯
1855	安政2.3	津波現象、被害なし	・赤羽根にて地震による津波の記録あり。海汐ハまし候。(赤羽根の古文書　近世史料編)	赤羽根一帯
1855	安政2.6.16	津波現象、被害なし	・赤羽根にて地震による津波の記録あり。度々海汐ハまし候。(赤羽根の古文書　近世史料編)	赤羽根一帯
1855.11.7	安政2.9.28	網流失	・魚網の流失などの被害がみられているので波高は3mくらいあったと思われる。(東海地方地震・津波災害誌)	赤羽根一帯、大草、神戸

表２―４―８　田原市太平洋岸の津波被害記録（２）

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容	被災地等
1944.12.7	昭和19.12.7	津波現象、被害なし	・津波の高さ1-1.5m。（東海地方地震･津波災害誌） ・波高は宝永や安政津波の約4分の1くらい（※宝永・安政両津波はだいたい同じ高さの6-8m。）かなり低く被害も生じていない。（東海地方地震･津波災害誌） ・津波が表浜一帯を襲った。（田原市博物館　研究紀要第4号（藤城信幸）） ・太平洋沿岸デハ地震直後海水ハ引イテ行キ約三分位ノ後、カエシテキタ。然シ波浪ハ強クナカッタ。（伊古部郷土誌）（愛知県渥美半島災害状況調査）	伊良湖、赤羽根一帯
1960.5.24	昭和35.5.24	船流出	・地元伊良湖漁協組調べの潮位はいつもより二メートルほど高く、満ちひきの差も三倍ほど大きく潮が陸までよせている。（中部日本新聞(1960.5.24)(夕刊)） ・潮位も二メートルほど高まり、それが約30分ごとに満ち引きし4、5時間目でいっそうに大きくなった。このため、いままで海水に隠れていたイソの岩がすっかり背を現わし逃げ遅れた黒ダイやワガ、アイナメ、エビ、などのイソ魚やワカメがどっさり網ですくえ思わぬ拾いものに沿岸漁民は大喜び。しかし、一方では高潮に浜の揚げ舟を波にさらわれあわてて全部の船を丘にあげるなど大騒ぎだった。（中部日本新聞（1960.5.25））	伊良湖
2010.2.28	平成22.2.28	住民避難	・赤羽根漁港にて0.7mの津波あり。（東日新聞(2010.3.1)） ・三河湾にも最大で1メートルの津波が予想されるとあって、伊勢湾フェリー、名鉄フェリーが午前11時45分から欠航した。（東日新聞（2010.3.1）） ・「三河湾岸だが、汐川を津波が遡（そ）上する心配がある」として、市総合体育館や市文化会館は午後2時から休館に入った。（東愛知新聞（2010.3.1）） ・避難勧告は、田原市1万921世帯。しかし、避難したのは田原市で3世帯3人にとどまった。（東愛知新聞（2010.3.1））	赤羽根漁港
2011.3.11	平成23.3.11	住民避難	・赤羽根漁港にて1.6mの津波。2隻浸水（廃船）。（東愛知新聞（2011.3.12）） ・田原市は避難勧告は出さなかったものの、市民の心情を考えて市内すべての市民館20ヵ所を自主避難場所として開設した。うち4ヵ所の市民館に計14人が自主避難した。（東愛知新聞（2011.3.12））	赤羽根漁港
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による集落移転	【宝永4年（1707）の大地震による集落・神社の移転】 ・宝永4年（1707）の大地震では、太平洋沿岸の村落は大半が流出してしまった。これまでの街道（伊勢街道）は、修繕できないほどに破壊されてしまった。これを契機に、東観音寺・常光寺などをはじめ多くの寺社や村落が北方の高地に移転した。（渥美町郷土資料館　研究紀要第2号（加藤克己）） 【表浜の集落移転の特徴】 ・「表浜」と呼ばれる渥美半島の太平洋岸には、数10～200戸程度の塊村をなした40近くの集落が、断続的に連なっている。この表浜集落も、海食崖の後退に伴い、北方の高地へと移転が繰り返されてきた。現在の集落の南側には「元屋敷」と呼ばれるかつての屋敷跡が各所に残されている。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）） 【地形による津波被害の要因】 ・池尻村と堀切村を除けば、六連村から伊良湖村までの田原市の表浜集落では、海崖の崩落や漁具の流出以外は、津波による家屋被害の記述はほとんど見当たらない。・・・城下以西の海食崖は帯水層をもたない砂礫の互層からなり、浜辺では生活用水や農業用水が容易に得られなかった。このため、背後の海食崖上の台地に集落を置くほかなかった。そのため、漁具の流出はあったものの、津波による家屋への被害は免れたのである。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）） 【伊勢街道】 ・伊勢街道が盛んなのは16世紀頃までで、年々の海岸侵食により道は高台に移動し、坂道が多い道となった。特に、宝永4年（1707）の大地震で、古来の街道はほとんど海中に没し、安政元年（1854年）の大地震では「片浜十三里皆がけくづる」と地元の記録にある。（遠州灘海岸保全基本計画（平成15.7静岡県・愛知県））	

（２）伊良湖

伊良湖では、昭和 19(1944).12.7 と昭和 35(1960).5.23（津波は 24 日）の地震で津波が記録されているが、昭和 19(1944).12.7 の津波は高さ 1.5m 内外、昭和 35(1960).5.24 の津波は高さ 50cm であり、被害の報告はされていない。江戸時代の伊良湖の集落は、現田原市伊良湖町宮下一帯にあり、太平洋沿岸からは宮山（宮山原始林）を挟んだ山の北麓にあったためと考えられる。半農半漁村であったにも関わらず漁具の流失も報告されていないことから、津波による被害は少なかったと思われる。

表２―４―９　伊良湖の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1944.12.7	昭和19.12.7	津波現象	・地震後潮が引き、少しして上昇してきた。高さは1.5m内外。（東海地方地震･津波災害誌）
1960.5.24	昭和35.5.24	津波現象	・伊良湖港では五十センチほど高かった。（中部日本新聞(1960.5.24)(夕刊)） ・伊良湖では津波の到達時刻は、第1波（4時12分）～第5波（8時00分）。（東海地方地震･津波災害誌）
	江戸時代	集落の特徴	・半農半漁村で、集落は現渥美町大字伊良湖字宮下一帯にあった。（明治38、9年全戸移転）（渥美町史　歴史編　上巻） ・集落は宮山の北麓にあった。村人は半農半漁の生活を営んでいた。集落が田畑から遠い場所に位置していたのは、漁業に関わる作業の利便のほうを優先したからだろう。（伊良湖誌）

（３）日出

日出では、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が記録されており、住民１名が大堀川で溺死、多くの家屋が流失し、住民は西にある骨山に避難したと報告されている。江戸時代の日出の生活は、海浜利用権の浜が狭く漁業が十分にできず、田畑の収穫も少なかったとさ

れているが、津波により、そうした船や漁具も流失し、村の奥に移転する住民もいたなど、さらに不自由な暮らしをしたと推測される。

こうした嘉永 7(1854).11.4-5 の津波被害を受けた日出では、その後、人家や先祖伝来の田畑を守るために、「かいがらぼた」と呼ぶ特産のいの貝やカキの殻を積み上げて、浜に沿った防潮林の中に波除け堤を築いてきており、昭和 30 年代くらいまで大事にされてきた。

表２―４―１０　日出の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	死者、家屋流失、船・漁具流失	・家多く流る。（東海地方地震・津波災害誌） ・日出村では、大堀川で斎藤重左衛門が溺れ、小久保治助や斎藤三次郎等の家も、村の奥に移転したという。（渥美町の民族探訪） ・日出村の者は西骨山へ逃れ、家屋や網船や漁道具の流失により、不自由な暮らしをしたという。（渥美半島―郷土理解のための32章―改訂版）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波による集落移転	・地元に残る言い伝えでは、日出村でも浜辺に近い所に家を構えていた三次郎宅や次助宅数軒が津波に押し流されたので、郷中や北続きの安全な場所に移転している。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治）） ・日出村では、大堀川で斎藤重左衛門が溺れ、小久保治助や斎藤三次郎等の家も、村の奥に移転したという。（渥美町の民族探訪）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波による史跡	【かいがらぼた】 ・人家や先祖伝来の田畑を守るために、浜に沿った防潮林の中に波除け堤を長い年月かけて築いてきた。地元（日出地区）では、特産のいの貝やカキの殻をその都度積み上げてきたので、「かいがらぼた」と呼び、昭和30年代くらいまで大事にされてきた。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治）） ・地元で「かいがらぼた」と呼ばれる津波除けの堤を太平洋岸（まで）に築いたりした。なお、これらの教訓によりその後の地震（昭和19年、東南海地震等）では、比較的被害が少なかった。（・「前代未聞事」高瀬家所蔵文書　・「助郷免除願書」堀切区有文書　・「常光寺年代記」常光寺文書　・清田治「渥美半島における嘉永東海地震の実状-現存する災害記録から-」、『研究紀要・第7号』渥美町郷土資料館　平成15年3月　・「堀切村村絵図」等）
	江戸時代	集落の特徴	・日出村は海辺の村でありながら、海浜利用権の浜が狭く、江戸時代の末期に、この村出身であった将軍家菩提寺芝増上寺第六十五世智典大僧正の計らいで、海浜利用権が拡大されるまで漁業も十分にできなかった。（渥美町史　歴史編　上巻）

（４）堀切

堀切は、明応 7(1498).8.25、慶長 9(1605).12.16、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が記録されている。具体的には、①明応 7(1498).8.25 の津波は約 6～8m の規模で、死者、人家倒壊の被害、②慶長 9(1605).12.16 の津波は波高 5～6m の規模で、船・漁網が被害、③宝永 4(1707).10.4 の津波は 6～7m の規模で、家屋や田畑も呑み込まれ集落跡も残さないほど集落全体に大きな被害があり、常光寺が津波の被害にあい北方の高地に移転、④嘉永 7(1854).11.4-5 の津波は、6～7m の規模の津波で死傷者も多く、家屋や網船・漁具が流失、と報告されている。（なお、嘉永 7(1854).11.5 では熊野浦、伊勢路、堀切にて大きな津波が襲ったと記録されている。）

堀切村は、海食崖が消失し、標高 7m 以下の砂浜が広がり、東の小塩津海岸のように海食崖や岩礁がないため、地引き網が盛んに行われていた。また、砂浜の北側には、標高 4.5m 前後の後背湿地が広がり、江戸時代になって「タノ田」などの新田開発が行われた。堀切村の集落の特徴として、砂浜と後背湿地の間にある標高 4.5～5m の微高地に堀切村の集落は分布しており、地下水にも恵まれ、地形も平坦であったために、自由に最適な場所に宅地を選択できた。こうした自然条件に恵まれた、海岸に面した砂丘上にあった堀切の集落はたびたび大津波の直撃を受けることになった。

堀切では、嘉永 7(1854).11.4-5 での津波における多くの史跡や、言い伝えが残っている。例えば、史跡では、日出村と同様に、いの貝やカキの殻を積み上げ津波よけの堤防を築いた「かいがらぼた」がある。また言い伝えでは、津波から避難する様子や、津波で被害にあい亡くなった人の様子が語り継がれている。

表２―４―１１　堀切の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1498.9.20	明応7.8.25	死者、家屋倒壊	・約6-8mと推定。（東海地方地震・津波災害誌） ・人家倒壊、死者があった。（東海地方地震・津波災害誌）（常光寺年代記）
1586.1.18	天正 13.11.29	津波現象	・『常光寺年代記』には、津波の記録がない。（天正大地震誌） ・津波が発生したとしても、それは堀切付近に被害を与えるほどの津波ではなかったと考えるのが至当ではなかろうか。（天正大地震誌）
1605.2.3	慶長9.12.16	船・漁具破壊	・波高5-6m。（東海地方地震・津波災害誌） ・魚網、船打破らる。（東海地方地震・津波災害誌）
1707.10.28	宝永4.10.4	集落被害、死者、家屋・田畑流失、船・漁具流失	・津高6-7m。（東海地方地震・津波災害誌） ・津波の直撃を受け集落全体が大きな被害にあった。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）） ・郷内全ての村人が城山に逃れ、2日3晩山中で過ごした。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸））（常光寺年代記） ・家屋や田畑も呑み込まれ、集落跡も残さないなどの被害。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）） ・浜辺52km、間漁船悉く流失。民家30余破壊。溺死者1村で1-2人（死者2流死）。（東海地方地震・津波災害誌）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	死者、家屋流失、船・漁具流失	・6-7m。（東海地方地震・津波災害誌） ・堀切村（渥美町）では津波に低地の家が九十軒ほど流され、死傷者も多かった。（地震を冷静に見て書いた、赤羽根村農民の災害記録）（「天地之間　珍事変事書留　万物用心記」（鈴木三十郎）） ・奥郡堀切村凡百二十軒川流津波ニテ尤も人ハ十七八人損シ。（老津村史（村の記録）） ・家屋や網船や漁道具の流失により、不自由な暮らしをした。（渥美半島―郷土理解のための32章―改訂版） ・表浜ハ驚涛ニテ網船等不残流、殊ニ堀切村ナドハ甚々ダ溺死多数アリ。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（西圓寺過去帳）
1854.12.24	嘉永7.11.5	津波現象	・地震の翌日（5日）の夕方、強い余震ののち、西南方角より雷鳴の如き重声が轟いた。その翌日（6日）の日記に、「昨夕之雷ノ如キ声ハ紀州沖ニ大浪三ツ起リ、一ツハ熊野浦へ指シ、一ツハ伊勢路へ指シ、一ツハ田原より五里程有之堀切ト申ス処江打寄口候由飛脚之者田原ニテ承リ候趣」と記するように3波の巨大津波が各地を襲撃する激烈な地震であった。（逐城解説　詳説・吉田城と池田照政 ～ついに判明！吉田城本丸天守（代用）鉄三重櫓の概観全貌とその最期～）（『西村次右衛門日記』豊橋市史々料叢書二・三）
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による神社移転	・宝永4年（1707）の大地震では、太平洋沿岸の村落は大半が流出してしまった。これまでの街道は、修繕できないほどに破壊されてしまった。これを契機に、東観音寺・常光寺などをはじめ多くの寺社や村落が北方の高地に移転した。（常光寺は、天保3～4年（1832～33）にかけて現在地に移された。）（渥美町郷土資料館　研究紀要第2号（加藤克己））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波による集落移転	・安政元年（1854）11 月4 日の大地震と津波で西堀切村233 世帯のうち113 世帯、東堀切村68世帯のうち17 世帯の家が津波によって流されるという大被害を受けた。そのため、当時は現在の国道42 号あたりに住んでいたが、100 メートルほど北側の現在地に集団移転した。（堀切校区まちづくり推進計画書） ・村の復旧にあたっては、浜藪に近い所にあった家は、山裾の高台に移転するものもあり、今でも集落の南側に元屋敷と呼ぶ地所を持つ家がある。（渥美町の民族探訪）（堀切村常光寺の住職が書き留めた記録）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波による史跡	・人家や先祖伝来の田畑を守るために、浜に沿った防潮林の中に波除け堤を長い年月かけて築いてきた。地元（日出地区）では、特産のいの貝やカキの殻をその都度積み上げてきたので、「かいがらぼた」と呼び、昭和30年代くらいまで大事にされてきた。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波による言い伝え	①中村の角左衛門には、9才の源蔵と5才の政平の2人の伜があった。一家は地震のあとの津波を予想し、源蔵に仏壇の本尊様と御先祖の位牌を背負わせ、女房は幼い政平を背に常光寺山に向かって駆け出した。・・・・女房が転んだ時、何気なしに脇の下より浜の方を見ると、山のような高波が押し寄せて来るのが見えたので、もうだめかと目をつぶり観念していると、夫の角左衛門が手を引っ張って起こしてくれたので、無事に避難することができた。一度にどっと押し寄せた津波は、多くの家を壊し沖へ去って行ったが、その引く潮の高さに遮られ沖に浮かぶ神島の島陰が隠れてしまったということである。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（荒木保作氏談、母は政平の娘） ②村に「猫ばあさん」と渾名される猫好きの人がいた。津波が来ると隣家の人にいわれ、山へ逃げようとしたが、あまりの大地震に脅えたのか、可愛い猫が庭の木に駆け上がったまま、いくら呼んでも下りて来ない。それでも猫と一緒に逃げたいと木の下でうろうろしているうちに、大波に巻かれて命を落としてしまった。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（小久保進氏談） ③機織りの得意な女の人が、朝早くから機織（はたご）に向かって一生懸命反物を織っていた。もうすぐ一反織り上げようとした時、天地が鳴動し大地震が起こった。人々は、津波の来ることを感じすぐに常光寺山へ逃げようと誘ったが、もうすぐ織り上がる反物を捨てて行くことに心を引かれ、なんとか仕上げようと再び機織に向かっているうちに、押し寄せた大波に流され家の井戸にはまって溺れ死んでしまった。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（小久保進氏談）
		地形による津波被害の要因	・表浜の海食崖も、伊良湖付近になると次第に高度を下げ、小塩津村以西は砂浜の下に消失する。海食崖が消失した堀切村は、標高4.5-5mの砂浜の微高地に集落が密集している。堀切村では大津波の被害を度々受けていて、宝永地震の巨大な津波では、家屋も田畑も呑み込まれ、集落跡も残さないほどの被害にあった。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸））
		集落の特徴	・小塩津の西にある堀切村では、海食崖が消失し、標高7m以下の砂浜が広がっている。砂浜の北側には、標高4.5m前後の後背湿地が広がっている。砂浜と後背湿地の間にある標高4.5m-5mの微高地に堀切村の集落は分布している。集落の背後に広がる後背湿地は、江戸時代になって「タノ田」などの新田開発が行われた。堀切村は東の小塩津海岸のように海食崖や岩礁がないため、地引き網が盛んに行われていた。しかし、海岸に面した砂丘上にあった堀切の集落はたびたび大津波の直撃を受けることになった。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）） ・堀切村は、地下水にも恵まれ、地形も平坦であったために、自由に最適な場所に宅地を選択できたのである。残存した集落が南端にも存在していたことである。神戸村のような自然影響を受け切迫した集落移動と比べ、堀切の残存する農家は特別な不安を感ずことなく農業に従事しているのである。（田原市博物館　研究紀要第4号（鈴木啓之））

（４）－１　西堀切

西堀切は、嘉永 7(1854).11.4-5 の津波により大きな被害を受けているが、その被害状況は記録により異なっている。堀切村の住民渡会金吾が記録した「前代未聞事」によると、93 家の母家流失、その他を加えると全部で 287 棟の流失という被害にあい、死者 8 人、網船や漁道具などを流失し「其後皆々乞食同様」なくらしをしたとある。また、東堀切村と西堀切村では、両村の役人が連名で天領三河支配の赤坂代官所（東堀切村は天領）や中山村陣屋（西堀切村は旗本清水領の知行地）に助郷免除願い「乍恐以書付奉願上候」を提

出しており、中山村陣屋に提出した文書によると、西堀切村は、総家数 233 の内、流失家数 113、流失棟数 275、半壊家数 90、破損家数 30、死者 8、けが人 60 の被害があり、また、牛・馬 7 匹死亡し、汐除堤や土居敷が残らず欠崩、田畑も一円に土砂が流入し境界もわからず、地引道具、網、船ともに皆流失していると記録されている。さらに、和地村の田中孫六郎が記録した「五月雨噺」では、92 軒流失、内 50 軒程は銘々命助かったが、死人は 8 人いたと報告している。

住民は、津波の襲来のとき城山（常光寺山）へ逃れ、山中に小屋掛けをして不便な仮住まいをしたと報告されている。この時の避難の様子が記録されており、常光寺では米三合の他に粥などを用意、被災者は心から感謝し、「山へ小屋掛け常光寺様で　お粥よばれたいつ忘りょ」と後々まで語り伝えていた。こうした言い伝えもあってか、昭和 19(1944).12.7 の地震においても、城山に避難するなど、当時の避難方法が受け継がれている。その時の津波を伝える史跡としては「西堀切村絵図」があり、東堀切村の浜境から日出村境までの 20 町 37 間の砂浜に墨引きをし「此筋印嘉永七寅年、大津浪ノセツ御引アリ」と、浪害により砂浜が広く欠損していることを描いている。

村の復旧にあたっては、浜藪に近い所にあった家は、山裾の高台に移転するものもあり、今でも集落の南側に元屋敷と呼ぶ地所を持つ家がある。また、田畑一円に砂が入り境界もわからないほどに荒廃した西堀切村の復興がどのくらいの苦労であったかを語ってくれるものはないが、事態が異変であっただけに、旗本清水氏の中山陣屋も理解を示し、協力したものと考えらえる。その一つに、安政 2 年(1855)に提出された助郷免除願いは、安政 3 年(1856)に陣屋より年貢が減免されており、その後公儀への助郷免除願いはなかなか裁許されなかったが、文久 2 年(1862)に提出した助郷免除の嘆願書が聞き届けられ、助郷役は当分の間免除されたと記録されている。

表２―４―１２　西堀切の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	死者、家屋流失、船・漁具流失	・山中に小屋掛けをして不便な仮住まいをしいられた。汐除堤や土居敷が残らず欠崩し、田畑も一円に土砂が流入し、境界もわからなくなった。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤代信幸）） ・11月4日に堀切中村の伊八の嫁、伊平の妻、新助の妻、同村西の喜兵治母、六之右衛門の父、母、妻の8人が溺死。翌5日に、忠右衛門の妻が死亡。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治）） ・堀切村の者が常光寺山にのがれ津波をさけた。（渥美町史　歴史編　上巻『前代未聞事』） ・安政元年の地震・津波被害（西堀切村）：総家数233、流失家数113、流失棟数275棟、半潰家数90、破損家数30、死者8、怪我60、田畑（田畑一円に土砂入、境界もわからず）、その他被害（牛馬七疋死、地引道具・網・船共に皆流失、汐除堤・土居敷欠崩、雑穀、家財などみな流失）。（渥美町史　歴史編　上巻「西堀切村から中山陣屋の志満津式右衛門・太田甚三郎・志満津藤四郎宛に提出した文章」） ・堀切村の者が常光寺山にのがれ津波をさけたが、九十三家の母家の流失、その他を加えると全部で二百八十七棟の流失という被害。死者八人とあり、網船や漁道具など流失した。「其後皆々乞食同様」なくらしをした。（渥美町史　歴史編　上巻『前代未聞事』） ・92軒流失、内50軒程は銘々命助かりて。此時、死人8人。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治）（田中家文書））
1944.12.7	昭和19.12.7	住民避難	・西地区の人達は城山に避難した。堀切村の北に広がる「タノ田」では、液状化現象が見られたという。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波による史跡	【西堀切村絵図】 ・東堀切村の浜境より日出村境までの20町37間の砂浜に墨引きをし、「此筋印嘉永七寅年、大津浪ノセツ御引アリ」と、浪害により砂浜が広く欠損した。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（西堀切村絵図）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波による言い伝え	・堀切村の人々は、津波襲来の時、殆どの者が和名山へ逃げ、村の復旧するまで山に小屋掛けをして不便な仮住まいをしいられた。領主は、被災者救済を中山村陣屋役人に命じ、全壊の家には家族一人に米一升六合、半壊の家には一人米八合、浸水の家には、二～四升を与えた。また、菩提寺である常光寺も、米三合の他に粥などを用意した。被災者にとって毎日寺より施される食べ物には、心から感謝し、「山へ小屋掛け常光寺様で　お粥よばれたいつ忘りょ」と後々まで語り伝えていた。村の復旧にあたっては、浜藪に近い所にあった家は、山裾の高台に移転するものもあり、今でも集落の南側に元屋敷と呼ぶ地所を持つ家がある。（渥美町の民族探訪）（堀切村常光寺の住職が書き留めた記録）
1854.12.23以降	嘉永7.11.4-5以降	集落の特徴	・村の復旧にあたっては、浜藪に近い所にあった家は、山裾の高台に移転するものもあり、今でも集落の南側に元屋敷と呼ぶ地所を持つ家がある。（渥美町の民族探訪）（堀切村常光寺の住職が書き留めた記録） ・田畑一円に砂入りとなり境界もわからないほどに荒廃した西堀切村の復興がどれくらいの苦労であったかを語ってくれるものはないが、事態が異変であっただけに、旗本清水氏の中山陣屋も理解を示し、協力したものと考えられる。（渥美町史　歴史編　上巻） ・安政2年(1855)2月、東堀切村名主卯平、西堀切村名主政右衛門等両村の役人が連名で、天領三河支配の赤坂代官所へ嘆願書を差し出した。この時の助郷免除願いはすぐには聞き届けられず、翌安政3年(1856)4月に陣屋より渡された「卯歳(安政2)御物成小物皆済目録」に、年貢が免除されているが、公儀への助郷免除願いはなかなか裁許されなかった。文久2年(1862)正月、東・西堀切村は再び助郷免除の嘆願書を差し出した。今度は直ちに聞き届けられ、助郷役は当分の間免除されることになった。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））

（４）－２　東堀切

東堀切村では、嘉永 7(1854).11.4-5 の津波で被害に遭っている。中山陣屋に提出した助郷免除願い「乍恐以書付奉願上候」によると、総家数 68、流失家数 4、流失同様の家数 13、流失棟数約 40 棟の被害にあっている。死亡者は記録されていないが、田畑に石砂が入り、地引網・船皆流失し、汐除堤・土居敷残らず欠崩れており、また住民は津波襲来のとき、御林山（後山、馬越山）[5]に逃れたと報告されている。なお、昭和 19(1944).12.7 の地震においては、堀切国民学校（堀切町出口）方面に避難したと記録されている。

東堀切村は、文久 2 年(1862)に西堀切村と共に提出した助郷免除の嘆願書が聞き届けられ、助郷役は当分の間免除されることとなった。東堀切村は助郷免除だけでなく、嘉永 7(1854).11.4-5 の津波被害により無利息の 5 か年年賦で 70 両を拝借している。東堀切村は、西堀切村と同様、漁業の盛んな村で、堀切以西から白砂の海浜を形成して地引網漁の適地になっていた。津波被害後、住居をもち、網・船を入手し、村中一同が申し合わせ石砂入りの田畑を起返した。乞食同様のくらしの中から立ちなおるのに大変だったことが想像できる。

表２―４―１３　東堀切の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	家屋流失、船・漁具流失	東堀切：天領 ・安政元年の地震・津波被害（東堀切村）：総家数68、流失家数4（流失同様13）、流失棟数約40棟、田畑（田畑石砂入）、その他被害（地引網・船皆流失、汐除堤・土居敷残らず欠崩）。（渥美町史　歴史編　上巻「西堀切村から中山陣屋の志満津式右衛門・太田甚三郎・志満津籐四郎宛に提出した文章」） ・東堀切村、小塩津村の人たちは御林山にのがれた。（渥美町史　歴史編　上巻『前代未聞事』）
1944.12.7	昭和19.12.7	住民避難	・東地区の人は堀切国民学校方面に避難した。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸））
1854.12.23-24以降	嘉永7.11.4-5以降	集落の特徴	【1854.12.23（嘉永7.11.4）】 ・東堀切村は無利息の五か年年賦で七十両を拝借した。同じ支配所の村々からとあるから幕府直轄領の村々からということになる。住居をもち、網・船を入手し、村中一同が申し合わせ石砂入りの田畑を起返した。乞食同様のくらしの中から立ちなおるのに大変だったことが想像できる。（渥美町史　歴史編　上巻） 【集落の特徴】 ・東・西堀切村は、漁業の盛んな村であった。東方和地一色までで海岸断崖や岩礁が切れ、堀切に至って白砂の海浜を形成し地引網の適地になっていたためであろう。（渥美町史　歴史編　上巻）

（５）小塩津・和地・越戸

小塩津・和地・越戸は、津波の被害の大きい池尻と堀切の間にある地域であるが、この地域は標高 10m以上の断崖絶壁の海食崖が連続しており、江戸時代には、海食崖の上の台地に集落が立地していたとされている。

当地域では、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が記録されており、浜辺においてあった網や船などの漁具の流失が主な被害として記録されている一方、住民が避難したり、一部家屋が流失する被害も報告されている。この理由に、高松以西の地域は海食崖も低く浸食谷も小規模であり、集落と海岸との距離が近接していることが要因と考えられ、特に和地では川尻川の河口付近にあった集落が津波の被害を受けている。

[5] 渥美町史　歴史編　上巻に「御林（領主直轄の林）は、後山に二十町八反、馬越山に八町四反ほどある」と記されていることから、「御林山」は「後山」と「馬越山」を指すと思われる。

表２―４―１４　小塩津・和地・越戸の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	家屋流失、船・漁具流失	・地震による津波の記録あり（小塩津、和地、越戸）。船流失、漁具流失が主であるが、和地の川尻地区において家屋流失の被害あり。（収新日本地震史料第五巻別巻五ノ一（五月雨噺し）等）
1707.10.28	宝永4.10.4	地形による津波被害の要因	・六連村から小塩津村にかけては、標高60-10mの断崖絶壁の海食崖が、西方に少しずつ高度を下げながら連続する。砂浜が狭いので、波浪浸食を受けやすく、海岸線も年1mくらいの割合で後退してきた。記録によると、1320年に谷熊村から移住した14軒が、六連海岸の開折谷の水田を耕作し漁業に従事していた。これが「浜田」の地名の起源となったが、海食崖の激しい波浪浸食により海岸沿いの集落は、早い時期に消滅している。江戸時代には、海食崖の上の台地に集落が立地していた。このため、宝永地震では、大津波による集落の被害はなく、浜辺においてあった網や船などの漁具の流出が主な被害として記録された。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸））

（５）－１　小塩津

小塩津は、江戸時代地引網漁が盛んであったが、嘉永 7(1854).11.4-5 に波高 6～8m の津波により、浜道具が残らず流失し、船 7 隻中 3 隻大破、4 隻流失したと記録されている。また、大磯が白砂になり、住民は御林山（後山、馬越山）にのがれたといわれている。

小塩津は、その昔難崎（越津）と呼ばれていた頃には、磯岩が沖合はるか湾曲して続き入江となり、波も静かに風光もよく伊勢へ渡る舟にとっては喜ばれる港であり、よい港町であったと言われているが、天長 4(827).7.13 にこの地方に大地震が起こって越津の海岸は大陥没、家並も半分過ぎ海底に沈み、北へ避難した人が地名も今の小塩津と改め、この時正福寺も日吉神社も一緒に移ったものと伝えられている。

表２―４―１５　小塩津の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波現象、避難	・波高6-8m。（東海地方地震・津波災害誌）（下永良陣屋日記） ・堀切村、小塩津村の人たちは御林山にのがれた。（渥美町史　歴史編　上巻）（前代未聞事） ・小塩津村大磯、白砂に相成。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（田中家文書）
		船・漁具流失	・浜道具残らず流失、船7隻中3隻大破、4隻流失。（下永良陣屋日記）（東海地方地震・津波災害誌）
827	天長4.7.13	津波による伝承	・その昔小塩津が難崎と呼ばれていた頃には、磯岩が沖合はるか湾曲して続き入江となり、波も静かに風光もよく、伊勢へ渡る舟にとって喜ばれる港だったそうです。戸数も三百、よい港街であったと思われます。大宝二年持統上皇がこの地方を御巡幸の砌りこの海岸の眺が大変お気に召したとも伝えられ、その時の御言葉により日吉神社が勧進され村の名も越津と改めたと伝えられています。天長四年（827）七月十三日この地方に大地震が起こって越津の海岸は大陥没、美しく湾曲していた磯岩も賑やかだった家並も半分過ぎ海底に沈んでしまいました。危く難を免れた人たちは北へ避難して地名も今の小塩津と改めたと伝えられています。正福寺も日吉神社もまたこの時今の地に移ったそうです。（渥美町の伝説）（小塩津日吉神社の由緒より）

（５）－２　和地・越戸

和地・越戸は、田原藩領内でも漁獲収益の高い地域に位置づけられ、主に漁具地曳網が盛んであったが、嘉永 7(1854).11.4-5 の津波で、和地では船 3 隻流失、9 隻大損、その他漁具流失、越戸では船 3 隻流失、漁具流失するなど大きな被害を受けている。

また、和地では、嘉永 7(1854).11.4-5 の津波で家居その他海辺の田畑までも押し流し、特に川尻にて 3 軒流砕したとの記録がある。住民からのヒアリングでは、川尻川の河口部にある川尻の集落は、以前は海岸沿いに元屋敷があったが、嘉永 7(1854).11.4-5 の津波が川尻川から浸入、2～3 件の家屋が流失し、その影響で現在の国道 42 号沿いに移転したとの言い伝えがある。

なお、平成 23(2011).3.11 の津波では、30 分間に 2m 潮が上がってきたが、当時干潮時であったため、被害はなかったという住民からの証言もある。

表２―４―１６　和地・越戸の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	家屋流失、田畑浸水、船流失（和地）	・和地村しょほしと号す磯等も白砂に相成。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（田中家文書） ・大震災にて、所々家居打倒大騒動致す所に不寄存大津波打寄家居其他海辺は田畑迄も押流し、誠にかかる天災前代未聞。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（田中家文書） ・大津波打寄、和地村にては川尻にて三軒流砕致し、和地村にて小船磯船五拾艘程流失。（収新日本地震史料第五巻別巻五ノ一（五月雨噺し））
		船・漁具流失（和地）	・和地村：船三艘流失、同九艘大損シ、櫓弐拾梃流失、袋六ツ流失、同七ツ大損シ、網壱帖分流失、同拾壱帖分大損、諸道具拾弐帖分流失、櫓六梃損シ（〆　右者上田村ら一色※（迄）網数拾弐帖分流失損し候）。（表浜八ヶ村漁船流失損〆出し調恍）（岡田与次右衛門）
		船・漁具流失（越戸）	・越戸村：船壱隻流失、揚操舟壱隻流失、瀬取舟一隻流失、網六帖流失、ろくろ網四拾枚流失、袋三ツ流失、櫓九梃流失、碇壱頭流失、揚操網弐帖分緒道具共流失。（表浜八ヶ村漁船流失損〆出し調恍）（岡田与次右衛門）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波についての言い伝え（川尻）	・和地町の川尻には、川尻川が太平洋岸に流れ込んでいる場所がある。川尻の集落は現在は国道42号線沿いに住んでいるが、以前は違う場所にあり、海岸沿いに元屋敷がある。元屋敷には、対馬神社があり、安政のときに2～3件くらい流されたといういいつたえがある。元屋敷付近は海岸の崖が10mくらいであるが、元屋敷は8mくらいのため、安政の津波が川尻川沿いに入ってきて被害をうけたので、元屋敷から42号線沿いに集落移転した。なお火事で移転したといういいつたえもある。記録として、昭和15年くらいに書いた村の書物があり、津波でみんな山ににげたという記録がある。（川尻地区住民より聞き取り）
2011.3.11	平成23.3.11	住民証言（川尻）	・東日本大震災の時は、4時まで郷土資料館におり、そこから川尻に帰ってみていたが、30分間に2mあがっていた。ちょうど5月の最満潮と12月1月（夜11時12時）の最干潮との差くらいに潮が30分くらいであがってきた。当時4時半くらいが干潮だったためよかったが、満潮のときにきたらまずかったと思う。（川尻地区住民より聞き取り）

（６）赤羽根・池尻・若見・一色

赤羽根～若見海岸では、標高 20～30m の海食崖が東西に続き、海食崖付近の平坦な台地の上に、赤羽根・池尻・若見の各集落が立地している。赤羽根村西と池尻の間は、海食崖や台地が切れ、太平洋に向かって池尻川や精進川が流れ出ており、この池尻川のような比較的広い流域を持つ河川は、渥美半島の太平洋岸には存在しない。

こうした地形条件をもつ当地域では、元禄 16(1703).11.23 から 11 回の地震による津波が記録される。そのうち被害がある津波は次の 4 回であり、①元禄 16(1703).11.23 の津波では、船が多く流出、②宝永 4(1707).10.4 の津波では、家屋流失、漁具流失、③嘉永 7(1854).11.4-5 の津波では、死者、家屋流失、漁船流失、④平成 23(2011).3.11 の津波では漁船廃船の被害が記録されている。

特に、宝永 4(1707).10.4 と嘉永 7(1854).11.4-5 の地震によって、太平洋に流れ出す池尻川では、河口から遡上してきた大津波により、河口付近の低地にあった池尻の一部の民家が流失している。この地域は海食崖も低く浸食谷も小規模であり、集落と海岸との距離が近接し、東隣の高松とは異なっていたことも要因と考えられる。

表２―４―１７　赤羽根・池尻・若見・一色の津波被害記録（１）

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1703.12.31	元禄16.11.23	船・漁具流出	・漁舟多く流さる。（赤羽根町史）
1707.10.28	宝永4.10.4	民家流出、漁具流出	・池尻、赤羽根にて地震による津波の記録あり。池尻に6-7mの津波が襲来し民家流出、赤羽根にて浜道具流出。（研究輯録　三遠の民俗と歴史）（東海地方地震･津波災害誌）（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	家屋流失、船・漁具流失	・波の高さ6-10m。（東海地方地震･津波災害誌） ・ひる四ツ時大地震、九ツ時津波、八ツ半時までにおだやかになる。（赤羽根町史）（村記録その他） ・若見、池尻、赤羽根、一色にて地震による津波の記録あり。若見・池尻・赤羽根では池尻川河口部にて家屋の流失の被害や、船・漁具流失の被害あり。（赤羽根宮本家古文書、等）
1854.12.24	嘉永7.11.5	津波現象、被害なし	・七ツ時過ぎ又々地震ゆり尤も格別大キニは無之少々ゆり候七ツ半時雷の如く鳴物聞へ申の方より未ノ方ニ鳴渡り何れ入にて鳴り候様に聞へ候。此時大阪表へ大津波打上げ人数多く死す。今日の津波は当所に至りては軽し。（研究輯録　三遠の民俗と歴史）（鈴木三十郎文書（天地の間珍事変事書留）、及び庄屋文書）
1855	安政2.2.1	津波現象、被害なし	・七ツ時前※（より）七ツ半時迄三度地じん。海辺汐ハ増し候。（赤羽根の古文書　近世史料編）（天地之間　珍事変事書留　万物用心記（鈴木三十郎））
1855	安政2.3	津波現象、被害なし	・間々ニ地じんあり。海汐ハまし候。（赤羽根の古文書　近世史料編）（天地之間　珍事変事書留　万物用心記（鈴木三十郎））
1855	安政2.6.16	津波現象、被害なし	・八ツ時頃ニ地しん少々ゆり候。度々海汐ハまし候。（赤羽根の古文書　近世史料編）（天地之間　珍事変事書留　万物用心記（鈴木三十郎））
1855.11.7	安政2.9.28	津波現象、被害なし	・先ズ此度は大地しんでもゆり候間みじかく候故か津波もナク家蔵ノ破損去年よりは大に少し、乍併下浜辺津波の気味合あり、余程高汐揚り。（研究輯録　三遠の民俗と歴史）（鈴木三十郎文書（天地の間珍事変事書留）、及び庄屋文書）
1944.12.7	昭和19.12.7	津波現象、被害なし	・波の高さ1.5m。（東海地方地震･津波災害誌） ・潮の高さは数十cmから1m程度。（東海地方地震･津波災害誌） ・津波による被害はなかった。（田原市博物館　研究紀要第4号（藤城信幸）） ・赤羽根にて若宮八幡社現在地付近で津波の被害の記録あり。（田原の文化第33号（石井一希））
2010.2.28	平成22.2.28	津波現象、被害なし	・赤羽根漁港では午後3時14分に30センチの第1波が到達、最大は同4時37分に70センチが観測。（東日新聞（2010.3.1））

表２―４―１７　赤羽根・池尻・若見・一色の津波被害記録（２）

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
2011.3.11	平成23.3.11	船浸水（廃船）	・田原市では午後4時54分、太平洋に面した赤羽根漁港で高さ1.1メートルの津波を観測した。同5時32分、同漁港でさらに大きな高さ1.6メートルの津波を観測した。（東愛知新聞（2011.3.12）） ・1.6メートルの津波を観測した愛知県田原市の赤羽根漁港では漁船2隻が転覆、12日は愛知外海漁協組合員が引き揚げ作業に追われた。（東愛知新聞（2011.3.13））
		地形による津波被害の要因	・赤羽根～若見海岸では、標高30-20mの海食崖が東西に続き、海食崖付近の平坦な台地の上に、赤羽根・池尻・若見の各集落が立地している。赤羽根村西と池尻の間は、海食崖や台地が切れ、太平洋に向かって池尻川や精進川が流れ出ている。豊橋市の太平洋岸には、海食崖の開折谷を流れる長さ1kmにも満たない小河川はあっても、この池尻川のような比較的広い流域を持つ河川は、渥美半島の太平洋岸には存在しない。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）） ・高松以西は、海食崖も低く浸食谷も小規模であり、集落と海岸との距離が近接している。（田原市博物館　研究紀要第4号（鈴木啓之））

（６）－１　池尻・若見

池尻川西の池尻・若見では、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震による津波が記録されている。

宝永 4(1707).10.4 では、波高 6～7m の津波が池尻川・精進川を遡上した。当時、池尻では、海食崖背後の標高 5～20m ほどの北斜面上に立地し、精進川下流部の標高 5m 以下の辺りまで民家が建っていた。このため、標高の低い「赤羽根池尻の川筋の村が大破する」など、池尻では河口部にあった民家が津波によって大きな被害を受けている。

嘉永 7(1854).11.4-5 では、波高 6～10m の津波があり、500m くらい海水が引いてから池尻川の支流精進川を遡上し、付近の下り部落（池尻）では床上浸水の被害がでている。池尻では住民が所々死亡し、人は皆野宿したとされ、漁船・漁具も流出している。また、若見では、船 11 隻、小型船 2 隻が大損し、漁具も多く流失するなどの被害がでており、池尻川河口に近い地に鎮座していた弁天社は津波により流失している。

表２―４―１８　池尻・若見の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	家屋流出（池尻）	・津高6-7m。（東海地方地震・津波災害誌） ・池尻川に津波襲来し被害が大きかった。（東海地方地震・津波災害誌） ・河口付近の低地にあった池尻村の一部の民家が流出した。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸）） ・池尻川の河口部にも波高6-7mの津波が襲来し、池尻川や精進川を遡上した。このため、標高の低い「赤羽根池尻の川筋の村が大破する」など、河口部にあった民家が津波によって大きな被害を受けたのである。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤代信幸））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	家屋浸水、船・漁具流出（池尻）	・6-10m。（東海地方地震・津波災害誌） ・津波は500mくらい海水が引いてからきて池尻川の支流精進川を遡上り、付近の下り部落（池尻）では床上浸水して被害を与え、前古田まで浸入した。（東海地方地震・津波災害誌）（赤羽根宮本家文書）（赤羽根町史） ・池尻下りひくみの家ハゆか上迄余汐上り。（赤羽根の古文書　近世史料編）（神祇最上御神前家寶書記） ・人所々にてしす。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（渥美家文書） ・一度ニドツト押寄セ来リ池尻川ヲ溯リテ非常ニ侵入シ、漁舟ハ漂流シ漁網類ノ樹上ニカカレルアリ。（赤羽根の古文書　近代史料編）（高松長谷川家記録） ・カレイ、ヒラメ、舌ヒラメ等ノ魚類ハセ上リテ沢山拾ヒタル者アリ。（赤羽根の古文書　近代史料編）（高松長谷川家記録） ・家の内に魚あり、おほべに2斗づきのうす上がる。皆人野宿す。（東海地方地震・津波災害誌）（彦坂弥太郎、渥美重儀）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	家屋浸水、神社流失、船・漁具流失（若見）	・若見村の弁天社は池尻川河口に近い地に鎮座していたこともあり、嘉永7年11月の地震（安政の東海地震）の際、同地を襲った津波により流出の難に遭っている。（田原の文化第33号（石井一希））（赤羽根の古文書　近世史料編）（神祇最上御神前家寶書記） ・津波は500mくらい海水が引いてからきて池尻川の支流精進川を遡上り、付近の下り部落（池尻）では床上浸水して被害を与え、前古田まで浸入した。辨天社（高さ10m）が高波で流失した。（東海地方地震・津波災害誌）（赤羽根宮本家文書）（赤羽根町史） ・若見村：舟拾壱隻大損シ、小操船二隻大損シ、櫓拾壱梃流失、同八梃打、大目網九枚流失、同七拾弐枚切之、袋三ツ流失、同四ツ　切之、小目網拾帖流失共切之。（岡田与次右衛門「表浜八ヶ村漁船流失損〆出し調恍」）

（６）－２　赤羽根・一色

池尻川東の赤羽根・一色は、宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震による津波が記録されている。

宝永 4(1707).10.4 では、大津波で浜道具流れたとの記録がある。赤羽根地域は、古文書や古老の話でも、近世（江戸時代）以降の集落移動を示す元屋敷などの記録や話は、あまり確認されていない。赤羽根は、標高 25m ほどの平坦な台地上に立地していたと思われる

ため、集落への津波被害は報告されていないと推測される。

嘉永 7(1854).11.4-5 では、高さ 6～10m の津波が三度打寄せ、赤羽根では船はくだけ網道具はこなみじんに破れるとの記録がある。赤羽根 3 集落のうち、赤羽根中村と東村は、計 11 隻の船が大破し、漁具も多く流失する被害がでている。一方、池尻川の河口部付近にある赤羽根西村では、船や漁具の流失は少ないが、現在の若宮八幡社付近が津波を受けたほか、池尻川から潮が入り村方の茂川渡り場まで潮があがるなど、内陸側まで被害が及んだことが推測される。

また、一色では、嘉永 7(1854).11.4-5 の津波で、大磯が砂浜にある岩に見えてしまう程沖合にまで海が引いたとの言い伝えもある。

表２―４―１９　赤羽根・一色の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	浜道具流出（赤羽根）	・当所も大地震跡大津波。（研究輯録　三遠の民俗と歴史）（鈴木三十郎文書（天地の間珍事変事書留）、及び庄屋文書） ・高汐にて浜道具流れ候。（研究輯録　三遠の民俗と歴史）（鈴木三十郎文書（天地の間珍事変事書留）、及び庄屋文書）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	家屋被害、船・漁具流失（赤羽根）	・波の高さ6-10m。（東海地方地震・津波災害誌） ・ひる四ツ時大地震、九ツ時津波、八ツ半時までにおだやかになる。（赤羽根町史）（村記録その他） ・津波が三度来て、浜に置いてあった漁の道具や網袋が残らず流された。船は割れたり傷ついたりしたが浜に残っていた。無傷で使用可能な船もあった。津波のとき、池尻川から潮が入り込み、村方の茂川渡り場まで潮が揚がった。（地震を冷静に見て書いた、赤羽根村農民の災害記録）（天地之間　珍事変事書留　万物用心記（鈴木三十郎）） ・船はくだけ網道具はこなみじんに破れる。（研究輯録　三遠の民俗と歴史）（赤羽根町史（天変地異等の記録の部）） ・若宮八幡社現在地付近は、嘉永7年（安政元年：1854）の東海・南海地震の際津波を受けている。（田原の文化第33号（石井一希））（赤羽根の古文書　近世史料編）（赤羽根西村の商人宮田三郎兵衛「年代附留覚」） ・赤羽根中村：船三隻大破、櫓弐梃流失、同壱梃損し、大目網拾八枚流失、同三拾二枚流失、同九拾八枚大破、脇網半帖流失、同　五拾四帖大破、袋壱ツ流失、同九ツ大破。（岡田与次右衛門「表浜八ヶ村漁船流失損〆出し調恍」） ・赤羽根西村：大目網七拾弐枚流失、脇網五帖流失、同弐帖大破、櫓三梃流失、袋壱ツ流失。（岡田与次右衛門「表浜八ヶ村漁船流失損〆出し調恍」） ・赤羽根東村：船八隻大破、櫓壱梃流失、同壱梃損し、脇網三帖流失、同拾帖大破、大目網七拾四枚流失、袋壱ツ流失、同十大破。（岡田与次右衛門「表浜八ヶ村漁船流失損〆出し調恍」）
1944.12.7	昭和19.12.7	神社浸水	・若宮八幡社現在地付近は、嘉永7年（安政元年：1854）の東海・南海地震の際津波を受けている。（田原の文化第33号（石井一希））（赤羽根町の鈴木孫市氏の体験談（「ほの国通信15号」（東三河地方拠点都市地域整備協議会　2003）））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波による言い伝え（一色）	・津波の前触れとして常時は海上にある一色の大磯が、砂浜にある岩に見えてしまう程沖合いにまで海が引いたとの老人の談が見られる。（赤羽根の古文書　近世史料編）（長谷川家記録）

（６）－３　赤羽根漁港

池尻川河口部の赤羽根漁港は、昭和 27(1952).11.11 に県内唯一の第 4 種漁港に指定され、昭和 28 年度(1953 年度)の第一次漁港整備長期計画により工事に着手し、現在は愛知県管理漁港として、航路や泊地の浚渫、浸食対策としての離岸堤の整備を行っている。赤羽根漁港では、平成 22(2010).2.28 に 70cm の津波、平成 23(2011).3.11 に 1.6mの津波が記録されている。

平成 22(2010).2.28 の津波では、被害こそなかったが、70 代の男性が「満潮に向かっているのに、潮位が急激に下がった。漁を 30 年以上していてはじめて」と感想を述べている。平成 23(2011).3.11 の津波では、1.6m と 1.1m の津波が観測され、また引き潮で水位が 2m 半も下がり漁港一帯の海底が露呈するほどであった。この津波で 2 隻の船が転覆し廃船となった。同漁港を管理する愛知県外海漁協の吉武組合長は「決して港湾施設や繋留法に不備があって起きた転覆事故ではない。津波は本当に怖ろしい」と発言しているなど、1m ほどの津波でも大きな危険が生じることを伝えている。

表２―４―２０　赤羽根漁港の津波被害記録（１）

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
2010.2.28	平成22.2.28	津波現象	・赤羽根漁港では同3時14分に30センチの第1波が到達、最大は同4時37分に70センチが観測。（東日新聞（2010.3.1）） ・津波警報が発令されたのを受け同漁港では朝から対応に追われた。約170隻の漁船がロープなどで結ばれ、沖合に避難したのは6隻だった。漁業組合側は「前日が時化（しけ）で操業できなかったためにこのような措置をとった」と話した。午後5時ごろ、満潮が近づく同漁港には、多くの関係者が潮位の上下を見守った。津波が近づくと、潮位は50センチ以上下げ、関係者を不安がらせた。だが、その後はじわじわと潮位が上昇しただけで混乱はなかった。（東日新聞（2010.3.1）） ・愛知県田原市の赤羽根漁港では、七十代の男性が「満潮に向っているのに潮位が急激に下がった。漁を三十年以上していて初めて」と驚いた。（中日新聞（2010.3.1））

表２―４―２０　赤羽根漁港の津波被害記録（２）

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
2011.3.11	平成23.3.11	船浸水（廃船）	・田原市では午後4時54分、太平洋に面した赤羽根漁港で高さ1.1メートルの津波を観測した。同5時32分、同漁港でさらに大きな高さ1.6メートルの津波を観測した。（東愛知新聞（2011.3.12）） ・津波の威力はすさまじく、午後4時半すぎ第一波で水位が1メートルほど上昇すると、今度は急激に引き出し、同5時過ぎには水位は2メートル半も下がり、漁港一帯の海底が露呈するほど。漁協事務所の岸壁に停泊中のシラス漁船は大きく傾いた。続いて、津波の第二波が湾内へ。水位はあっという間に再上昇し、関係者は停泊中のシラス漁船18隻、釣り船4隻を急いで沖へ避難させた。さらに同6時20分頃には再度の引き波で荷揚げ用の浮き浅橋が沈降。通常平らなタラップだが、桟橋側が2メートルほど落ち込んだ。（東愛知新聞（2011.3.12）） ・最初の転覆は11日午後8時ごろ。一本釣り漁船（約3トン）が押し寄せた津波が岸壁にぶつかり、激しい勢いで引く波によって横転させられた。第2の転覆は12日午後8時、漁港を見回りに来た関係者が見つけた。被害にあったのは小型刺網漁船（約0.5トン）。転覆の原因はわかっていないが、船首が桟橋下部の溝に引っかかっていたことから、津波が激しい勢いで引いた瞬間、湾内の水位が極端に下がった結果とみられる。 両船とも海水に浸かったせいで電気系統がだめになった。廃船にするという。関係者は「昨年2月のチリ地震では70センチの津波に襲われたものの、被害はなかった。今回は1メートル以上の津波が2回（1.6メートルと1.2メートル）も襲った。あらためて津波の怖ろしさを知った」と口をそろえた。同漁港を管理する愛知県外海漁協の吉武正康組合長は「決して港湾施設や繋留法に不備があって起きた転覆事故ではない。津波は本当に怖ろしい」とくちびるを噛みしめた。（東愛知新聞（2011.3.13））|

（７）高松・大草・神戸・六連

高松・大草・神戸・六連は、標高 10～60m の断崖状の海食崖が西方に少しずつ高度を下げながら連続し、砂浜が狭いため、波浪海食を受けやすく、海岸線も年 1m くらいの割合で後退してきた。記録では元応 2 年(1320)に谷熊村から移住した 14 軒が、六連海岸の開折谷の水田を耕作し漁業に従事していたが、早い時期に消滅したとされ、江戸時代には海食崖の上の台地に集落が立地していた。

当地域では宝永 4(1707).10.4、嘉永 7(1854).11.4-5、安政 2(1855).9.28 の地震で津波が記録されている。記録では浜辺においてあった網や船などの漁具の流失が主な被害としているが、集落の被害の記録がないことが他の太平洋岸の集落と異なっている。

この理由に、当地域は、他の太平洋岸の集落と同様に、地引網が主体であったが、集落は浜辺では生活用水や農業用水が容易に得られないこと、さらに背後の台地は浸食谷が深く入り自然条件が厳しいことが重なり、集落は海岸との距離が離れた背後の台地に立地していた。このことが、集落への津波被害に繋がっていないのではないかと推測される。

表２―４―２１　高松・大草・神戸・六連の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	漁具流出	・高松にて地震による津波の記録あり。あみ、舟残らず流れる。（金五郎文書「歳代覚書」）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	漁具流失	・高松・大草・神戸・六連にて地震による津波の記録あり。漁具流失。（岡田与次右衛門「表浜八ヶ村漁船流失損〆出し調帳」、等）
1855.11.7	安政2.9.28	漁具流失	・大草・神戸にて地震による津波の記録あり。漁具流失。（研究輯録　三遠の民俗と歴史）
		地形による津波被害の要因	・六連村から小塩津村にかけては、標高10-60mの断崖絶壁の海食崖が、西方に少しずつ高度を下げながら連続する。砂浜が狭いので、波浪浸食を受けやすく、海岸線も年1mくらいの割合で後退してきた。記録によると、1320年に谷熊村から移住した14軒が、六連海岸の開折谷の水田を耕作し漁業に従事していた。これが「浜田」の地名の起源となったが、海食崖の激しい波浪浸食により海岸沿いの集落は、早い時期に消滅している。江戸時代には、海食崖の上の台地に集落が立地していた。このため、宝永地震では、大津波による集落の被害はなく、浜辺においてあった網や船などの漁具の流出が主な被害として記録された。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸））
		集落の特徴	・表浜では、江戸時代以降から明治中期まで、地引き網が主体であった。神戸小学校の沿革史に、「大字南神戸・東神戸・大字大草、一部海岸ノ人民ハ漁業ヲ以テ本業トシ、・・・略・・・」とあることからも理解できる。（田原市博物館　研究紀要第4号（鈴木啓之）） ・高松以東は、浸食谷が深く入っているため、海岸から集落までの距離が漸次大きくなる。（田原市博物館　研究紀要第4号（鈴木啓之））

（７）－１　高松

高松では、宝永 4(1707).10.4 と嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が記録されている。宝永 4(1707).10.4 では、高松など常より 5 丈[6](約 15m)程高く津波上り、ほうべ低い所は越え、網、船残らず流れると記録されているが、集落への被害は報告されていない。

なお、高松にある八柱神社は、旧来は「宮沢」（場所不明）にあったとされるが、宝永 4(1707).10.4 の地震により、社寺の多くが崩壊したため、2 年後に比呂古山（現在の広子

[6] 1 丈は約 3m

村）へ移転したとされている（津波の影響かは不明）。

表２―４―２２　高松の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	船・漁具流出	・常より五丈（1丈3mとして約15m）程高。（野田史）（金五郎文書「歳代覚書」） ・ほうべの低い所を越えてしまった。（田原市博物館　研究紀要第3号（藤城信幸））（金五郎文書「歳代覚書」） ・あみ、舟残らず流れる。（金五郎文書「歳代覚書」）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	船・漁具流失	・（高松）高松村沖に鯛の嶋と号す磯有之趣、此時迄は咄しのように承居候処、此嶋三つ迄相見へ候由、此嶋迄は凡二里程も有之よし。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（田中家文書） ・高松村：船八隻流失、櫓三拾五梃流失、脇網拾弐梃流失、洞網百六拾壱枚流失、袋拾壱流失、小操網船諸道具入不残流失。（岡田与次右衛門「表浜八ヶ村漁船流失損〆出し調恍」）
1707.10.28	宝永4.10.4	津波による神社移転	【1707.10.2（宝永4.10.4）】 ・八柱神社は、旧来は「宮沢」にあったとされる。そして宝永4年（1707）10月4日に発生した地震（宝永の東海地震）により、社地の多くが崩壊したため、2年後の宝永6年に比呂古山へと移転したとされる。・・・移転先の「比呂子山」は現在八柱神社が鎮座する「広子村」のことと考えられるが、旧地を示す「宮沢」は現在の地名にはみられない。「田原藩日記類」にも、移転以前の同社の様子を伝える記録は確認できない。（田原の文化第33号（石井一希））（稿本「村誌五」内「當社由緒記」）

（７）－２　大草

大草では、嘉永 7(1854).11.4-5 と安政 2(1855).9.28 の地震で津波が記録されている。嘉永 7(1854).11.4-5 では、船 1 隻流失するほか、漁具が流失している。安政 2(1855).9.28 では、津波はなかったが、高潮により浜道具が多く流れたとの記録がある。なお、集落への被害は報告されていない。

表２―４―２３　大草の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	船・漁具流失	・大草村：船壱隻流失、袋五ツ半流失、洞網二拾七流失、脇網三帖流失、碇壱頭流失、櫓三梃流失。（岡田与次右衛門「表浜八ヶ村漁船流失損〆出し調恍」）
1855.11.7	安政2.9.28	船・漁具流失	・（大草）大草村にて流し候網、高松神井浜迄流れ候位の事。（研究輯録　三遠の民俗と歴史）（鈴木三十郎文書（天地の間珍事変事書留）、及び庄屋文書） ・津波は無之候え共、大草村より下りは高汐にて浜道具多く流れ候。（研究輯録　三遠の民俗と歴史）（宮田三郎兵衛文書（年代諸事附留））

（７）－３　神戸

神戸では、嘉永 7(1854).11.4-5 と安政 2(1855).9.28 の地震で津波が記録されている。嘉永 7(1854).11.4-5 では、東西より大津波があり、海面 20 丁[7]（約 2.2km）位潮干になり、崖等が欠け（山崩れ）、6、7 合（3.6m～4.2m）まで海になり、住民は食物を持って高い所に逃れたと報告されている。安政 2(1855).9.28 では、潮が高く上がり、谷ノ口浦では崖下から八尺（約 2.4m）位打ち付け、船・網が流れたとあるが、集落の被害は報告されていない。

表２―４―２４　神戸の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	津波現象、住民避難	・海面大いに轟き、一見すれば、南大崎より大山の如き大ツナミ、東の方より同ク大ツナミ、其の前凡そ海面二十丁位潮干となり、然る所東西より斜に大ツナミ寄来り、欠六、七合迄海となる、是をツナミと言ふ　此の時に当り人民恐怖し、食物を荷い、土地高き所へ逃行。（収新日本地震史料　第五巻　別巻五ノ一）（神戸村庄屋日記（鈴木佐平太））
1855.11.7	安政2.9.28	船・漁具流出	・津波の気味合あり、余程高汐揚り。谷ノ口浦にてはガケ下へ八尺位も打付ケ候、汐登り候様子網丈ケは船流し候え共、遠く流れ行不致。（研究輯録　三遠の民俗と歴史）（鈴木三十郎文書（天地の間珍事変事書留）、及び庄屋文書）

（７）－４　六連

六連では、嘉永 7(1854).11.4-5 の地震で津波が記録されており、久美原村で網などの漁具流失の被害件数の報告があるのみで、その他は不明である。

表２―４―２５　六連の津波被害記録

西暦	旧暦	被害等項目	被害内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	船・漁具流失	・久美原村：袋四ツ半流失、網壱帖半流失、鰍網十四流失、櫓九梃流失、わだ三拾花流失、ろくろ弐十流失、網六拾壱郷房流失。（岡田与次右衛門「表浜八ヶ村漁船流失損〆出し調恍」）

[7] 1 丁は約 109m

第３章　津波の影響を受けた寺院・神社、史跡、言い伝え

３－１　地震による津波被害を受けた寺院・神社

（１）概要

東三河地域において、地震による津波の被害を受けた寺院・神社は、27 社寺である（うち、津波による被害が不明の寺院・神社は 6 社寺）。このうち、被災後別の土地に移転した寺院・神社が 22 社寺であるなど、津波の影響で多くの寺院・神社が移転している。市別にみると、豊橋市では 11 社寺（三河湾沿岸 1、太平洋岸 10）、豊川市では 1 社寺、蒲郡市では 2 社寺、田原市は 13 社寺（三河湾沿岸 7、太平洋岸 6）と、太平洋岸が 16 社寺と多くなっている。

津波の被害を受けた寺院・神社の現在地をみると（図１－３－１～５）、多くが海岸沿いではなく内陸側に移転している様子がみえ、一部では集落よりも高台に立地している。地震による津波の被害を受けた経験から、当時の住民が流出されない場所に寺院・神社を設置したことが推測される。

なお、田原市の日吉神社・正福寺は天長 4(878).7.13 の地震で津波被害にあい、豊川市の東漸寺は明応元年(1492)以前（もしくは天文 9 年(1540)）の津波被害にあったと伝えられているが、どの地震による津波の被害を受けたかは不明である。

表３－１－１　地震による津波被害を受けた寺院・神社（１）

西暦	旧暦	市町村	地名	寺院・神社名	被害概要	被災後の事象	津波による被害内容
827.8.8	天長4.7.13	田原市（太平洋岸）	小塩津	日吉神社、正福寺	地震による津波被害	建物移転	・大宝二年持統上皇がこの地方を御巡幸の砌りこの海岸の眺が大変お気に召したとも伝えられ、その時の御言葉により日吉神社が勧進され村の名も越津と改めたと伝えられています。ところが淳和天皇の御代天長四年（827）七月十三日この地方に大地震が起こって越津の海岸は大陥没、美しく湾曲していた磯岩も賑やかだった家並も半分過ぎ海底に沈んでしまいました。正福寺も日吉神社もまたこの時今の地に移ったそうです。（渥美町の伝説 ）（小塩津日吉神社の由緒より）
1492年以前、もしくは1540年	明応元年以前、もしくは天文9	豊川市（三河湾沿岸）	小坂井	東漸寺	地震による津波被害	建物移転	・知多郡緒川の乾坤院亨隠和尚は、伊奈城主本多隼人佐泰次に迎えられて、城中に一席の法話を試みた。それより先、前芝村に東漸寺があったが、廃絶し小堂に本尊のみが祀られていた。ところが津波のために伊奈の地に漂着したので、村人が祀っていた地蔵尊を本尊として、本多泰次が堂宇を建てて本多家累代の香華寺として斉田を寄付し亨隠禅師を開基として、万年山東漸寺としたのが、明応元年（1492）の事であった。（小坂井町誌） （※前芝村誌では、「天文9年（1540）に大海嘯があり此の地方は社寺人家がことごとく流失という大被害があった。即ち現在の伊奈東漸寺は前島（前芝）にあったが、この大海嘯のため流され、そのため今の地に移された」とある。）
1498.9.20	明応7.8.25	豊橋市（三河湾沿岸）	牟呂吉田村	素盞嗚神社	地震による津波被害	建物移転	・渥美牟呂吉田村大字牟呂大西（現・豊橋市）の素盞嗚神社は地震津波のため流失したので、現在の地（豊橋駅の西南2km）に移転した。（東海地方地震・津波災害誌）（都司嘉宣、明応7年（1498）地震・津波の新史料、地震学会講演予稿週B5、P111（1979）、歴史資料から見た東海沖地震・津波、海洋科学11、p32-44（1979））
		蒲郡市（三河湾沿岸）	塩津	白山神社	地震による津波被害	建物移転	・白山神社流される。高さ4mと推定。（東海地方地震・津波災害誌） ・明応8年（1499）の津波で社殿は流壊した。神夢によって爾来凡そ百年後に北方の山の現所に遷し祀った。（塩津村誌）

表３－１－１　地震による津波被害を受けた寺院・神社（２）

西暦	旧暦	市町村	地名	寺院・神社名	被害概要	被災後の事象	津波による被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市（太平洋岸）	赤沢	吉祥院	地震による被害（津波不明）	建物移転	・現在地の南方海岸地にあったが、延宝八年（一六八〇）と天和元年（一六八一）の海嘯のために、少しく北方に移り、後更に宝永四年一〇月四日（一七〇七）の地震により、寺山がくずれ、危険な状態にさらされたために現在地に移転した。（高豊史）
			七根	竜泉寺	地震による津波被害	建物移転	・創立の年代は不明で、初め海辺にあったが波浪のため欠崩れたので、この地の代官戸田三郎兵衛から元屋敷同様の換地を受けて再興した。―中略―前記浜欠は宝永四年の海嘯に依ったものと思われる。（豊橋寺院誌）
			七根	御厨神社	地震による津波被害	建物移転	・氏神様も河内の地（※）があった時代は其そこに建立されていたと思われるが、住家が移る時には氏神も移り、度々遷宮されていたであろう。元禄八年の棟札に、「此の下に、在りしをここに移す」とある。順に山の上に居を構えた様子を知ることができる。御厨神社が現在の赤坂の地に鎮座せしは何時の時代であるかは、確たる記録がないので知る由もないが、何れ元禄以後には間違いない。 ※西尾市岩瀬文庫に再三足を運び古文書をあさって居る中、はからずも三河古地図に、宝暦年代の地図の中に七根村の中で「家の内」と書かれた所が有った。是正しく河内である。種々村の記録を調査した結果も同じく、昔の先住民は、現在の高地でなく海岸近くで生活を営み、少々の農業や漁業をして生活していたと思われる。古老より言い伝えられている事は、昭和二十五・六年迄栄えた地曳網にて二ツ山かかり（岩場）と言われる所があった。これまで昔は陸続きにして先住民が居たと言われていた。此の所が真の河内である。而し、長い年月の間に太平洋の荒波や強い季節風、又、度々の地震津波のために陸地は次第に浸蝕されていき、宝永の大津波を最後に海中に没し去ったのである。故に河内の住民は安全な北方高地に居を移すを余儀無く去れ、海岸に浜屋敷を構えた。是も長くは続かず更に北方に上り山屋敷へと移り住むようになっていった。（御厨神社）
			寺沢	東漸寺	地震による津波被害	建物移転	・創立当初の所在地は現在地の南方海辺であったが、宝永4年（1707）の大海嘯の後今の地に移した。（豊橋寺院誌）
			小松原	東観音寺	地震による津波被害	建物移転	・宝永4年（1707）には大津波をうけて現在地の南方一八町の旧地より現在地に移転。（東観音寺歴史資料目録） ・創立當時は、太平洋に面せる南海岸の山腹にあって、堂塔伽藍が完備して居たが、寶永四年十一月の大地震に方り、海嘯の爲に被害があって、翌五年から九箇年の歳月を要して、北に一八町を距つる現在の地に移轉されたものである。（國史上より觀たる豊橋地方）
			小松原	小松原進雄社	地震による津波被害	建物移転	・もと海辺の柄沢平に奉祀してあったが、宝永四年（一七〇七）の大津波によって現在地に移転したという。（豊橋市史第一巻）
			小島	大応寺	地震による津波被害	建物移転	・明暦2年（1656）住持玄釣首座の時殿宇を建造したが、宝永4年（1707）大海嘯の難に遭って衰退したのを、住持光厳祖錐首座（寛延3年5月13日寂）が現在の地に移転し、同6年8月庫裡一棟を新築した。（豊橋寺院誌）
			小島	小島神社	地震による被害（津波不明）	建物移転	・西小島の海岸にあったが、宝永年間の地震のため北方に移された。（校区のあゆみ　小沢）
			細谷	真月寺	地震による津波被害	建物移転	・創立後330年を経て宝永4年（1707）大海嘯の難に遭い、享保2年（1717）紹禅恵隆和尚の代、現在地に移転再興した。（豊橋寺院誌）
			細谷	幸福寺	地震による津波被害	建物移転	・宝永4年（1707）の大地震ならびに津浪のため部落が壊滅した頃上細谷村から地原へ分村してきた人々と共に幸福寺も移って来た。（校区のあゆみ　細谷）
		田原市（三河湾沿岸）	田原	漆田正楽寺	地震による津波被害	不明	・海辺へつなみ上り、浜筋の者は残らず山へ逃げた。田原御城下、藤田の二ツ池堤まで汐さす。漆田正楽寺地内、清谷の橋までも汐さす。（野田史）（金五郎文書「歳代覚書」）
			野田	安楽寺	地震による被害（津波不明）	建物修繕	・在家屋様式の寺であったが貞享二年（一六八五）本堂を建て直した。宝永四年（一七〇七）十月の大地震で潰れてまた建直した。（田原町史）
			野田	西圓寺	地震による被害（津波不明）	建物移転	・宝永四年（一七〇七）十月の大地震に本堂庫裡小屋など残らず潰れ、それがために正徳年中カネイバに引越し建立した。（田原町史） ・野田村保井の真宗白雲山西圓寺の堂宇はすべて倒壊し、後年現在地に移転した。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））

表３－１－１　地震による津波被害を受けた寺院・神社（３）

西暦	旧暦	市町村	地名	寺院・神社名	被害概要	被災後の事象	津波による被害内容
1707.10.28	宝永4.10.4	田原市（太平洋岸）	赤羽根宮沢、高松	八柱神社	地震による被害（津波不明）	建物移転	・もと宮沢に祀られていたものであるが、宝永の大地震の後現在位置に遷された。（赤羽根町史） ・八柱神社は、旧来は「宮沢」にあったとされる。そして宝永4年（1707）10月4日に発生した地震（宝永の東海地震）により、社地の多くが崩壊したため、2年後の宝永6年に比呂古山へと移転したとされる。・・・移転先の「比呂子山」は現在八柱神社が鎮座する「広子村」のことと考えられるが、旧地を示す「宮沢」は現在の地名にはみられない。「田原藩日記類」にも、移転以前の同社の様子を伝える記録は確認できない。（田原の文化第33号（石井一希））（稿本「村誌五」内「當社由緒記」）
			堀切	常光寺	地震による津波被害	建物移転	・宝永4年（1707）の大地震では、太平洋沿岸の村落は大半が流出してしまった。これまでの街道は、修繕できないほどに破壊されてしまった。これを契機に、東観音寺・常光寺などをはじめ多くの寺社や村落が北方の高地に移転した。（常光寺は、天保3～4年（1832～33）にかけて現在地に移された。）（渥美町郷土資料館　研究紀要第2号（加藤克己））
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	蒲郡市（三河湾沿岸）	拾石（塩津）	拾石陣屋（逸見陣屋）、稲荷神社	地震による津波被害	建物再建	・石垣は花剛岩であったが、水害で全部流されこわれた。しかし、石は、大正の始めに浜のどいと云う道路が出来た時に、集めて使った。此の道路は昭和二年迄で今は埋立で石垣もうまっている。延石は神社、寺、個人の水問口にもある。又陣屋跡にもあり、天保の災害でそれいらい跡方もなくなった。（塩津村誌） ・拾石陣屋（逸見陣屋）：享保3年5ヵ村五百石の旗本逸見家は、二百参石と持高の多い拾石村の本郷に陣屋を構えていた。陣屋は大小の延石を並べ石垣は花崗岩で頑丈であったというが、天保8年の大水害で崩壊し延石や花崗岩を残して流されてしまった。以後修復されないでいた。安政元年の東海大地震の津波で跡形もなく残っていた石も流されてしまったという。陣屋一角にあった稲荷神社は、その後陣屋跡に再建されている。（塩津村誌）
		田原市（三河湾沿岸）	江比間	津島神社、厳島神社	地震による津波被害	建物移転	・津島神社と厳島神社は鎮守山の北方、海に近い「一本松」に鎮座されていた。いずれも神社というより祠であったが……。七峯山の中腹に遷座されたのはいつ頃だろうか。ほとんど記録を発見することができなかったが、安政五年（一八五八年）のものがある。「津島神社、厳島神社、二社ヲ一本松ヨリ前ノ山ヘ遷座ス」がそれである。安政年間には神社の修覆再建が集中的に続いている。おそらく、安政元年十一月四日朝四つに起った大地震と大津波の来襲で相当な被害をこうむったせいであろう。津島神社、厳島神社が海岸近くから「前ノ山」へ移されたという記録の「前ノ山」は、鎮守山ではなく七峯山を指しているのではないだろうか。（江比間史）
			江比間	弁天社、牛頭天王社	地震による津波被害	建物移転	・内面に面する海岸に祀られていた「一本松御宮」の、弁天社、牛頭天王社が、大地震の後の高潮で境内の浜が欠け、松木の立ち枯れ等があり、安政五年（1858）六月に前山の土地に移した。（渥美町の民族探訪）
		田原市（太平洋岸）	赤羽根	若宮八幡社	地震による津波被害	不明	・宝暦4年（1754）、赤羽根西村では若宮八幡社が移転している。同社は大正6年（1917）以降現在に至るまで移転していないため、宝暦4年の移転先が今日の若宮八幡宮の社地にあたるものと解釈できる。現在地付近は、嘉永7年（安政元年：1854）の東海・南海地震の際津波を受けている。（田原の文化第33号（石井一希））（赤羽根西村の商人宮田三郎兵衛「年代附留覚」（前掲「赤羽根の古文書　近世史料編」666頁　原史料は田原市所蔵））
			赤羽根（若見）	弁天社	地震による津波被害	移転不明	・嘉永7年津波で流出した弁天社（市杵嶋神社）：若見村の弁天社は池尻川河口に近い地に鎮座していたこともあり、嘉永7年11月の地震（安政の東海地震）の際、同地を襲った津波により流出の難に遭っている。その後は稿本「村誌　五」や「赤羽根町史」に「若見字下り畑1番」（現池尻町下り畑1番地）の地に鎮座の旨がある点から、再建されたのは確実と思われるが、この再建地が流出前と同一であるかは明らかでない（また現在地も不明である）。（田原の文化第33号（石井一希））（「神祇最上御神前家寶書記」（「赤羽根の古文書　近世史料編」700頁に妙録。原史料は若見町　宮本家所蔵）の嘉永7年11月4日tの項に、「弁天社高浪ニて流出仕候」とある。）
1944.12.7	昭和19.12.7	田原市（太平洋岸）	赤羽根	若宮八幡社	地震による津波被害	不明	・若宮八幡社現在地付近は、昭和19年（1944）の東南海地震の際津波を受けている。（田原の文化第33号（石井一希））（赤羽根町の鈴木孫市氏の体験談「ほの国通信15号」（東三河地方拠点都市地域整備推進協議会　2003）2頁）

（２）各地震にみる寺院・神社の津波被害について

明応 7(1498).8.25 では、豊橋市の素盞嗚神社と蒲郡市の白山神社で津波の被害を受けており、明応 7 年(1498)の津波記録が少ない中で、被害記録が残っていることは、当時三河湾で津波被害が大きかったことをうかがわせる。

宝永 4(1707).10.28 の津波被害を受けた寺院・神社は 15 社寺と、最も多く被害を受けており、特に太平洋岸（12 社寺）が多い。一方、三河湾沿岸では地震に被害の大きかった野田（津波被害かは不明）のほか、田原の内陸にある漆田正楽寺で、津波が汐川を遡上して浸水している。

太平洋岸では、古来、白須賀（湖西市）から伊良湖までを陸路で進み、そこから伊勢まで渡海する伊勢街道があり、その沿道沿いに集落があったとされている。しかし、東海道の整備（慶長 6 年(1601)）で伊勢街道の機能が衰退し、さらに宝永 4(1707).10.28 の津波により伊勢街道のほとんどは崩壊し、街道としての機能は失われ、多くの寺院・神社や村落が北方に移転している。一方で、宝永 4(1707).10.28 の津波で浜名湖口今切が大打撃をうけ、今切渡海の危険を避け、本坂道（御油宿から本坂峠を越えて三ヶ日・気賀（浜松市）を通り見付宿（磐田市）を通る）の交通量が増えたことも、東三河地域での交通網体系を変える要因であったといえる。

表３－１－２　宝永 4(1707).10.28 の津波による人々の街道の変化

西暦	旧暦	市町村	街道名	津波による被害や影響
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市、田原市（太平洋岸）	伊勢街道	・古来、白須賀から渥美半島太平洋沿いを伊良湖までを陸路で進み、そこから伊勢まで渡海する街道があり、伊勢街道とよばれていた。この街道は、伊勢に向かう近道として人々の往来が多かったといわれている。当寺や周りの村々もかつてはこの街道沿いにあり、にぎわいを見せていたという。当該地は、古くより伊勢・熊野地方と交流が深く、古代には伊勢神宮領の神戸・御園、御厨が存在し、毎年伊勢神宮への調進物が輸送されていた。16世紀に当該地を支配していた戸田氏は、渥美半島太平洋側に位置する赤羽根に関所を設け関銭を徴収し、その関銭を当寺の造営費用の一部に当てたと伝えられている。これよりも、伊勢街道の往来が盛んであったことが推察される。しかし、この街道の繁栄は一六世紀までで、慶長六年（一六〇一）に近世の東海道が整備されるとともに、近世には伊良湖より伊勢に渡海する際に通過する伊良湖水道は難所とされ、街道の機能は衰退したと考えられる。街道沿いを通るこの街道は、太平洋の荒波による浸食が激しく、その都度ルートが変更され、高地へと付け替えがなされた。宝永四年（一七〇七）に当地を襲った大地震により生じた津波により、伊勢街道のほとんどは崩壊し海中に没し、街道としての機能が失われた。（東観音寺展） ・太平洋沿岸の村落は大半が流失してしまった。これを契機に東観音寺・常光寺などをはじめ多くの寺社や村落が北方の高地に移転し、それまでの街道は修復できないまでに破壊された。（愛知県文化財調査報告書第六六集−田原街道・伊勢街道−）
		豊橋市、豊川市（内陸）	本坂道	・本坂道は東海道を御油宿から分岐し、当古の渡しで吉田川をわたり、嵩山から本坂峠を越えて三ケ日・気賀を通り、三方ヶ原を横断して市野を経、見付宿の手前の安間において再び東海道に合流する、総里一五里一四町（六〇・四キロメートル）の脇往還であった。また嵩山から吉田へ通ずる道、気賀から浜松へ通じる道をも含めて、本坂道という場合もあり、要するに本坂道とは、嵩山・三ケ日・気賀の三か町村を通過する道を指したものと見てよいであろう。—中略—宝永四年（一七〇七）一〇月四日、東海道筋をおそった大地震・高津浪は、浜名湖口今切に大打撃を与え、新居・舞阪間の船路は荒廃して渡航危険となり、新居宿も家屋多数が流失、破壊された。かくて東海道を旅する人々は、今切渡海の危険を避けて脇往還の本坂道をとるに至り、この道の交通量はにわかに増加した。本坂道には、前述のごとく東海道御油宿と安間村を両端として、嵩山・三ケ日・気賀・市野の四か宿村があったが、宝永の大地震以後急激に増加した旅人、特に大名道中に対する人馬の準備は不可能に近いものであった。（豊橋市史　第二巻） ・一七〇七（宝永四）年一〇月四日、太平洋岸一帯を襲った宝永の大地震は浜名湖口を大津波で洗い、今切渡航を不能とし、新居、舞坂の宿を荒廃に追い込み東海道の通行をとめてしまったのである。そのために、大名行列はもとより一般の通行全てが姫街道廻りとなり、とりわけ御朱印荷駄及び大名、公家の通行補助としての助郷負担が急増したことは、近隣農村の負担を大きくした。（東三河の歴史）

しかし、宝永 4(1707).10.28 の津波で被災した太平洋岸の寺院・神社は、豊橋市が 11 社寺[1]であるのに対し、田原市では 2 社寺である。これは当時の太平洋岸の集落が豊橋市は海食崖の下にあったのに対し、田原市は台地の上に立地していたことが関係しており（田原市では、海食崖下は砂浜が狭く波浪浸食を受けやすいことと、浜辺では生活用水や農業用水が容易に得られないため、背後の海食崖上の台地に集落を置くほかなかったと記録されている)、海食崖下に集落があった豊橋市の寺院・神社と、田原市の中でも地形上津波が浸水しやすい池尻と堀切の寺院・神社に、津波被害が及んだものと推測される。

表３－１－３　宝永 4(1707).10.28 の津波における集落への被害状況の違い

表浜の集落	宝永地震の津波による被害状況
長谷村～高豊村	・江戸時代前期には、集落や耕作地が海食崖の前面に広がる後浜や開折谷の中にあり、半農半漁の生活をしていた。宝永地震では、崖の崩落や大津波のために、漁具の流出だけでなく、集落自体も大きな被害を受けた。
六連村～小塩津村	・江戸時代には、海食崖の上の台地に集落は立地していた。このため宝永地震では、大津波による集落の被害はなく、浜辺に置いてあった網や船などの漁具の流出が主な被害として記録された。
池尻村	・太平洋岸に流れ出す池尻川では、河口から遡上してきた大津波により、河口付近の低地にあった池尻村の一部の民家が流出した。
堀切村	・海食崖が消失した堀切村は、標高4.5-5mの砂浜の微高地に集落が密集している。宝永地震の巨大津波では、家屋や田畑も呑み込まれ、集落跡も残さないほどの被害にあった。

（出典：渥美半島の表浜集落における宝永地震の被害状況と海食崖との関係（藤城信幸）（田原市博物館『研究紀要　第3号』）

嘉永 7(1854).11.4-5 の津波被害を受けた寺院・神社は 7 社寺であり、特に三河湾沿岸では田原市の江比間の一本松（海岸沿い）に立地していた 4 社寺が被害にあい、その後前ノ山に移転したとの記録がある。蒲郡市でも、塩津では拾石陣屋（逸見陣屋）跡地で津波被害を受け、その跡地に稲荷神社を再建したとの記録がある。

一方、太平洋岸については、宝永 4(1707).10.28 の津波等で多くの寺院・神社が移転したため、赤羽根の 2 社寺（若宮八幡宮は昭和 19(1944).12.7 の津波も受けている）の津波被害で留まっている。

（３）天文年間における寺院・神社の津波（高潮・洪水）被害について

天文年間(1532～1555)において豊川河口部に立地する寺院・神社のうち、11 社寺が津波（高潮・洪水）の被害を受けている。豊橋市では、前芝で 1 社寺、津田で 5 社寺、大村で 1 社寺、吉田方で 2 社寺が津波（高潮・洪水）被害を受け、豊川市では小坂井（伊奈）で 2 社寺（東漸寺では明応元年(1492)に被害を受けたとの記録もある）となっている。

このうち、豊橋市の賀茂（豊川市（金沢））の照山に漂流した寺院・神社が 7 社寺（言い伝えも含む)、石巻町や伊奈までの漂流が 2 社寺と記録があるなど、多くの寺院・神社が豊川（とよがわ）の山間部まで流出している。この記録は、新聞記事（東愛知新聞 2003、2011）でも取り上げられているが、大学等有識者でも暴風雨での高潮・洪水によるものか、地震による津波によるものかは不明と評している。

[1] 豊橋市では、この時代に海嘯（津波・高潮・洪水）による被害を受けた寺院・神社として、大円寺（城下）、東光寺（七根）、聴松庵（七根）、普門庵（小島）、上細谷八柱神社（細谷）、東細谷八柱神社（細谷）などがあるが、地震による津波か不明のためここでは取り扱っていない。

表３－１－４　天文年間における寺院・神社の津波（高潮・洪水）被害（１）

項目	市町村	地名	寺院・神社名	西暦	旧暦	被害内容	津波による流失先
①神社移転等	豊橋市	前芝	前芝神明社	1540	天文9	・天文九年海嘯のために社殿流失して記録をなくしたので、はっきりしたことは分らない。（前芝村誌）	
		川崎（津田）	中の森神明社・札の辻神明社（川崎神明社）	1540	天文9	・両社とも天文9年(1540)の大洪水によって書類などが流失し、勧請の経緯など不明。（ふるさと津田）	照山まで漂流（記録なし）
		横須賀（津田）	歓喜寺	1539	天文8	・天文八年の洪水後荒廃していたのを舜鶴和尚が復興。（豊橋寺院誌）	
		横須賀（津田）	進雄神社	1540	天文9	・高潮、洪水のために津田校区の進雄神社の社殿が流失した。（校区のあゆみ　前芝）	照山まで漂流（記録なし）
		下五井（津田）	日吉神社	1539	天文8	・大津波により社殿が流されたため、同一〇年（一五四一）に再興されたと伝えられる。（豊橋市史　第一巻）	照山まで漂流（記録なし）
		瓜郷（津田）	満光寺	1539	天文8	・大津波に堂宇一切流失し残骸は東北一里余を隔てた八名郡加茂郷の照山に漂着。（豊橋寺院誌） ・満光寺の記録によると、瑞雲寺、自徳寺、松吹寺、香良軒、高信軒、法願寺の六ヶ寺今廃寺とある。これ等六ヶ寺の創立、所在地共不明で、恐らく大永五年満光寺創立当時の塔頭で、天文八年の大津浪に流出して、その後再興に至らず、只名称だけ残っていたものと思われる。（豊橋寺院誌）	照山まで漂流
		大村	大村天神（現　八所神社）	1539	天文8.8	・下郷最大の津浪、天文八年八月の大津波の際、隣接の瓜郷町満光寺も流失、其の時本尊如来像が流されて八名郡賀茂照山に漂着していたと言う伝説がある。（大村八所神社と松原用水）	照山まで漂流
		菰口（吉田方）	菰口神明社	1540	天文9	・天文9年（1540年）大津波で石巻町辺りまで流される。（豊橋市民からの情報提供）	石巻町まで流失
		馬見塚（吉田方）	正行山専求庵	1540	天文9	・「天文九年大海嘯があった。神主渡辺二郎忠安避難の途溺死し」。（同神社の由緒碑） ・専願寺は、もと正行寺といい、渡辺家の氏寺であった。天文九年（1540）の大津波で大被害を蒙り、当主まで溺死した渡辺家は、隣接地（専求庵の東南約100米）にある正行寺と合併して、正行山専求庵と改称した。（馬見塚長生会ホームページ）	照山まで漂流（記録なし）
	豊川市	小坂井（伊奈）	平井八幡社		天文年間の初期	・天文年間の初期（1532頃）の大洪水によって社殿を流失してしまった（賀茂の照山の麓に流れ着いたと伝えられている）。（小坂井町誌 ）	照山まで漂流
		小坂井（伊奈）	東漸寺	1540	天文9	・天文9年（1540）に大海嘯があり此の地方は社寺人家がことごとく流失という大被害があった。即ち現在の伊奈東漸寺は前島（前芝）にあったが、この大海嘯のため流され、そのため今の地に移されたといい、又元梅藪もこの大海嘯のために人家が流失し、一時村人は伊奈村東漸寺西附近に住んでいたが、其の後漁業上の不便から、州崎（現在の梅藪）の方へ次第に移住して現在のような村づくりをしたわけで、村の形の上からみて前芝、日色野とは少しかわっているのはそのためである。元梅藪にむらがつくられた頃は（元梅藪にその頃まで人が住んでいたことは、その所から室町時代頃使用の燈明皿の破片が出土していることでわかる）奈切川（今の佐奈川）は元梅藪の東方を流れ今の大長館あたりに注いでいたのが、この天文年間の大海嘯によって現在の流路になったといわれる程、当時の大海嘯は思いのままにこの地方を荒れまくって大被害を与えたのである。（前芝村誌）	伊奈まで流失

表３－１－４　天文年間における寺院・神社の津波（高潮・洪水）被害（２）

項目	市町村	地名	寺院・神社名	西暦	旧暦	被害内容
②集落移転等	豊橋市	下五井（津田）		1540	天文9	・天文9年（1540）の暴風雨及び洪水による被害で廃村になっていた村を、今川家家臣の五人衆が再興した。別説では、享禄2年（1529）松平清康が「吉田攻め」をした時、「下の五井」に放火したと牛久保密談記に記述されている。（校区のあゆみ　津田）
		大村		1539	天文8	・大村の如き低地帯では、千年以前よりの居住者は、度々住居をかえざるを得ない状態に於かれ、子孫に至りてはほとんど不明で、かてゝ加えて、天文八年の大津波の被害は殊の外大きく、天文以前に書き記された古文書は皆無に等しい。（大村八所神社と松原用水）
③照山まで漂流した新聞記事	・この地方に伝わる天文9年の海嘯（遠浅の海岸や三角状の河口などで満潮時に逆流する海水が、狭い河口の抵抗によって壁状の高波となる現象・津波）を伴ったという大地震、あそこでもここでも被害があった、と言い伝えながら文献上で一向見当たらない。まず湊町神明社（豊橋市・豊川河口）では、このとき御神体が流れて賀茂の照山に着いたのをお迎えして社地をあらため、今の地へお祭りしたという。それら同じように照山へ流れ着いたのは下五井町の日吉神社。横須賀町進雄（すさのお）神社。川崎町中ノ森の神明社。馬見塚町の神明社。寺では瓜郷町の満光寺本尊だったという。（東愛知新聞（2003.12.4）） ・馬見塚神明社の参道入り口に石版を填め込んだ同神社の由緒碑が建っており、そこにはこう記されていた。「（前略）天文九年大海嘯があった。神主渡辺二郎忠安避難の途溺死し（以下略）」。天文九年は1540年。大海嘯（かいしょう）とは大きな海嘯のことで、「嘯」は吠えるの意味。当時津波をそう呼んでいた。教えてくれた男性によると、地元ではこのときの大津波で神社建物の一部は上流に運ばれ、約10キロ先の「賀茂の照山」まで流されたという。ここで疑問が湧く。愛大名誉教授の藤田佳久さんに聞いた話では、横須賀町の進雄神社も同じ頃の年代に津波被害にあって建物の一部が「賀茂の照山まで流された」。なぜ、数キロ離れた神社の運ばれた先が「賀茂の照山」か。するとさらに面白いものが見つかった。同市瓜郷町の満光寺に関する資料だ。同寺の由緒によると、天文八年（1539）にこの地方を襲った大津波が堂宇すべてを押し流し、その残がいは「賀茂の照山に漂着した」と伝えられているという。そのほか、同市大村町の八所神社の由来書によると、同神社も天文八年の大津波で建物が流失している。整理すると、天文八年および九年に大津波があり、4つの神社の建物すべてを流出させ、うち3つは「賀茂の照山」まで流れ着いた。当時、この地方を大規模地震が襲ったという記録はなく、神社の由緒にも地震をうかがわせる記述はない。ここで疑問が湧く。果たして大地震以外で、これほどの津波が生じるだろうか。何より、同じ場所に流れ着いたというのは怪しい。（東日新聞（2011.11.2））					

そこで、愛知県災害誌において、天文年間の自然災害をまとめてみると、地震は天文6(1538).12.6 のみで、津波が発生した記録はない。一方、暴風雨等による水害（高潮・洪水）は 9 回であり、しかも寺院・神社が津波被害を受けた時期（天文 8-9(1539-40)）には暴風雨による水害が多く発生し、天文 9(1540).8.11 では高潮により豊川河口部の前芝・梅藪では大被害（この被害で前芝・梅藪の住民は伊奈に移転した）があったと記述されている。このことから、天文年間(1532～1555)の津波（高潮・洪水）は暴風雨による高潮・洪水であった可能性が高いが、いずれにしても天文年間は津波（高潮・洪水）が重なって、豊川周辺の地域の集落に大きな影響をあたえたといえる。

表３－１－５　天文年間の自然災害

災害	西暦	旧暦	被害内容
水害（大雨・洪水）	1532.9.26	天文元.8.17	・洪水により、矢作川の支流・青木川・伊賀川（岡崎）の堤防が破壊された。（愛知県災害誌）
風水害（暴風雨）	1534.9.20	天文3.8.3	・三河、暴風雨となる。被害については不明。（愛知県災害誌）（言継卿記等）
地震	1538.1.16	天文6.12.6	・正午ごろ、三河に地震。（愛知県災害誌）（東栄鑑）
風水害（暴風雨・洪水・高潮）	1539.10.9	天文8.8.17	・三河、暴風雨になり、洪水・高潮があった。被害については不明。（愛知県災害誌）
水害（大雨・洪水）	1540.5.25	天文9.4.9	・三河に、大雨・洪水があった。被害については不明。（愛知県災害誌）
風水害（暴風雨・高潮）	1540.9.21	天文9.8.11	・尾張・三河、暴風雨。ところどころで大木が倒れ、高潮により豊川川口の前芝・元梅藪では大被害をこうむった。（愛知県災害誌）
風水害（暴風雨・洪水）	1541.9.11・12	天文10.8.11・12	・尾張・三河、暴風雨・洪水。被害については不明。（愛知県災害誌）（熊野史等）
風水害	1544.8.7	天文13.7.9	・三河・尾張は、暴風雨・洪水となったが、とくに三河では、人や家屋の被害が甚大であった。（愛知県災害誌）
風水害（暴風雨）	1546.8.11・20	天文15.7.5・14	・5日と14日の2回、三河に暴風雨があり、その後ききんとなる。三河の被害については不詳。（愛知県災害誌）
水害（大雨・洪水）	1550.9.22	天文19.8.2	・三河に、大雨、洪水があった。被害については不明。（愛知県災害誌）（参河聡視録）

（出典：愛知県災害誌）

３－２　地震による津波被害を伝える史跡

（１）概要

津波の被害に関わる史跡は東三河地域では 14 件残されており、多くが寺院・神社による史跡（11 件）であるが、住民自らによる史跡も 3 件存在するなど、津波を後世につたえようとした先祖が多くいたことを示している。具体的には、津波被害を受けた彫像を祀る神社が 6 寺社、津波被害の戒めを伝える石碑や堤が 4 件、津波の被害の様子を示した絵図や絵馬が 4 件である。市別にみると、豊橋市が 10 件（太平洋岸 9 件、三河湾 1 件）と多く、田原市が 2 件（すべて太平洋岸）、蒲郡市が 3 件となっており、津波の被害が大きい太平洋岸での津波に関わる史跡が 11 つと多い。

地震ごとにみると、宝永 4(1707).10.28 での津波が 7 件、嘉永 7(1854).11.4-5 での津波が 5 件となっている。（医王寺の薬師如来仏は、いつの地震・津波に関わる史跡か不明）

（２）宝永 4(1707).10.28 の津波に関わる史跡

宝永 4(1707).10.28 の津波に関わる史跡は、すべて豊橋市の太平洋岸にある。

小松原の東観音寺では、宝永 4(1707).10.28 の地震以前の様子を残した史跡が 3 件あり、1 件は海岸沿いに立地していた跡地を示す石碑、2 件は人々の暮らしぶりを示す絵画、3 件は地震前と地震後の村絵図など、津波を契機とした集落移転の様子を描く貴重な史跡が多く残されている。

また、津波の被害を受けた八柱神社（城下）の八王子大明神、法蔵寺（伊古部）の馬頭観音、菟頭神社（高塚）の戸とうの宮様、東漸寺（寺沢）の行者塔は、豊橋市の太平洋岸で津波の被害を受け移転した寺院・神社と同様、津波被害を受けた彫像として後世に伝えられている。

（３）嘉永 7(1854).11.4-5 の津波に関わる史跡

嘉永 7(1854).11.4-5 の津波に関わる史跡は、三河湾沿岸では蒲郡市で 1 件、太平洋岸では豊橋市で 2 件、田原市で 2 件となっている。

蒲郡市では西浦に祀られていた松島地蔵菩薩が津波で流失したため、再建され大光院にて祀られていると伝えられている。

豊橋市では、御厨神社の絵馬が当時の津波の様子を再現しているが、住民ヒアリングでは、描かれている松の木から、津波が海食崖の上まできたのではないかとも考察されている。また、伊古部には、震災が二度と起こらないことを願った石碑が住民によって建てられており、案内板には、推定 29m まで海水があがったとの言い伝え（記録なし）もあるなど、当時の津波の怖さを後世に伝えている。

田原市では、被害の大きかった堀切や日出で史跡が残されている。西堀切村の村絵図では、東堀切村から日出村境までの砂浜に墨引きがされ、浪害により砂浜が広く欠損したことを具体的に記録している。また、津波の被害を体験した日出や堀切の住民は、住民自らが津波除けの堤防を長い年月をかけて作り上げており、日出では特産のいの貝やカキの殻を積み上げて作られていることから「かいがらぼた」と呼び、昭和 30 年ごろまで大事にされてきている。

表３－２－１　地震による津波被害を伝える史跡（１）

西暦	旧暦	市町村	地名	津波	概要	津波に関わる史跡内容
1689年以前	元禄2以前	豊橋市（三河湾沿岸）	下五井（津田）	小馬場医王寺の薬師如来仏	津波被害を受けた彫像	・元禄2年（1689）満光寺住職が記した「下五井村薬師如来縁起」には次のように記されている。鳳来寺山の開祖、利修仙人が、杉の巨木から3本の薬師如来仏を彫った。1体は鳳来寺に安置、1体は美濃国の嶺峯山に納め、1体を幡豆郡大浜の火煙下山に納めた。後年、大地震の津波により大浜の火煙下山が倒壊流失した。薬師如来が三河湾を漂流して下五井村へと流れ着いた。下五井の人々は、薬師如来を祀った。薬師如の霊験はあらたかで人々の崇信が篤かった。この薬師如来を、元禄2年、小馬場の医王寺住職が村人から譲り受けて、医王寺境内の一隅に別堂を建てて安置したのが薬師堂である。（ふるさと津田）（下五井村薬師如来縁起）
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市（太平洋岸）	城下	八柱神社の八王子大明神	津波の影響で移動した彫像	・城下村の八柱神社は赤沢村より分村の当時には前述の通り、祭神として貴船大明神と天照大神であった。ところが宝永六年（一七〇六）以降には祭神が八王子と改められている。その理由は宝永四年（一七〇四）の地震により、それまで塩ヶ嶋一円に居を構えていた村人は四、五町後方の「みそか谷」一帯に居を移すと共にそれまで城下村の三嶋が別々に祀っていた貴船大明神・天照皇太神・砂宮神を一処にあつめ、八王子大明神と改名したのである。（高豊史）
			伊古部	法蔵寺の馬頭観音	津波の影響で移動した彫像	・馬頭観音は、津波による村の移転によって置き去りにされていたものを、本寺に納めたものといわれる。（愛知県文化財調査報告書第六六集　−田原街道・伊勢街道−）
			高塚	菟頭神社の戸とうの宮様	地震被害を受けた彫像（津波不明）	・地鳴り、大地しん大分にゆれ、山くずれ、海へなき引申し候ふ……戸とうの宮様、古地松木共に海へゆり出し申し候」と「戸とうの宮様」が宝永四年の大地震によって海へゆり出てしまう被害にあった。（高豊史）（名主田中八兵衛の「御免定書付」）
			寺沢	東漸寺の行者塔	津波被害を受けた彫像	・寺沢町の東漸寺本堂から、墓地におりる坂道の入り口に、苔むした行者塔が1基ある。―中略―今から380年ほど前、慶長年間にまでさかのぼる。北陸地方の某藩の武士が1人、父の仇をさがし求めて全国を歩き回るうちに、いつしか路銀も使い果たしてしまい、流浪の果てに寺沢の東漸寺の仏門をたたいた。―中略―ある日、ほん然として悟った彼は、長い復しゅうの夢から覚め、仇打ちをやめて懐かしい故郷へと思ってはみたものの、今さら仇を討たずに帰藩もできず、思いあまった末に仏縁を得た三河の東漸寺に杖を運び、頭をまるめて仏門に入り安嶺禅師の弟子となった。本堂西の行者塔は、彼が後年この寺の住職になったときに西国33か所の苦しい思い出に加え、彼と同じ諸々の恨み悩みをもつ悲しい遍路たちの幸せを願い、海岸の墓地に建てたものだという。 宝永4年（1707）の大津波のときも、この塔だけは不思議にも残って現在に至っている。（校区のあゆみ　小沢）
			小松原	小松原村絵図	津波被害を受ける前と受けた後の村絵図	・江戸時代の小松原村は、一村一円東観音寺領であった。東観音寺は行基菩薩の開眼と伝えられ、鎌倉から室町時代にかけて大いに栄え、江戸時代に入っても徳川氏の庇護をうけた名刹である。この東観音寺は元来海岸近くに立っていたが、宝永4年(1707)の大地震に伴う津波で大きな被害を受け、正徳3年(1713)に至って海岸より離れた現在地へ移転したもので、左の図は東観音寺が海岸近くに位置していることから江戸時代前期のものと考えられる。図は1町を1寸（約3600分の1）に縮尺した実測図で、南北に細長い同村田畑の他村との入り込みを色分けで示し、小松原村の田畑は黄土色、東隣小島村の田畑が紫色、西隣寺沢村の田畑がオレンジ色、その西、西七根村の田畑が白色で示されている。集落は家の形で表し、太平洋の海岸沿いに多く集まっている。また道は朱線で表し、吉田・大岩・二川などの行き先を記している。この図を見ても荒れた原野の中の谷筋を中心として耕地が点在していることがわかる。これに対して上記の図は、非常に概略的ではあるが、東観音寺が内陸部に位置することから江戸時代中期以降の小松原村の絵図である。この図には東観音寺のほかに集落を表す家の形が内陸部に多く描かれており、図下部の浜沿いに本屋敷の表記があることからも、津波の被害によって多くの集落が内陸部に移ったことがわかる。（絵図から地図へ―移り変わる豊橋の風景―）

表３－２－１　地震による津波被害を伝える史跡（２）

西暦	旧暦	市町村	地名	津波	概要	津波に関わる史跡内容
			小松原	東観音寺の開山行基菩薩	津波被害を受けた跡地を示す石碑	・小松原の海岸へ下りる途中、畑の一角に雑木林が残されている。中に踏み入ると「開山行基菩薩」と刻まれた石碑が建っている。ここは以前、東観音寺があったところである。宝永4年（1707）渥美半島一帯に被害をもたらした大地震により、部落が移動した。これを機に東観音寺も宝永5年（1708）から享保元年（1716）にかけて現在地に移転した。（校区のあゆみ小沢）
			小松原	東観音寺古境内図	津波被害を受ける前の村の様子を示した図	・所掲図は宝永四年の大海嘯以前、寛文頃（一六六一～七三）の境内図で、立派な堂塔伽藍、多くの参詣者、山下の海辺に並ぶ民家、往来の人々の様子が精密に写実的に描かれており、東観音寺の旧態をうかがう好資料であるとともに、近世前記の地方風俗画としても貴重である。（豊橋市史第二巻） ・江戸時代初期の「小松原観音寺古境内図」を見ると、下方に荒々しい波の打ち寄せる太平洋と漁船や帆船が描かれている。地引き網を引く漁師の姿も見られる。波打ち際に伊勢街道が通り、暖簾を下げた町屋の前を、多くの旅人や馬に乗った武士などが往来している。伊勢街道から参道が丘陵に向かって分かれていて、開折谷を流れる川に架かった橋を渡り、坂道を上がりながら、境内へと入る。丘陵の奥に檜皮葺の観音堂や阿弥陀堂、多宝塔が建てられている。境内のすぐ下は険しい崖になっていて、田畑を耕す百姓も描かれている。江戸時代初めには、海岸付近の小丘上にあった小松原の東観音寺も、宝永地震と大津波により伽藍の大部分が破損した。7年後に18町（約1.9km）北側の現在地に移転している。（田原市博物館研究紀要第3号（藤城信幸）） ・松島地蔵菩薩の由来と現在 一説には安政元年の大地震による大津波で付近一帯は大きな水害を受けました。当時、松島には多くの松の木が繁茂していましたが、それらの松の木の大部分は地蔵菩薩ともども流失されたと聞いております。その後、流失した地蔵菩薩は改めて新しく建立され、安政4年大光院創立と同時に、大光院の縁の下に安置され、現在に至っております。一方、流出された松島地蔵菩薩は数々の霊験が物語られ、橋田地区の人々に厚く信仰されていました。その後、漁師が漁をしていたときに、胴体がバラバラでしたが地曳き網や打瀬網に全部拾われ、縁の元である大光院に移し、現在大光院入口石段の下段の場所に鎮座されております。（西浦町の昔と今）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	蒲郡市（三河湾沿岸）	西浦	大光院の松島地蔵菩薩	津波被害を受けた彫像（再建）	
		豊橋市（太平洋岸）	御厨神社（西七根）	御厨神社絵馬	津波の様子を描いた絵馬	・嘉永七年（一八五四）に一般に云われている「安政の大地震」が起った。安政の大地震は一一月四日、五日と二日にわたり宝永地震と同様に関東以西の太平洋岸に大きな被害を及ぼした。―中略―西七根御厨神社絵馬（巻頭写真）には「高塚村の彦坂与六網の漁船が津浪後西七根の浜辺の枝に打ち上げられた」と記してある。（高豊史）(西七根御厨神社絵馬／下永良陣屋日記） ・去ル安政元年寅霜月四日　朝五ツ頃天地も崩る斗り　大地震也　此日宿頼有りて　氏神社へ参籠す　地しん治れバ我家へ帰り　網舟共覚束なく　先浜辺へ参り候へば最早　大津波来りて　村々の網舟　悉く押流され目に掛る物もなし　即舟のミ　山の半バにたゞよひ徒き　是ばかり誠に　氏神の冥助と　身の毛もよだちて覚えし　隣村彦坂与六郎所持の網　此表共　右の舟にて尋出す　数多の漁船残りなく　打ちくだかれ　即舟斗り安穏に助り候ハ　只事にあらず　余りの有難さに　此船板を額に拵えて　即子孫の果ヽに至る迄　神明の冥助を　仰き奉らんが為　捧奉もの也〞慶應三年　　丁卯四月五日　　儒に應じて　周岳之を図す〞。（御厨神社宮司　鈴木源一郎（平成二十三年十月吉日））
			伊古部	震災鎮めの石碑、及び案内板	津波が起こらないことを願った石碑	・「震災、鎮めの石碑　碑文　既白大士（太陽神）、八大竜王（水神）　根礒大明神（海岸守護神）」 ・この石碑は安政6年に網元の仙太郎さんが震災が二度と起きない事を願って立てました。 安政元年（嘉永7年）の地震について「安政元年（1854）11月4日午前9時頃と、5日午前5時頃続けて2度にわたり起きたマグニチュード8.4と言われる大地震により伊古部村の大羽根山が800メートル海中へ押し出され一つの島となった。漁労に使う舟、綱とも高波に残らず引かれた。家屋の倒壊、流出甚大なり」。と古文書に記されいる。この地震は「大津波をともなっており、言い伝えでは推定29メートルの高台まで海水が上がった」とのことである。（震災鎮めの石碑、及び案内板）
		田原市（太平洋岸）	堀切～日出地区	かいがらぼた	ツナミ除けの堤	・人家や先祖伝来の田畑を守るために、浜に沿った防潮林の中に波除け堤を長い年月かけて築いてきた。地元（日出地区）では、特産のいの貝やカキの殻をその都度積み上げてきたので、「かいがらぼた」と呼び、昭和30年代くらいまで大事にされてきた。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治）） ・地元で「かいがらぼた」と呼ばれる津波除けの堤を太平洋岸（まで）に築いたりした。なお、これらの教訓によりその後の地震（昭和19年、東南海地震等）では、比較的被害が少なかった。（・「前代未聞事」高瀬家所蔵文書　・「助郷免除願書」堀切区有文書　・「常光寺年代記」常光寺文書　・清田治「渥美半島における嘉永東海地震の実状-現存する災害記録から-」、『研究紀要・第7号』渥美町郷土資料館　平成15年3月　・「堀切村村絵図」等）

表３－２－１　地震による津波被害を伝える史跡（３）

西暦	旧暦	市町村	地名	津波	概要	津波に関わる史跡内容
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	田原市（太平洋岸）	西堀切村	西堀切の村絵図	津波の浸水を描いた村絵図	・東堀切村の浜境より日出村境までの20町37間の砂浜に墨引きをし、「此筋印嘉永七寅年、大津浪ノセツ御引アリ」と、浪害により砂浜が広く欠損した。（西堀切村絵図)(渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治)） ・安政の地震以後に作成された村絵図。東堀切村の浜境より日出村境までの20町37間（約2,250m)の砂浜に墨引きがあり「此筋印嘉永七（安政元）寅年、大津浪ノセツ御引きアリ」と浪害により砂浜が広く欠損したことが記されています。（堀切村村絵図（田原市博物館作成資料))
1945.1.13	昭和20.1.13	蒲郡市	三河湾	形原神社のわすれじの碑	地震（津波を含む)を後世に伝える石碑	・碑文　昭和二十年一月十三日未明　突如として当地方を襲った大地震により　犠牲者二百有余人全壊家屋三百有余にのぼる大惨害を被り　戦争末期の困窮と相まって　筆舌に尽し難い惨苦をなめたのである 今ここに三十三年を迎えるにあたり　当時の惨状に思いを新たにし　非命にたおれた人人の霊を慰めるとともに　永く後世に伝えるべきしるしを残すということは　まさに生き長らえることを得た者の果すべき重要な課題であると考え　有志相計り　形原地区民多数の賛同を得て　その芳志を結集し一碑を建立して　その意を表するものである（わすれじの碑　碑文）

３－３　地震による津波被害の言い伝えと「津波てんでんこ」にみる教訓

（１）概要

人々の地震による津波や被害の体験記録は、東三河地域では 23 件残っている。そのうち、「津波を目撃した証言」は 14 件、「津波の避難体験（被害実態も含む)」が 7 件、「津波被害による名称の言い伝え」が 3 件となっている（1 件は津波目撃と津波避難の両方)。この 3 件の記録において、山下文男著「津波てんでんこ」（発行新日本出版社）で語られている津波避難の心得を踏まえながら、東三河地域の人々が残した津波体験の記録（言い伝え）の意味を考察する。なお、山下文男氏と「津波てんでんこ」の概要を以下に示す。

表３－３－１　「津波てんでんこ」概要

・山下文男（やました　ふみお)：1924 年岩手県三陸海岸生まれ。明治の三陸津波で一族 9 人が溺死。自らも少年時代に津波を体験。1986 年以降、「歴史地震研究会」会員として著作と津波防災活動に従事。

・津波てんでんこ：私（山下氏）は、昭和の津波（昭和 8 年(1933)の昭和三陸地震による津波）のとき、末っ子（小学 3 年）だった私の手を引かずに、自分だけ一目散に逃げた父親の話をし、後で、事あるごとにその「非情」を詰る母親に対して「なに！てんでんこだ」と、向きになって抗弁した父の話をした。そして津波のとき共倒れを避け、一人でも多くが助かるためには、非情のようだが、これは仕方のないことだと締めくくった。明治三陸津波では共倒れが非常に多く、私の家でも祖母が子どもと共倒れになっていて、父は、せめて母親だけでも生きていて欲しかったと繰りかえしてその死を惜しんで我々子どもたちに話していた。その体験から、津波のときは、親でも子でも人のことなどは構わず、銘々ばらばらに一時も早く逃げなさいとい意味で「津波てんでんこ」という言葉になった。

（出典：津波てんでんこ　近代日本の津波史（山下文男著))

（２）津波を目撃した証言からの教訓

津波の目撃証言は 14 件あるが、津波自体の目撃だけでなく、潮が引く様子を伝える記録が多い。例えば、嘉永 7(1854).11.4-5 の津波では「一色の大磯が、砂浜にある岩に見えてしまう程海が引いた」という赤羽根の老人の談や、昭和 20(1945).1.13 の津波では「外を見たら家の前の海の水がものすごい勢いで沖のほうへ引いていくのが見えた。それを見て、集落のおばあちゃんたちが口を揃えて『津波が来るからあがらなきゃ』と言った。」という西浦の住民の談がある。

「津波てんでんこ」では、津波を「津波はいったん押し寄せて来ると、昔の人が『矢を射るように速い』と表現したように、非常に速いということを再認識させた。しかも普段は考え及ばないようなパニック状態の中で、その津波に対処しなければならない。その適不適が生死を分けた。」と表現しているように、津波が襲ってきてからでは対応できないとしている。このことは、津波が来てからではなく、潮が引くという現象を津波が襲う前触れととらえて避難することが大切であることを、多くの東三河地域の住民に伝える記録であると思われ、貴重な言い伝えである。

表３－３－２　津波を目撃したことについての言い伝えや証言（１）

西暦	旧暦	市町村	地名	言い伝えの概要	津波による言い伝えや証言
1854.12.23-24	嘉永 7.11.4-5	田原市（太平洋岸）	赤羽根	津波の目撃証言	・津波の前触れとして常時は海上にある一色の大磯が、砂浜にある岩に見えてしまう程沖合いにまで海が引いたとの老人の談が見られる。(赤羽根の古文書　近代史料編)(長谷川家記録)
1945.1.13	昭和 20.1.13	豊川市（三河湾沿岸）	御馬地区	津波の目撃証言	・1945年1月13日は当時17歳の高校生で、御馬村に在住。地震発生時は寝ていて、激震で目が覚めて、驚いて表にでると、南の渥美半島の方に青い火花が数回見え、ドンドンという音があったような感じがあった。なにかあると浜にいく習慣があり、その後御馬の港にいくと、すでに5～6人きおており、潮が高くなっているとみんなで騒いでいた。今思うと、普通の高潮より50cmくらい高いところに海面があったと思う。その後、寒くて家港を後にし家に戻ったため、海のことはわからないが津波による被害はなかったと思う。余震が強かったので怖くて家に入れず、1ヶ月くらいのりほしのたこ5枚で、四方の壁と屋根にして地震小屋を建てて、外で寝た。また、戦争中なのでよその地区の状況はわからないが、後で形原の方の断層があったのを知って驚いた。（御馬地区住民より聞き取り）
1945.1.13	昭和 20.1.13	蒲郡市（三河湾沿岸）	西浦	津波の目撃証言、津波からの避難体験	・外へ出たら、家の前の海の水がものすごい勢いで沖のほうへ引いていくのが見えた。それを見て、集落のおばあちゃんたちが口を揃えて「津波が来るから上がらなきゃ」と言った。そこで周囲の家4～5軒みんなで高台にあるお稲荷さんの方へ急いで避難した。(歴史地震研究会ホームページ（歴史地震・第22号（2007）「1945年三河地震における事前避難について」林能成、木村玲欧）
			形原	引き潮と土地の隆起の目撃証言	・昔は島と陸は離れていたけれど，地震のせいで地盤が盛り上がってしまって、海の潮が引いたときに島と陸がつながってしまった。陸から島へいけるような道になってしまった。（三河地震Q＆A）
			形原	水位変化と地盤沈下の目撃証言	・形原漁港のあたりの、海の水位が高くなり、今の太陽の家やハーバーサイドゴルフのあたりの、水位がかなり低くなっていた。（三河地震Q＆A）
			下市	津波の目撃証言	・下市に津波が来た。（三河地震Q＆A）
			下市の港	水位変化と地盤沈下の目撃証言	・下市の港はへこんだんです。東側ですから、音羽や出屋敷の港の方があがったです。当時、津波がくるぞという声も聞こえたし、その後は潮の満ち引きが大きくなった。昔は大風でも道まであがることはめったになかったが、盆潮がくると、道までくるようになってしまった。・・・1メートル近く低くなったと思います。（わすれじの記）
			林光寺付近（形原町）	津波の目撃証言	・家の前の、林光寺の坂は、平らな道が坂になった。私の家の前が、海だった。・・・形原町の被害は大きく、死者は211名　私の家の周りは、ほとんど海で、地震と津波で、海が沈んでいった。実際に、知っている人は、もうほとんどいません。（三河地震Q＆A）
			蒲郡市内	引き潮と土地の隆起の目撃証言	・「津波が来るから、みんな山へにげろー」と、逃げようとしました。大きい音を、たてててゴーゴーと、鳴りました。海を、見たら、津波ではなく、逆にすごい勢いで引いていきました。土地がすごく高くなったからです。魚市場は、すぐ海だったみたいです。（三河地震Q＆A）

表３－３－２　津波を目撃したことについての言い伝えや証言（２）

西暦	旧暦	市町村	地名	言い伝えの概要	津波による言い伝えや証言
1960.5.24	昭和35.5.24	豊橋市（太平洋岸）	伊古部	津波の目撃証言	・昭和35年のチリ地震の際には、通常の高潮より1m上がり、海岸道路付近まできた。地引網の漁船（愛知県漁連から準会員として登録している地元の有志で所有している船）が伊古部の海岸にあり、その船は引き揚げたため、特に被害はなかった。（西七根地区住民より聞き取り）
		豊川市（三河湾沿岸）	御馬地区	津波の目撃証言	・1960年のチリ地震のときは、御津町役場に勤務しており、御馬港をみにいった。御馬の港では、大潮（満潮）の時は防波堤のあるところまでくることもあるが、チリ地震でもその満潮時のところ（防波堤の地面まで）まで水位があがってびっくりした。地震によるものか満潮によるものかはわからないが、潮が増したことはまちがいなく、また引きも何度かあり、一日に何度か満ち引きがあった。港に特に被害はなかった。（御馬地区住民より聞き取り）
2010.2.28	平成22.2.28	田原市（太平洋岸）	赤羽根	津波の目撃証言	・愛知県田原市の赤羽根漁港では、七十代の男性が「満潮に向っているのに潮位が急激に下がった。漁を三十年以上していて初めて」と驚いた。（中日新聞（2010.3.1））
2011.3.11	平成23.3.11	田原市（太平洋岸）	川尻	津波の目撃証言	・東日本大震災の時は、4時まで郷土資料館におり、そこから川尻に帰ってみていたが、30分間に2mあがっていた。ちょうど5月の最満潮と12月1月（夜11時12時）の最干潮との差くらいに潮が30分くらいであがってきた。当時4時半くらいが干潮だったためよかったが、満潮のときにきたらまずかったと思う。（川尻地区住民より聞き取り）
			赤羽根	津波の目撃証言	・両船とも海水に浸かったせいで電気系統がだめになった。廃船にするという。関係者は「昨年2月のチリ地震では70センチの津波に襲われたものの、被害はなかった。今回は1メートル以上の津波が2回（1.6メートルと1.2メートル）も襲った。あらためて津波の怖ろしさを知った」と口をそろえた。同漁港を管理する愛知県外海漁協の吉武正康組合長は「決して港湾施設や繋留法に不備があって起きた転覆事故ではない。津波は本当に怖ろしい」とくちびるを噛みしめた。（東愛知新聞（2011.3.13））

（３）津波の避難体験（被害実態も含む）からの教訓

津波の避難体験（被害体験も含む）は７件あるが、いずれも津波の避難では必死に逃げるということが生死を分ける条件と伝えている。例えば、嘉永 7(1854).11.4-5 の津波では、「一家は地震の後の津波を予想し、常光寺に駆け出したが、女房が転んだ時に、何気なしに浜の方をみると、山のような高波が押し寄せて来るのでもうだめかと観念したが、無事に避難することができた」という堀切の住民の談がある。

特に、避難が少しでも遅れれば、津波の被害にあうことを伝えており、嘉永 7(1854).11.4-5 の津波では、「可愛がっていた猫と一緒に逃げようとうろうろしているうちに大波で命を落とした」という堀切のおばあさんの話や、「もうすぐ織り上がる反物を捨てて行くことに心を引かれ、再び機織に向かっているうちに、押し寄せた大波で溺れ死んだ」という堀切の女の人の話などの言い伝えも残っている。

「津波てんでんこ」は、このような津波避難の心得を示すものであり、次の３点を防災教育や防災訓練の中で徹底して貫くべきとしている。

①津波は猛烈に速い。素早く立ち上がり、全力で逃げるが勝ちと心得よう。

②命より大切なものはこの世にない。津波のときの物欲は命の敵、自分自身の敵と心得よう。

③情報を考えた対処と避難訓練。津波はいつでも我々の意表を突いて押し寄せてくるものと心得よう。

東三河地域における過去の津波体験は、「津波てんでんこ」の心得を具体的に表現しているものであり、如何に素早く、全力で逃げるかという津波避難の教訓を東三河地域の人々に伝える記録であると思われ、貴重な言い伝えである。

表３－３－３　津波の避難体験についての言い伝えや証言

西暦	旧暦	市町村	地名	言い伝えの概要	津波による言い伝えや証言
1707.10.28	宝永4.10.4	豊橋市（太平洋岸）	白須賀、二川	津波からの避難体験	・観音様のお告げ　宝永4年(1707)岡山藩主池田綱政は、江戸から国元へ帰る途中、静岡県の白須賀宿に泊まった。その夜のこと、綱政の夢の中に岩屋の観音さまが現れて、「綱政よ、今夜遅く大津波が押寄せてくるから、早く立ち去るがよい。」と告げた。綱政は、日ごろから厚く信仰している岩屋の観音様のありがたい「お告げ」だと思い、家来とともに二川宿へ向かった。その夜、大津波は白須賀宿を襲い、被害は、甚大で目をおおうばかりだった。綱政は、あやうく大津波の難をのがれることができたため、ますます岩屋の観音さまを深く信仰するようになったといわれている。綱政は、このときのお礼として観音経、絵馬、黄金灯籠などを寄進している。（校区のあゆみ　二川）
1854.12.23-24	嘉永7.11.4-5	田原市（太平洋岸）	堀切	津波からの避難体験	・中村の角左衛門には、9才の源蔵と5才の政平の2人の伜があった。一家は地震のあとの津波を予想し、源蔵に仏壇の本尊様と御先祖の位牌を背負わせ、女房は幼い政平を背に常光寺山に向かって駆け出した。・・・・女房が転んだ時、何気なしに脇の下より浜の方を見ると、山のような高波が押し寄せて来るのが見えたので、もうだめかと目をつぶり観念していると、夫の角左衛門が手を引っ張って起こしてくれたので、無事に避難することができた。一度にどっと押し寄せた津波は、多くの家を壊し沖へ去って行ったが、その引く潮の高さに遮られ沖に浮かぶ神島の島陰が隠れてしまったということである。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（荒木保作氏談、母は政平の娘）
			堀切	津波からの避難が遅れた人の言い伝え	・村に「猫ばあさん」と渾名される猫好きの人がいた。津波が来ると隣家の人にいわれ、山へ逃げようとしたが、あまりの大地震に脅えたのか、可愛い猫が庭の木に駆け上がったまま、いくら呼んでも下りて来ない。それでも猫と一緒に逃げたいと木の下でうろうろしているうちに、大波に巻かれて命を落としてしまった。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（小久保進氏談）
			堀切	津波からの避難が遅れた人の言い伝え	・機織りの得意な女の人が、朝早くから機織（はたご）に向かって一生懸命反物を織っていた。もうすぐ一反織り上げようとした時、天地が鳴動し大地震が起こった。人々は、津波の来ることを感じすぐに常光寺山へ逃げようと誘ったが、もうすぐ織り上がる反物を捨てて行くことに心を引かれ、なんとか仕上げようと再び機織に向かっているうちに、押し寄せた大波に流され家の井戸にはまって溺れ死んでしまった。（渥美町郷土資料館　研究紀要第7号（清田治））（小久保進氏談）
			堀切	津波からの避難待機体験	・「十一月四日大地震、一時の間に大津浪、在家の者平常仮小屋を立て住うなり。当寺より、米湯施す。又、米三合宛施す。」堀切村の人々は、津波襲来の時、殆どの者が和名山へ逃げ、村の復旧するまで山に小屋掛けをして不便な仮住まいをしいられた。領主は、被災者救済を中山村陣屋役人に命じ、全壊の家には家族一人に米一升六合、半壊の家には一人米八合、浸水の家には、二～四升を与えた。また、菩提寺である常光寺も、米三合の他に粥などを用意した。被災者にとって毎日寺より施される食べ物には、心から感謝し、山へ小屋掛け常光寺様で　お粥よばれたいつ忘りょと後々まで語り伝えていた。（渥美町の民族探訪）（堀切村常光寺の住職が書き留めた記録）
1944.12.7	昭和19.12.7	蒲郡市（三河湾沿岸）	西浦	津波からの避難体験	・12月の東南海地震の時は、家が突然ゆれたので、びっくりして表にでて、家がゆれているのを立って見ていた。周囲を含め、被害は全くなかった。・・・東南海地震のときには、おばあさんたちも高台へ上がれとは言わなかったように記憶している。水が沖に引かなかったからかもしれない。（歴史地震研究会ホームページ（歴史地震・第22号（2007）「1945年三河地震における事前避難について」林能成、木村玲欧））

（４）津波被害による名称の言い伝えからみる教訓

津波被害による名称の言い伝えは３件あり、地域名にまつわるものが２件、寺院名にまつわるものが１件であり、すべて伝承である。地域名では、豊橋市の「小浜」は津波被害をうけて再建した小さな浜辺の村という言い伝え、田原市の「小塩津」は以前越津という港の地名であったが、地震により海底に沈み、難を免れた人が北へ避難して地名を現在の地名に変更したという言い伝えがある。また、寺院名では、豊橋市の小池町にある「潮音寺」は以前長円寺という名前であったが、大地震で押し寄せてきた津波が長円寺の下で止まったことから、「海の潮の音が聞こえる寺」として、潮音寺と呼ばれるようになり、寺の周辺を「ここまで潮が満ちてきた」という意味で「潮満（現、塩満）」と呼ぶようになったとの言い伝えがある。

「津波てんでんこ」は、津波は、地震そのものや台風などと違って、災害間隔の長い災害でどんどん風化していくため、この風化に歯止めをかけるには人間社会の意識的、持続

的な努力が必要になるとしている。東三河地域での津波被害による地域や寺院の名称は、伝承ではあるが、津波被害をうけたことを地名や寺院名によって身近な生活の中に示しており、住民意識の風化防止に繋がるものとして、貴重な言い伝えである。

表３－３－４　津波による名称についての言い伝え

西暦	旧暦	市町村	地名	言い伝えの概要	津波による言い伝えや証言
827.8.8	天長4.7.13	田原市（太平洋岸）	小塩津	津波による地名の変更	・荒波の寄せる表浜海岸には入江もなく、避難する処がないと言われていますが、その昔小塩津が難崎と呼ばれていた頃には、磯岩が沖合はるか湾曲して続き入江となり、波も静かに風光もよく、伊勢へ渡る舟にとって喜ばれる港だったそうです。戸数も三百、よい港街であったと思われます。大宝二年持統上皇がこの地方を御巡幸の砌りこの海岸の眺が大変お気に召したとも伝えられ、その時の御言葉により日吉神社が勧進され村の名も越津と改めたと伝えられています。 ところが淳和天皇の御代天長四年（827）七月十三日この地方に大地震が起こって越津の海岸は大陥没、美しく湾曲していた磯岩も賑やかだった家並も半分過ぎ海底に沈んでしまいました。危く難を免れた人たちは北へ避難して地名も今の小塩津と改めたと伝えられています。正福寺も日吉神社もまたこの時今の地に移ったそうです。（渥美町の伝説）（小塩津日吉神社の由緒より）
不明	不明	豊橋市（三河湾沿岸）	小池町	津波にまつわる神社名の言い伝え	・あくる年に、三河に大地震があったそうじゃ。七月九日じゃと言われとるがのう。三河のあちこちで、うちはぶっつぶれるし、海辺の村にゃあ津波がくるし、そりゃあ、えれえことじゃった。（省略）村の衆は、われ先にと逃げてしもうた。どん作は、「そうじゃ、こんな時こそ、長円寺の観音様に助けてもらおう。」と言うて、長円寺の観音堂の前にひれふして、「観音様、どうか津波を止めてくだせえ。おらんとうの田畑やうちを守ってくだせえ。おねげえでごぜえます。」と、くりかえしくりかえしお祈りしたんじゃと。（省略）おしよせてきた津波が、ふしぎなことに、長円寺の下までくると、止まったんじゃと。（省略）「長円寺は、おらが村のだいじなお寺じゃ。」と言うて、みんながお参りするようになった。（省略）お坊さんをてあつくほうむって、みんなで力を合わせて、長円寺をりっぱなお寺に建て直してのう、新たに仁王門も作った。長円寺の下で津波が止まったということで、そのあたりの土地を、村の衆は『ここまで潮が満ちてきた』ちゅう意味で、潮満（しおみち）とよぶようになった。後に塩満と書くようになった。（省略）『海の潮の音が聞こえた寺』ちゅうことで、長円寺は、いつしか潮音寺と呼ばれるようになった。地震と津波のあった七月九日を潮音寺のおまつりの日にした。（豊橋市立福岡小学校ホームページ）
			中野（小浜町）	津波にまつわる地名の言い伝え	・「地しんだ!!」二人が立っておれん程の大地しんだ。浜で腹ばいになっとると、沖の方でコーツという音がする。「津波だ!!」「こりゃあ、こうしちゃあおれんぞ。早く高いとこへ逃げろ。」「津波だあ、津波だあ!!」（省略）津波がひいてから、しょぼしょぼと、もどってみると、土台の石だけを残して、建物も道具もごっそりと、津波が海へさらって行ってしもうた。「おみよ、縁の下の銭が残っとるかも知れんぞ。」どろをよけて、かめをうめた所をほってみると、「やい、銭だけは、全部残っとるぞ!!」「よかったのん。それだけありゃあ、小さなうちが建つらあ。」（省略）この小さな浜辺の村も、昔通りの平和な村になってのう。小さな浜辺の村ちゅうことで、小浜村ちゅう、名になったそうな。（豊橋市立福岡小学校ホームページ）

東三河津波歴史調査
研究業務報告書

発行日	平成 24 年 2 月
発行	東三河地域防災研究協議会
	（事務局　豊橋市総務部　防災危機管理課）
	〒440-8501　豊橋市今橋町 1 番地
	ＴＥＬ　0532-51-3116
	ＦＡＸ　0532-56-2122
	E-mail：bousaikikikanri@city.toyohashi.lg.jp
調査機関	社団法人東三河地域研究センター